

文学研究科史学専攻

博士学位論文

カンボジアにおけるマレー人の活動
—16 世紀～19 世紀を中心に—

2017 年 11 月提出

遠藤 正之

目次

表一覧	iii
地図一覧	iii
重量・貨幣価値換算表	iv

序章

1. 問題の所在	1
2. 16 世紀～19 世紀にかけてのカンボジアのマレー人 — 先行研究とその問題点 —	3
3. 利用する史料	5
4. 全体の構成	6

第 1 章 歴史的背景：カンボジアと海域世界 — 14 世紀～17 世紀前半まで —

1. カンボジアの生態環境と交易活動	9
2. カンボジアと海域世界の関係 — 16 世紀まで —	13
3. オクニャ・ラクサマナの活動 — 16 世紀カンボジアにおけるマレー人の活動 —	15
4. 17 世紀前半のカンボジア	17

第 2 章 カンボジア王ナック・チャン（在位 1642～1658）のイスラーム改宗とマレー人の交易活動 — VOC との関係をとおして —

はじめに	21
1. パタニ並びにジョホールの隆盛とカンボジア	22
2. カンボジアにおけるオランダ人の活動とマレー人・華人との関係の強化	23
3. ナック・チャンの即位とイスラーム改宗	25
4. カンボジア王権とオランダ人の関係の一時的中断とその再構築	28
小括	32

第 3 章 カンボジア・VOC 間通商平和条約締結（1656～1657） — カンボジア王権と VOC の交易独占の試みをめぐって —

はじめに — 問題の所在 —	34
----------------	----

1. カンボジアと VOC との関係再構築への動き — 1644 ～1656 —	36
2. 「第一次条約」のバタヴィアにおける仮締結とその後の交渉	38
3. 「第一次条約」の内容とその意義	43
4. 「第一次条約」締結後の VOC・カンボジア間交易関係	45
小括	46

第4章 「1658年反乱」とその後のカンボジア・VOC関係 — マレー人の役割 —

はじめに	49
1. 「第一次条約」締結から1658年に至るカンボジアの状況	49
2. 「1658年反乱」	
2-1 南シナ海における華人船の活動とナック・ムントンのマレー人排除	51
2-2 反乱の終結と VOC の排除	53
3. VOC とカンボジアとの関係修復	58
4. 「第二次条約」の締結	61
5. 関係性構築後のカンボジア・VOC 関係	67
6. 「1658年反乱」後のカンボジアにおけるマレー人の活動	71
7. 1670年代カンボジアにおけるマレー人の復権	74
小括	77

第5章 18世紀～19世紀のカンボジアにおけるマレー人の活動 — ネットワークの再編と「チャーム・チュヴィエ」の登場 —

はじめに	81
1. 1670年代以降 — 内乱と王都周辺の交易活動の衰退 —	81
2. ハーティエンの勃興	86
3. シャム湾沿岸におけるマレー人の活動	88
4. 18世紀～19世紀にかけてのカンボジア内陸部におけるマレー人の活動	92
4-1 1782年のチャーム・チュヴィエの動向	93
4-2 トゥオン・アスミット＝トゥオン・パーの活動	94
4-3 1858年の「チャーム・チュヴィエ」の反乱	95
5. フランス植民地支配下のカンボジアにおけるマレー人の周縁化	97
小括	100

結論 — まとめと展望 — 104

表一覧

表 1. カンボジア及びシャム蘇木輸出量（1641～1663）	11
表 2. カンボジア、シャム、広南及びトンキン黒漆輸出量（1641～1663）	12
表 3. カンボジア発長崎入港各国船数	31
表 4. 長崎来航唐船地域別船数（1647～1670）	52
表 5. 17 世紀船舶メコン川遡行日数	54
表 6. シンガポール・カンボジア間貿易額変遷表（1854～1869）	98

地図一覧

地図 1. カンボジアの地理的構造と周辺	v
地図 2. カンボジアと海域世界	vi
地図 3. 17 世紀～19 世紀にかけてのカンボジア中心部	vii
地図 4. 17 世紀前半～半ばにかけてのカンボジアと東南アジア世界	viii
地図 5. 17 世紀後半～19 世紀にかけての東南アジア	ix
地図 6. 16 世紀～18 世紀のインドシナ半島	57
地図 7. ハーティエン勃興時（17 世紀末）のインドシナ半島南部	87
参考文献	108

重量・貨幣価値換算表

重量

1 斤=1 カティ=617.613g

1 ラスト=1 コヤン=20 ピコル=約 1,250 kg

1 タエル=1/20 カティ=約 30g

貨幣価値

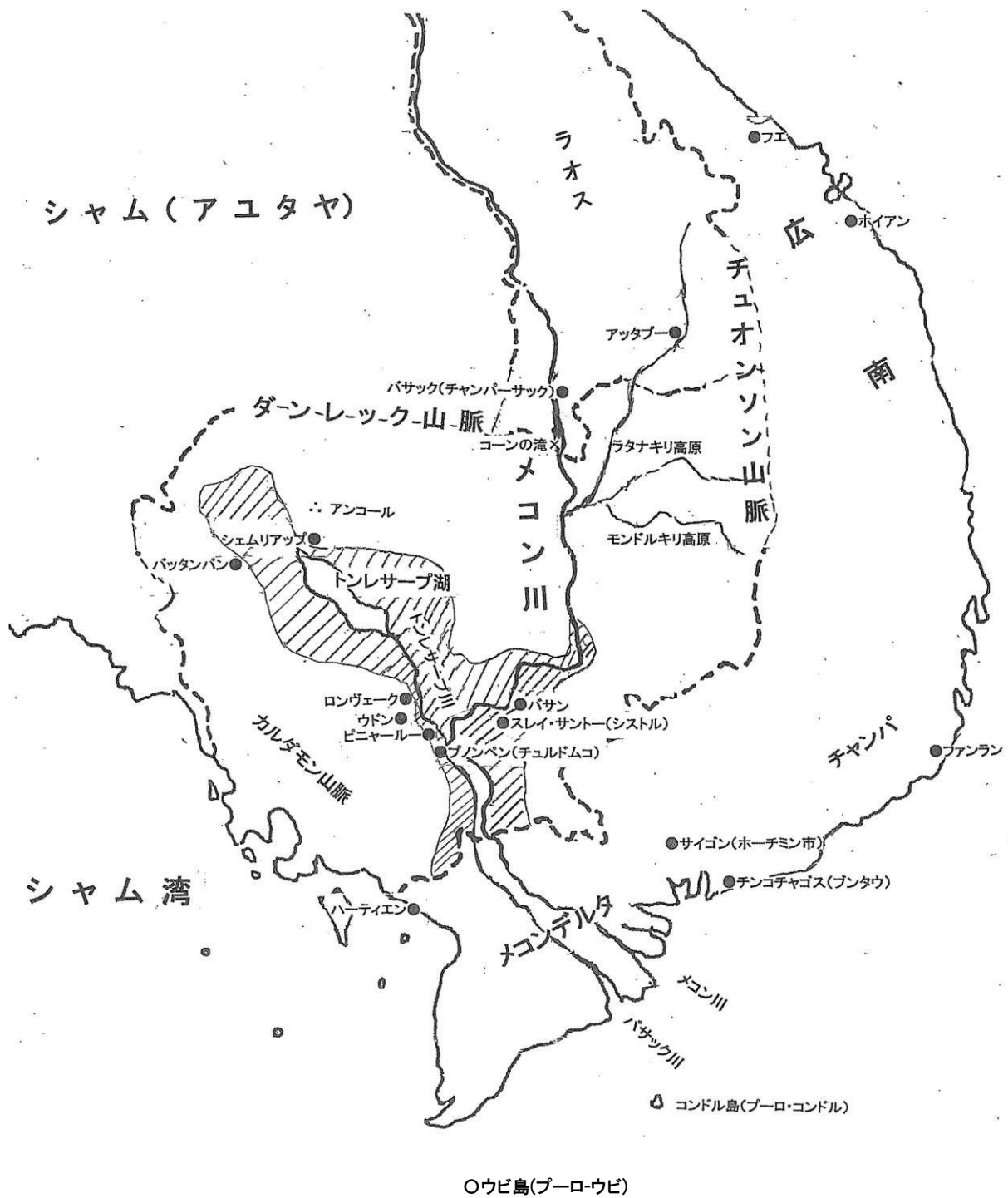
1 レアル=6 スタイフェル

1 ギルダー=20 スタイフェル=320 ペニング

1 レイクスダールデル=3 ギルダー

1 タエル (テール) =3 ギルダー

1 マース=1/16 タエル=約 9 スタイフェル



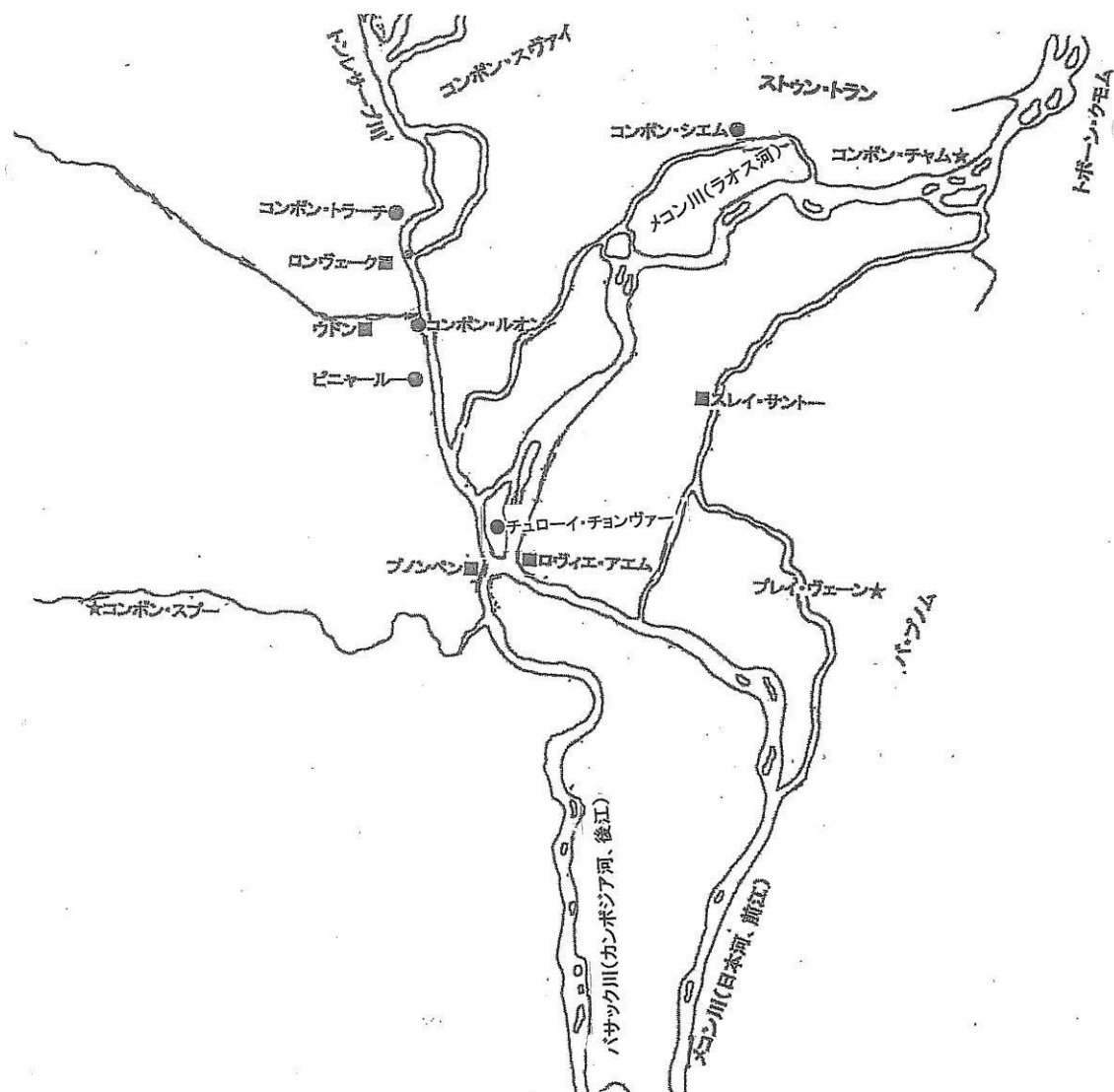
地図 1 カンボジアの地理的構造と周辺 (筆者作成)

※ ////////////// 雨季における洪水の範囲

----- 現在の国境線



地図2 カンボジアと海域世界（筆者作成）



地図 3 17 世紀～19 世紀にかけてのカンボジア中心部
 ([Mak Phœun 1995:497]に基づき筆者が作成)

- 本論文関係地名
- 王都が置かれた場所
- ★ 現在の主要な州都 (プノンペンを除く)



地図 4 17 世紀前半～半ばにかけてのカンボジアと東南アジア世界 [遠藤 2010:33]



地図 5 17 世紀後半～19 世紀にかけての東南アジア[遠藤 2014:33]

序章

1. 問題の所在

カンボジアは東南アジア大陸部のなかでも、マレー半島やマラッカ海峡に比較的近く、また内陸部とメコン川やトンレサップ川でつながっていたため、海域世界との交流が古くから盛んであった。カンボジアの米や水産物、森林生産物が輸出され、インド綿布や金属製品が持ち込まれた。本論文では、16 世紀～19 世紀のカンボジアと海域世界をつないだマレー人の活動について検討したい。該当する時代は、カンボジア史においては一般にポスト・アンコール時代、すなわち、アンコール王都の放棄（1431）後からフランスによる保護国化（1863）に至るまでの時期である。

これまで、ポスト・アンコール時代のカンボジアにおけるマレー人の活動は、あまり注目されてこなかった。その最大の要因は、ポスト・アンコール時代の捉え方と関係する。従来カンボジア史は、アンコール・ワットをはじめとする巨大石造建築物が次々に建てられた「アンコール時代（802～1431）」を、「繁栄と栄光の時代」としてきた。その後のポスト・アンコール時代は、その時代が終了した「衰退と暗黒の時代」というイメージで捉えられてきた。この一因として、植民地支配を実施したフランス当局が、カンボジアの支配を正当化するために、アンコール時代の「繁栄」をことさらに強調したことがある。1930 年代以降、フランスはアンコール遺跡の保存修復活動を積極的に行った。その背景にはアンコール遺跡群を保存修復すること＝アンコールの栄光を取り戻すことであり、それを行いうるフランスこそがカンボジアを支配できる、として植民地支配を正当化する目的があった[笹川 2006][藤原 2008]。

しかし近年、ポスト・アンコール時代のイメージは書き換えられつつある。15 世紀～17 世紀にかけての東南アジアでは、香辛料や森林生産物、さらにコメなどを求めた周辺世界の証人の来航が増え、商業活動が活性化した「交易の時代」を迎えた。東南アジア諸地域に交易活動を権力基盤とする王国が台頭し、支配者たちは交流をとおして富や新たな思想・技術を獲得し、権力の強化に努めた[Reid 1993:202-206][弘末 1999:102-117]。カンボジアも例外ではなかった。16 世紀後半～17 世紀半ばにカンボジア王は、華人、マレー人、日本人、ポルトガル人、オランダ人らと交易を行い、王権の強化をはかった。

このような現象は、当時の東南アジアに広く見られ、カンボジア以外の東南アジア大陸部でもシャム（アユタヤ）¹、ビルマ（タウンゲー・ペゲー）、広南（フエ）、トンキン（ハノイ）などの諸国家が交易活動に熱心となった。こうしたなかで、カンボジアでは大陸部の他地域よりも、マレー人が活発に活動したように思われる。マレー人の「マレー」とは、元来スマトラ及びマラッカ海峡地域を指す地理的概念であった。その後、15 世紀半ばにマラッカ（ム

ラカ)王国のイスラーム化に伴い、「マレー (ムラユ) 人」という呼称が現れ、「マラッカに長期間居住してマレー語を第一言語として話し、スルタンに忠誠を誓う人々」のことを指すようになった[Reid 2001:298]。1511 年のポルトガルによるマラッカ占領後、マラッカに居住していた商人たちは、ポルトガルの高関税政策を嫌って東南アジア海域世界に拡散した。これらの商人は、イスラームを信奉し、マレー語を話し、マラッカ時代の商業慣習を共有していたことから、移住先では単純に「マレー人」と呼ばれるようになった[Sutherland 2001:418-419] [Nishio 2009]。元来マレー人は多様な出身地の人々よりなり、また移動先の人々と文化的・血縁的に混淆したため、その後マレー語を用いることができるムスリムをマレー人と呼ぶことが一般化した[Reid 2001:301]。

「マレー人」は 16 世紀後半までにはカンボジアに来航し、交易活動を基盤に軍事力も行使し、カンボジア王権に少なからぬ影響を及ぼした。1642 年に即位した国王ナック・チャン (在位 1642~1658) は、マレー人との関係強化をもくろみ、イスラームに改宗した[Casteleyn 1669:25]。マレー人はカンボジアに限らず、アユタヤをはじめ東南アジア大陸部各地の港市で活発に活動していたが、国王がイスラームに改宗した事例は、住民の多数が上座仏教を信奉した地域ではカンボジア以外に見られない。なお、その後ムスリムが王位に就くことはなかったが、マレー人は植民地支配に服する 19 世紀後半まで、社会的に少なからぬ影響力を行使した。こうした事象の背景をなす要因は何か、カンボジア史を考察するうえで重要なテーマとなる。

また、カンボジア側の史料である『カンボジア王朝年代記』(以下『年代記』と略称)にも、マレー人の活動がしばしば現れる。『年代記』は、18 世紀末に王位にあり、今日の王家につながるとされるアン・エーン王の家系の正統性を示すために編纂されたもので、14 世紀~18 世紀末以降の当代に至る王統記である。マレー人は、「チャーム・チュヴィエ (チャム人・マレー人)」という呼称で、チャム人 (ベトナム南部に存在したチャンパ王国の末裔とされる人々) とまとめて表現される。彼らは、チャンパ王国からの移住者たちと、マレー系の人々が婚姻などを通じて融合し、形成したとされる[Mak Phœun 1990:47-48]。有力な外国人勢力としては、マレー人以外にも華人やポルトガル人などが存在するが、彼らに関する記述は『年代記』にほとんど現れない。

さらに『年代記』の記述におけるマレー人の描かれ方の変遷にも、注目する必要がある。18 世紀末以前の記述において、マレー人は王権に反抗する者、王を籠絡してイスラームに改宗させた勢力として、否定的な記述をされていた。それが、18 世紀末以降に入ると、王権のために積極的に働く者として描かれてくるのである。後に述べるように、歴史的には王権とマレー人との関係は、『年代記』の記述とはむしろ逆の展開を見せる。すなわち、18 世紀までは王権と親密な関係にあったマレー人が、18 世紀以降は王権を離れて独自の動きを見せるようになるのである。なぜそのような乖離が生じてくるのか、カンボジア王家によるマレー人の位置づけを検討するうえで、重要な問題である。

本論文は、以上のような問題意識に基づき、16 世紀～19 世紀のカンボジアにおけるマレー人の活動を明らかにすることを目的とする。

2. 16 世紀～19 世紀にかけてのカンボジアのマレー人 ― 先行研究とその問題点 ―

「ポスト・アンコール時代」は約 430 年に及ぶが、大きく前期（16 世紀～17 世紀）と後期（18 世紀～19 世紀）に分けることができる。

前期は、カンボジアが「交易の時代」にあり、繁栄を謳歌した時代である。当時のカンボジア王都には、華人、マレー人、日本人、オランダ人、ポルトガル人、ラオス人、コーチシナ人、イギリス人、デンマーク人など多様な人々が来航した。この時期については、前述したように、「衰退の時代」とされてきたポスト・アンコール時代のイメージを書き換える研究が、特に 1990 年代以降登場するようになった。

まず、フランス在住のカンボジア人歴史家、マック・プアンの一連の研究がある。マック・プアンは 1987 年のコペンハーゲン大学におけるチャンパセミナーにて、「カンボジアにおけるチャム人共同体—15 世紀～19 世紀まで」という発表を行い、論文として公刊した[Mak Phœun 1988:83-93]。これは、主に『年代記』の記述に依拠し、チャンパからカンボジアへのチャム人移住には大きな「3 つの波」― ①1471 年の黎朝の遠征による首都ヴィジャヤ陥落によるもの、②1692 年の広南阮氏によるファンラン征服によるもの、③1832 年～1835 年に起きた阮朝に対する反乱鎮圧に伴って起きたもの―があったとする。それにより移住してきたチャム人の活動が、カンボジアに少なからぬ影響を与えたことを論じた。さらに彼は、1990 年には「カンボジアにおけるマレー・ムスリム共同体—16 世紀末からムスリム王ラーマーディパティ 1 世まで」を発表し、16 世紀末とイスラームに改宗した国王の治世（17 世紀半ば）という二つの時代がカンボジア史においてチャム人・マレー人が最も活発に活動した時代とする[Mak Phœun 1990:47-68]。さらに、同人の 1995 年の著作は、『年代記』を駆使して 16 世紀～18 世紀のカンボジア史を再構成したもので、前二論文をもとに、マレー人がカンボジア史のなかで一定の影響力を有したことを論じる[Mak Phœun 1995]。

しかしながら、以上の諸論考は、史料を『年代記』に依拠し、さらに『年代記』諸写本のなかでも、最も編纂年代の新しい「VJ 本」（1903 年にノロドム王の命によって編纂が始まり、1934 年に完成）を無批判に利用しているという問題が指摘されている[北川 2008:2]。また、史料としての『年代記』の性格ゆえに、カンボジア王をめぐる事件史の側面が強く表れている。当時カンボジア王にとって重要な交易に関する分析は、不十分なままに留まっている。このため、マレー人がなぜカンボジアにおいて侮れない勢力になっているのかについて、検討が十分なされていない。加えて『年代記』の「チャーム・チュヴィエ」の表現に引きずられ、マレー人とともにチャム人の役割を重視している。

また、北川香子も、『年代記』の記述を中心に、日本語史料やベトナム史料などとも比較検討しながら、16 世紀後半～18 世紀のカンボジア史を考察した[北川 1994;1999;2000;2001a;

2001b;2006;2008;2015]。マック・プアン、岩生成一、クラーンらの研究成果を踏まえ、当時のカンボジアは衰退期ではなく、交易活動を背景に繁栄していたことを示す。ただし、こちらにも依拠している史料がかなりの部分『年代記』であり、マレー人の問題については、『年代記』に現れるチャーム・チュヴィエの情報の紹介と整理に留まっている[北川 2008:1-16]。

他方、カンボジアをめぐる交易活動に具体的情報を提供してくれるオランダ語史料を活用した最近の研究として、クラーンの著作[Kraan 2009]がある。同著はオランダ国立公文書館所蔵のオランダ東インド会社関連未公刊文書を駆使し、ポルトガル人の対日交易参入をめぐるオランダ東インド会社とカンボジア国王が対立し、1643 年 11 月のオランダ商館長虐殺事件と、その後 1644 年 6 月 12 日のプノンペン前面でのオランダ艦隊とカンボジア軍との戦闘に至るまでの過程を叙述する。当時のカンボジアに関する広範な情報を提供してくれる労作であるが、あくまでもオランダ人の視点から上述の事件をまとめている。カンボジア側のオランダに対する複合的な意向は軽視され、「17 世紀のカンボジア王国は、偉大なアンコール帝国のおぼろげな残影に過ぎなかった」とし、ポスト・アンコール時代を衰退期とする従来の歴史観をそのまま受け入れている[Kraan 2009:1]。

一方後期に入ると、カンボジア王権はシャムとベトナムの両隣国の干渉を受けるようになり、次第に弱体化していく。「衰退の時代」としてのポスト・アンコール時代は、まさにこの時期に相当する。衰退期ゆえか、この時代に関する研究はそれほど多くない。在仏のカンボジア人研究者クン・ソックの研究[Khin Sok 1991]の他、先に挙げた北川香子の研究のなかで触れられている程度である。同時期のマレー人の活動について、これらの研究はほとんど触れていない。

カンボジア王権の衰退の結果、それまで王権と結びついて活動していたマレー人や華人たちは、次第に王権から離れて独自の動きを示すようになる。そうした事例として、シャム湾に台頭した港市ハーティエンでの活動が挙げられる。ハーティエンをめぐる先駆的研究として、漢籍史料を用いた藤原利一郎のものがある（[藤原 1986]に所収）。さらに、桜井由躬雄と北川香子は 1999 年の論文で、ベトナムの漢文史料とカンボジアの『年代記』を併用してハーティエン史叙述を試み、従来知られていなかったカンボジアの在地勢力とハーティエン鄭氏との関係を明らかにした[Sakurai&Kitagawa 1999]。北川はその後の研究でも、シャム湾東部の歴史的展開のなかに見られるハーティエン勢力の特色について、分析を行っている[北川 2001b]。ただし、これらの研究では、ハーティエン鄭氏が広東系華人であるため、華人の活動を主に扱い、マレー人をはじめとするその他の勢力をめぐる議論は不十分である。この結果、東アジアとの関係が重視され、その他の地域との関係の考察は不十分なままにとどまり、カンボジアが有してきた海域世界とのつながりが、一面的にしか見えてこないように思われる。

これらの問題点を踏まえ、本論文では、ポスト・アンコール時代前期に、パタニ、マラッカ海峡域のマレー人がカンボジアと交易活動をとおして、この地に拠点を構え、軍勢力も行

使して王権に少なからぬ影響を与えるに至ったこと、また後期には、王権が衰退するなかでも、彼らがカンボジアにおいて一定の影響力を維持し、海域世界との交易活動において重要な役割を担い続けたことを論じたい。

3. 利用する史料

この時代のカンボジアを考察するにあたって利用可能な史料は多くはない。本論文ではマレー人を考察の主要な対象とするが、カンボジアに在住したマレー人やその子孫が記述した史料は、現在その存在が知られていない²。この問題を考察するに当たって利用可能な史料は、カンボジア側の史料及び 17 世紀から 19 世紀にかけてカンボジアに来航した外国人の記録である。

カンボジア側の史料とは、上記の『年代記』である。これには複数の写本が存在する。主要なものとして、1818 年にアン・チャン王の命によって官人ノンが編纂した「ノン本」、1878 年にヌパラット王子が編纂した「ヌパラット本」、1883 年以前に編纂され（編者は不明）、ジャン・ムーラが仏訳した「ムーラ本」、前述した「VJ 本」などがある[北川 2001a:129-132,134-137]³。記述が王家にかかわる事象に限定されるが、カンボジア王権の正統性を語るものとして重要である。ただし、19 世紀以降の編纂物であるため、それ以前の状況を考察するための史料としては、厳密な史料批判を行う必要がある。

一方、同時代史料として、外国人が残した文書がある。当時のカンボジアには、マレー人や華人のほか、オランダ人、日本人、ポルトガル人、スペイン人など、多様な外国人が来航した⁴。特に、オランダ東インド会社（Vereenighde Oost Indische Compagnie; 以下 VOC と略称）の文書を中心としたオランダ語史料は、オランダ人が拠点を構えた 1630 年代から 1660 年代にかけてのカンボジアの交易活動について豊富な情報を提供してくれる。オランダ人の主たる関心が交易にあったため、宗教・文化面に関する言及は少なく、かつそこにはオランダ人のバイアスが反映されているが、当時の状況を伝える極めて貴重な記録である。主要なものとして、『渡来文書（Overgekomen, Brieven en Papieren）』『バタヴィア城日誌（*Dagh-register, gehouden int Casteel Batavia*）』『外交文書集（*Corpus Diplomaticum*）』『一般政務報告（*Generale Missiven*）』『ゼーランディア城日誌（*De Daghregisters van het Kasteel Zeelandia*）』などがある⁵。また、1650 年代の一時期には、イギリス人もカンボジアに来航して活動しており、オランダ人の記録と比較することで、多くの情報を得ることができる。18 世紀～19 世紀についても、カンボジアに来航したイギリス人やフランス人の記録に、当時のカンボジアに関する情報を見出すことができる⁶。

さらに、17 世紀後半～18 世紀前半にかけての重要な史料として、『華夷変態』を挙げることができる。これは長崎奉行が唐通事を通じて行った、華人船の船員に対する聞き取り調査の記録（「唐人風説書」）を幕府の儒者林家が逐次編纂した海外情報集である[大庭

1999: 66-67]。カンボジアを含む当時の東南アジアについても多くの情報を含んでおり、他の史料と比較検討することで、当時の状況に対する豊かな情報を得ることができる。この他、『大南寔録』『嘉定城通志』『暹羅国路程集録』などのベトナム史料や、スマトラ東岸のシアク王国の王統記 *Hikayat Siak* (『シアク王統記』) やジョホール・リアウ王国のブギス人副王の王統記 *Tuhfat-al Nafis* (『貴重な贈り物』) などのマレー語史料にも、当時のカンボジアに関する情報が見られる。

『年代記』だけでなく、多彩な史料を活用することで、カンボジアにおけるマレー人の活動に多角的な光があてられるように思われる。

4. 全体の構成

本論文は、マレー人の各時期における活動を考察するために、5章から構成される。

第1章では、カンボジアの地理的環境を概観し、この地域で産する米や水産物、森林生産物が、古くから海域世界に輸出されていたことを述べる。そうしたなかで遅くとも16世紀には、マレー人がカンボジアと海域世界との間の交易に参入していたことを示し、16世紀末には、彼らのなかからカンボジア王権に大きな影響力を行使した人物が現れたことを論じる。その後、17世紀前半期(1630年代まで)の朱印船貿易の展開により、カンボジアにおける交易活動はいっそう活発化し、王権が強化され、マレー人の活動もさらに活性化したことを指摘する。

第2章では、オランダ人の来航とカンボジア王権及びマレー人との関係について論じる。国王は、交易有力勢力のマレー人やムスリム華人との関係強化をはかって、イスラームに改宗した。その後、独占交易を志向したVOCとカンボジアとの間で抗争が起こるが、マレー人が両者の間を仲介したことを指摘する。

第3章では、1656年～1657年にVOCとカンボジアが締結した通商平和条約(「第一次条約」と呼ぶ)を取り上げ、その締結の過程と条約の内容を検討し、同条約の締結交渉においてマレー人が果たした役割の重要性を示す。合わせて、そこに定められたカンボジア側のもくろみに焦点を当て、VOCの独占交易が成功しなかったことを明らかにする。

第4章では、マレー人重用に反発した王族の反乱(「1658年反乱」と呼ぶ)が成功した結果、新国王によってマレー人の活動が抑圧され、カンボジア王権が華人との結びつきを強めたことを明らかにする。しかし、台湾鄭氏及び対日本交易の衰退のなかで、VOCが覇権を形成しつつあった海域世界との関係再構築のために国王は、結局マレー人を復権させざるを得なかったことを指摘する。

第5章では、王族内の対立と広南やシャムの介入が連動し、国王が短期間で交代し、ロンヴェーク・ウドンとスレイ・サントーに王権が分裂することを述べる。内戦で荒廃した王都周辺に代わって、シャム湾沿岸に港市ハーティエンが発展し、マレー人の活動もシャム湾沿岸で盛んになり、それが内陸部と連動してネットワークの再編が行われたことを論じる。同

時に、その過程で、ベトナムからメコン川東岸流域に移住してきたチャム人とマレー人とが結び付き、「チャーム・チュヴィエ」と呼ばれる集団が形成されたことを指摘する。

なお、従来の研究では、16 世紀～17 世紀のカンボジア国王の名前については、『年代記』に記された名称で統一されている。しかしながら、同時代史料には『年代記』の国王名に一致する名称は見られない。本稿では、同時代史料に記された名称を重視し、特に 17 世紀のオランダ語史料の記述に依拠して国王名を記していくこととする。それに『年代記』で記されている名称を適宜比定することで、両者間の記述の統一をはかりたい。

¹ 現在のタイ。タイという国名は、1939 年に当時の首相だったピブーン・ソングラムがそれまで用いられていたシャムから改めたものである。17 世紀の史料では、現在のタイのことをシャム（サヤーム）と呼んでいるので、本論文でもこの呼称を用いる。

² 1990 年代末に筆者が現地にて実施した聞き取りによると、ポル・ポト政権下の弾圧と内戦時代の混乱により、多くの文書が失われたという。大川玲子は 2013 年の調査の際、埋められることで弾圧を逃れて現存することになったイスラーム文献を発見し、その内容を分析・紹介している[大川 2017:151-173]。しかし、同書を見る限り、彼らの歴史を語る文献は見られない。

³ このうち、ノン本については現存する三写本の中にローマ字写本が存在し、これをドゥダール・ド・ラグレが仏訳し、フランシス・ガルニエが 1871 年、1872 年に *Journal Asiatique* に発表した[Garnier 1871:336-385;1872:112-144]。ヌパラット本については、二写本が現存し、そのうちバンコク国立文書館所蔵写本は、東京外国語大学の坂本恭章が、1995 年に KWIC 索引付きで出版した。さらに坂本は同書を日本語訳し、これに上田広美が訳注、人名・事項辞典、系図を付し、『カンボジア 王の年代記』と題して明石書店から出版した[坂本・上田 2006]。ムーラ本については三写本が現存する。現在はケンブリッジ大学出版局からムーラ著 *Le Royaume de Cambodge. 2 vols.* がデジタルプリント版として復刻・出版され、第 2 巻に収録されている。VJ 本については、プノンペンに仏教研究所に写本が保存されていた。同写本は、ポル・ポト時代の混乱で行方不明となったが、東京のユネスコ東アジアセンターにマイクロフィルムの形で保管されている。この写本の冒頭から 1677 年までの部分は、マック・プアンとクン・ソックが仏語訳し、フランス極東学院から出版した[Mak Phœun:1981;1984] [Khin Sok:1988]。[北川 2003]も参照のこと。

⁴ 日本語史料として、朱印船・長崎貿易関係の文書があり、岩生成一らによって研究されてきた[岩生 1985]。スペイン・ポルトガル語史料としては、ピレスの『東方諸国記』[ピレス 1966]、モルガの『フィリピン諸島誌』[モルガ 1966]、コートの『第 12 デカダ:アジア第 5 冊』([グロリエ 1997:313-319]に翻訳が収録)、クルスの『中国誌』[クルス 2002] などがある。また、漢籍史料では、張燮の『東西洋考』[張 2000]が重要である。また、直接カンボジアに來航してはいないが、17 世紀にアユタヤを訪問したフランス人宣教師であるショワジの『シャム王国旅日記』[ショワジ 1991]、タシャールの『シャム旅行記』[タシャール 1991]、ジュールヴェーズの報告[Gervaise 1998]などにも当時のカンボジアに関する情報を見出すことができる。

⁵ なお、このうち VOC の本部十七人委員会に宛てた『渡来文書』のカンボジア関係のものは、多くが H.N.Muller、*De Oost-Indische Compagnie in Cambodja en Laos. 1636-1670* (1917) に収録されており、本論文ではそれを参照した。

⁶ 17 世紀末～18 世紀については、ダンピアの『世界周航記』[Dampier 1703;1705]、アレクサンダー・ハミルトンの旅行記[Hamilton 1930]にカンボジアに関する記述がある。19 世紀前半には、1820 年代にイギリス東インド総督の使節としてシャムとベトナムを訪問した、ジョン・クロフォードが当時のシャム湾沿岸の状況について報告している[Crawfurd 1830]。19 世紀半ば以降になると、フランス人を中心とした外国人がカンボジアに来航するようになり、そうした人々による記録が残る。代表的なものとして、フランス人宣教師ブイユヴォーの旅行記[ブイユヴォー 2007]、アンコール・ワットの再発見者として有名な探検家ムオの探検記[ムオ 2002]、カンボジアを訪問したイギリス人の報告書[ボニーマン&ヘルムズ 2007][マドラスの将校 2007]などが挙げられる。

第1章 歴史的背景：カンボジアと海域世界 — 14世紀～17世紀前半まで —

1. カンボジアの生態環境と交易活動

カンボジアは、モンスーン・アジアの一部をなし、おおよそ北緯 10 度～15 度にまたがる熱帯圏に位置する。国土の面積は 18 万 1040 平方キロで、日本の半分弱に相当する。

本論文で扱う近世のカンボジアは、現在のカンボジアとは領域面において多少の相違がある。17 世紀には、その領域は現在のカンボジアのそれに加えて、メコンデルタも含んでいた。また当時のカンボジア国王は、メコン川河口沖のコンドル島（プーロ・コンドル）を中心とした南シナ海までを自らの勢力圏とみなしていた。その後、ベトナム、シャム両隣国の圧力を受け、18 世紀末までにメコンデルタがベトナムに併合され、西北の二州（バットアンバン、シェムリアップ）はシャムの勢力圏に入った。カンボジアの領域が現在の形になるのは、フランスが西北二州をシャムから獲得した 1907 年のことである。なお、ラオスとの境目については、メコン川中流に存在するコーンの滝が伝統的な境界を作っており、この状況は 16 世紀からほとんど変わっていない。

今日の国土の 40%は平原であり、その大半がカンボジアの中央平原を形成する。タイ、ラオス、ベトナムの国境付近と、シャム湾沿岸から少し内陸に入った地域は山岳地帯であり、豊かな森林地帯となっている。一方、海岸線はシャム湾沿岸地域に限定されており、この地域にもわずかながら平野が広がる。

カンボジアを特徴づけるものとして、豊富な水量を抱える、ラオスからカンボジア東部を縦貫してベトナムに流下するメコン川をはじめ、国土のほぼ中央に存在する太湖トンレサープ、及びそこから流出しプノンペンでメコン川に合流するトンレサープ川がある。気候は熱帯サバンナ気候で、雨季と乾季が明確に分かれる。雨季は 6 月に始まり、8 月～9 月にかけてピークを迎え、大体 10 月に終わる。この時期、メコン川の流量は非常に増大し、流域は洪水で水浸しになる。同時に、メコン本流からトンレサープ川に大量の河水が流入し、トンレサープ湖に向かって逆流する。このため、トンレサープ湖は乾季の 6 倍もの面積にまで拡大する。一方、乾季は 12 月～5 月ごろまでで、特に 2 月～5 月にかけては非常に暑い日が続き、雨はほとんど降らない。

このような地理的環境と気候は、カンボジアに多くの恵みをもたらした。まず、山岳部の森林地帯は、中国や日本で需要があった皮革類や森林生産物を産出した。皮革類は、鹿皮、牛皮、水牛皮などが挙げられる。皮革類は、中国・日本向けに輸出された主要商品の一つだった。16 世紀後半～17 世紀前半にかけて、ゴアでポルトガル領インド政府の記録書記官を務めたディオゴ・ド・コートによれば、当時のカンボジアには牛、水牛、鹿が多数生息し、その毛皮が中国向けの代表的商品になっていた[グロリエ 1997:314]。これが 17 世紀に入ると、日本市場向けの主要産品となり、輸出量はさらに増大していく。

森林生産物は、沈香、安息香、麝香、肉桂、カルダモン、ウコンなどの香料と蘇木、漆、ラック、蠟、象牙、犀角などがある。このうち、沈香は、中国史料において古くからこの地域の進貢品としてしばしば登場し、貴重品として扱われ、日本では、その最上級品は伽羅木と呼ばれ、権力者に珍重された¹。中部から南部ベトナムにかけての地域に存在したチャンパ（2 世紀末ごろ～1835）の内陸部で産出される沈香が上級品として知られ、カンボジアにも山岳部からメコン川を通してもたらされた。一方、安息香、麝香、肉桂はインド、西方世界に輸出された。安息香についてリンスホーテンは、16 世紀末のインドで大量の需要があったことを伝える[リンスホーテン 1968:500-501]。カンボジアからの安息香も、相当量インドに流入していたと考えられ、17 世紀以降もカンボジアからバタヴィアへの主要輸出品の一つとして、オランダ語史料にしばしば登場する。蘇木は染料として珍重され、シャム（アユタヤ）のものが有名だったが、17 世紀半ばにはカンボジアも、シャムに次ぐ量を日本向けに輸出した（次ページ表 1 を参照）。

また、漆も日本市場向けの主要産品として、大量に輸出された（12 ページ表 2 を参照）。象牙は奢侈品、犀角は漢方薬の原料、ラックは薬種や染料の原料、蠟はろうそく・化粧品・つや出し剤の原料として、中国、日本、バタヴィアなどへ運ばれた。平野部ではメコン川、トンレサプ川の豊かな水を活用した稲作が盛んである。前出のコートによれば、当時のカンボジアではシャムと同様に浮稲栽培が行われており、大量の米を産していた[グロリエ 1997:314]。生産された米は、国内で消費されるにとどまらず、マラッカ海峡域やマレー半島、カリマンタン島および広南^{クアンナム}²などに輸出された。マラッカ海峡域やマレー半島、カリマンタン島の多くの港市にとって、カンボジアの米が重要であったことを示す記述が 16 世紀～18 世紀の史料に多数みられる [Hamilton 1930:51][B.W.Andaya & L.Y.Andaya 1982:104] [Vos 1993:37]。一方広南については、1630 年代に華人船や日本船が同地に大量の米を運んでいたことが、オランダ語史料に記録されている[Gaalen 1636:77,79,81]。広南の拠点である中部ベトナムは、平野部が狭く、農業生産力に限界があり、カンボジアの米が欠かせなかった。

また、メコン川、トンレサプ川およびトンレサプ湖は東南アジア有数の淡水魚の産地であり、漁業も盛んに行われている。獲った魚は、干し魚を筆頭に様々な形で加工され³、その一部は輸出された。17 世紀のオランダ語史料には、カンボジアの主要産品として（同史料では *cabos* と記される）しばしば登場する[Dagh-register 1663:339;1664:27]。海産物は、18 世紀以前のカンボジアがシャム湾沿岸とあまりつながりを持たなかったため、種類は少ない⁴。ただし、その中でも鮫皮は重要である。厳密には鮫ではなく、エイの一種の皮であるが、17 世紀前半の日本で装飾品として珍重され、特に刀の柄や鞘に大量に用いられた[岩生 2005:293]⁵。

年度	カンボジア	シヤム
1641	24,000	350,000
1642	13,905	
1643	39,710.5	435,000
1644		356,750.5
1646	3,500	
1648	9,700	2,650
1650	5,700	
1651	20,000+17140 本	
1652		300,000
1653	2,883+39824 本	14,204 本
1654	88,000+24630 本	6,600 本
1656	23,9040	380,000
1657	638,500	521,645
1658	26,800	817,800
1660	25,000	980,000
1663	20,000	275,000
合計	1156,738.5+81,054 本	4418,845.5+20804 本

表 1 カンボジア及びシヤム蘇木輸出量 (1641～1663)

([村上 1956;1957;1958][永積 1987]に基づき筆者が作成)

※単位は特に断りのない場合「斤」。「本」が単位に使われている場合はそれを併記した。
空欄は統計なしを意味し、0 を意味するものではない。

年度	カンボジア	シャム	クアンナム	トンキン
1641	7,000		759 ₍₁₎	650
1642	2,062.5			
1643	8,843			
1646	10,000			
1648	3,000			
1650	5,000+259 壺		20,900	16 壺
1651	19,400+352 壺		3,000	3,200
1653	1,062 壺	416 壺	19 壺	
1654	25,000	646 壺	32 壺	
1656	14,860	12,820		
1657	44,430+75 俵+186 樽+264 壺	200 樽		
1658	3,250	39,800+86 壺		
1660	1,500	14,780		
1663	60,000	4,400	15,700	
合計	204,215.5+1,937 壺+186 樽+75 俵	71,900+1148 壺+200 樽	40,350+51 壺	3,850+16 壺

表2 カンボジア、シャム、広南、及びトンキン黒漆輸出量（1641～1663）

（[村上 1956;1957;1958][永積 1987]に基づき筆者が作成）

※単位は特に断りのない場合「斤」。他の単位（壺、樽、俵）が使われている場合はそれを併記した。空欄は統計なしを意味し、0を意味するものではない。

この他重要なものとして、絹（生糸を含む）、木綿などの繊維製品、金や鉛などの鉱産資源、奴隷などがある。絹については、ベトナムや中国のものほど重視されていないが、ヨーロッパ人の記録に散見される。中国や日本向けというよりは、カンボジアに来航した外国人向けの商品であろう。木綿については、パタニ向けに輸出された記録がある[Foreest and Booy 1980:229]。後述するようにカンボジアは、権力者のための威信財および森林生産物を獲得する代価として、インド綿布を大量に輸入した。しかし、それとは別に現地でも庶民が使用する安価な綿布を生産するために、綿花を栽培していた。パタニ向けに輸出された綿布も、そうした現地産のものであったと思われる。

金は、ラオスを含むメコン川上流域に産地があった。1622 年、カンボジア国王はメコン川上流に遠征を行い、ラオス領のナムノイ鉱山⁶から、多量の金を獲得したという[Wuysthoff 1642:159]。金と並んで重要なものとして、鉛と硝石があった。この二つは軍需物資として重要視され、鉛は弾丸の、硝石は火薬の材料となった。明の福建巡撫、許孚遠の上奏文には、当時カンボジアが鉛と硝石の大産地だったことが記されている[岩生 2005:144]⁷。また、奴隷については、16 世紀末にカンボジアからパタニへ輸出されていた主要商品の一つであった[Foreest and Booy 1980:229]。

カンボジアは、以上のような産品を海域マレー・西方世界向けには主にインド綿布と、日本や中国向けには銀や銅などと交換していた。こうした商品の取引を通じて、様々な人々がカンボジアに来航した。そのなかで、海域世界や東アジアとの交易に、マレー人や華人は重要な役割を担ったのである。

2. カンボジアと海域世界の関係 ― 16 世紀まで ―

カンボジアは、古くから海域世界とのつながりを有した。10 世紀のクメール語碑文であるスドック・カク・トム碑文に、アンコール王朝の初代王とされるジャヤヴァルマン 2 世が「ジャワ」から帰国して即位したという記録があり[Cœdès 1968:97]、10 世紀のアラビア語史料の記録では、ザーバジュ（シャイレンドラ=シュリーヴィジャヤ帝国）の王がクマール（=クメール）の王国に攻め込み、王の首をはねたという[家島 2007:48-54]。13 世紀にカンボジアに赴いた周達觀の『真臘風土記』によれば、当時のカンボジアはインド綿布を輸入し、また現地人が飲酒する際には錫製の容器を用いたという[周 1989:21,70]。カンボジアの海域世界とのつながりを示唆する。

14 世紀になると、カンボジアと海域世界との関係はさらに強まる。『年代記』によれば、時の王ポニエ・ヤートはシャムに脅かされ、アンコール王都を放棄して、15 世紀前半にスレイ・サントーのバサンに遷都したという[Khin Sok 1988:67][Moura 1883b:39][坂本・上田 2006:209]⁸。しかし、中国史料によれば、それ以前の 14 世紀からこの地に王権が存在したことが知られる。『明実録（太祖実録）』は、1371 年と 1373 年に「真臘国巴山王」の朝貢があったことを記す。同書によれば、1377 年と 1380 年に別の「真臘国王」が朝貢して

おり、両者は明確に区別されている。北川香子の調査によれば、スレイ・サントーのバサン（トゥオル・バサン）には、アンコール期から 18 世紀に至るまで大量の陶磁器を収集しうるセンターが存在したという[北川 2000:57-58]。14 世紀後半に入ると、海域世界とよりつながりやすいメコン川流域に、中国に朝貢しうる力を持った勢力が現れたと考えられる。

15 世紀に入ると、マラッカ海峡にマラッカ（ムラカ）王国が台頭した。この王国は、初期にはジャワとシャムの圧迫を受けたが、1405 年に鄭和の遠征隊が来航するとこれに接近し、中国の権威を背景にジャワとシャムの圧迫を退け、勢力を安定させた。さらに、15 世紀半ばにマラッカ国王は、西方ムスリム商人を引き付けるべく、イスラームに改宗した。これによってマラッカは、東西世界の商人の出会いの場となり、繁栄の時代を迎えた。

マラッカとカンボジアの間でも交易がおこなわれた。1511 年のマラッカ陥落直後に同地に滞在したトメ・ピレスによれば、当時カンボジアのランシャラ（快速帆船）がシャム湾のナコンシータマラート沿岸を多数航行していた。カンボジアではたくさんの米、黄金、ラック、象牙、干し魚を産し、インド綿布、胡椒、丁子、水銀、蘇合香などが輸入品として珍重されていた。彼らはマラッカにも来航し、交易を行った[ピレス 1966:223-224,455]。

1509 年、初めてマラッカを訪れたポルトガル人は、この港市の重要性に着目し、1511 年に艦隊を派遣し、この地を軍事占領しようとした。これに対しマラッカ側も抵抗したが、マラッカ在住の中国人やジャワ人のうちにポルトガルとの内通者があり、またポルトガルの火器が優れていたため、結局マラッカは陥落した。マラッカを占領したポルトガルは、要塞を建設し、それを維持するために寄港する商人に高関税を課した。このため、多くのアジア商人がマラッカを避けた。

マラッカを陥落させ、同地を占領したポルトガル人は、カンボジアと関係を構築しようとした。1555 年、キリスト教伝道のためにマラッカからカンボジアへ渡航した宣教師クルスは、同地での活動の際に、東南アジアの慣習として現地人妻妾をあっせんされたポルトガル人が、現地人女性を性的無節操者と曲解したための「乱行」によって、伝道活動に大きな支障が出たと述べる[クルス 2002:63]。カンボジアとポルトガル領マラッカとの間に既に交流があり、一定数のポルトガル人がカンボジアで活動していたことを示唆する。また彼によれば、メコン川のシストル（スレイ・サントー）に都市が存在したが、当時のカンボジアの主要都市はトンレサップ川沿岸に位置するロンヴェークであった[クルス 2002:82]。『年代記』は、16 世紀前半にスレイ・サントー勢力と抗争しつつ、プノンペンに近いトンレサップ川流域のこの地に王権が形成されたことを語る。海域世界との交易に便利なメコン、トンレサップ両川沿岸に、都市が台頭したのである。

マラッカ陥落後、アジア商人たちはマラッカに代わる中継港を求めた。北スマトラのアチェ、マラッカ王家が逃れて拠点を構えたジョホール、西ジャワのバンテンが代わって台頭した。さらに 16 世紀後半の明の海禁政策解除（1567）に伴い、華人商人が東南アジア

海域に大規模に進出すると、南シナ海に臨むシャム湾に面したマレー半島東岸中央部に位置するパタニが重要な中継港となった。明の張燮が著した地理書『東西洋考』（1618 年序）の大泥条には、「^{パタニ}華人流寓甚多」[張 2000:59]とあり、17 世紀前半までに多数の華人が来航・定着していた。彼らは中国より生糸、絹織物、陶磁器、鉄製品、銅、小間物などを持ち込み、マレー人のもたらす上質の胡椒、竜腦、白檀、獣皮、象牙、水牛の角などを持ち帰った[Foreest and Booy 1980:229-230]。

こうしたパタニの隆盛は、シャム湾におけるマレー人の活動を活性化させた。16 世紀終りまでには、パタニはカンボジアと密接な関係を築いた。1600 年ごろカンボジアは、パタニに年間約 7,000 トンの米と木綿を輸出した[Foreest and Booy 1980:229] [Reid 1988:21,91]。また、17 世紀初頭にパタニを訪れたオランダ人ファン・ネックによると、カンボジアとチャンパから奴隷、木綿、伽羅木がもたらされた[Foreest and Booy 1980:229]。このような交易を通じて、カンボジアへのマレー人来航者が増加した。1594 年、アユタヤ王ナレースエンの遠征によって王都ロンヴェークが陥落すると、カンボジアでは断続的に混乱が続いた。こうした中でマレー人は、交易活動を基盤に軍事勢力としても台頭し、王権を左右し始める。次に述べるマレー人の首領オクニャ・ラクサマナは、その典型である。

3. オクニャ・ラクサマナの活動 — 16 世紀カンボジアにおけるマレー人の活動 —

マレー人は、船舶を活用して商業活動を行うことが多かったため、移動性が高かった。オクニャ・ラクサマナの素性についてははっきりと分らない。グロリエは彼を「ジョホールのマレー人」としている[グロリエ 1997:84]。モルガは、彼を一貫して「マレー人の首領」としており、ラクサマナという称号と考え合わせると、ジョホールと何らかの関係を有する人物である可能性は高い⁹。1587 年にポルトガルの攻撃でジョホールが破壊されており、その際にカンボジアに逃れてきた者かもしれない。

いずれにせよ、1594 年 1 月の王都ロンヴェーク陥落の時点で、彼は多くのマレー人とカンボジア人を率いて、カンボジアで一定の勢力基盤を築いていた。モルガによれば、彼は「もっとも強力な大砲類と快速帆船団」及び「多くの将兵」を有するカンボジア最強の軍事力を掌握する人物だった[モルガ 1966:138,144]。これらの快速帆船団が、同時に交易に関わっていたことは言うまでもない。

王都の陥落によって、時の国王ブラウンカル・ランガラ（『年代記』ではサータ）はラオスに逃れた。この時、シストル（スレイ・サントー）で即位したのが新王アナカパラン（『年代記』ではリエム・チューン・プレイ）だった。同王はシャムの軍勢を撃退し、王国の混乱を收拾した。この際、王は二人のマレー人隊長、すなわちオクニャ・ラクサマナとカンコナをかかえていた。当時カンボジアに滞在していたスペイン人ルイスのフィリピン総督宛書簡によると、彼らはナレースエンの遠征によってロンヴェークが壊滅した際、配下のマレー人と

カンボジア人を率いてチャンパに赴いた。援軍を求めるためだったが、チャンパ王が彼らを冷遇したため同地を略奪し、多数の大砲や将兵を得てカンボジアに帰国した。彼らが帰国したとき、カンボジア国王はアナカパラン王に代わっていた。オクニャ・ラクサマナとカンコナは、王にチャンパから持ち帰った大砲類他全てを献上した。王は彼らに封土を与え、大官に任命した[モルガ 1966:135-136]。

その後、彼らは国王にチャンパ遠征を進言し、実行した。しかし、彼らがカンボジアを不在にしている間に、アナカパラン王は交易上のトラブルからスペイン人とポルトガル人勢力に暗殺された。スペイン人は 1571 年にマニラに拠点を構えると、生糸や絹織物をもたらすポルトガルとの交易関係を深め、カンボジアでは森林生産物の入手をはかるため、ポルトガル人と行動をともにしていた。カンボジアは王位継承をめぐる争いで再び混乱したが、ラオスに逃れた国王の息子（ブラウンカル）が帰国すると、二人のマレー人隊長並びにスペイン・ポルトガル人勢力はこれに味方し、その即位に貢献した[モルガ 1966:135-138]¹⁰。

一方、マレー人勢力とスペイン・ポルトガル人勢力の対立は深まった。その後、オクニャ・デ・チューなる大官が、ブラウンカルを「暗愚」な存在とみなし、謀反を企てた。カンコナはオクニャ・デ・チューに加担した。なお、オクニャ・ラクサマナがこの二人に味方した形跡はない。そのためかこの謀反は未遂に終わり、彼らは 1597 年後半から 1598 年前半頃、スペイン・ポルトガル人勢力の手で殺害された[モルガ 1966:141]。この結果、スペイン・ポルトガル人勢力はカンボジアで勢力を拡大した。他方で、彼らとオクニャ・ラクサマナとの対立は激化した。スペイン・ポルトガル人勢力のリーダーの一人であるルイスは、オクニャ・ラクサマナを「王国における完全な権力と支配を手に入れるため」の最大の障害とみなした[モルガ 1966:144]。

モルガによれば、オクニャ・ラクサマナは国王の継母と愛人関係となり、彼女及びスペイン・ポルトガル人勢力の拡大を警戒するカンボジアの大官らと結んで、対決姿勢を強めた[モルガ 1966:83]。彼は部下のマレー人とともに、チュルドムコ（ブノンベン）¹¹のスペイン人宿営地の隣に居住していたが、両者の間で衝突が起こり、スペイン人らはマレー人居住区を襲撃し、マレー人を多数殺害し、物資を略奪した。オクニャ・ラクサマナは直ちに報復に出、ルイスをはじめとするスペイン人、ポルトガル人多数を殺害した。これによって、カンボジアにおけるスペイン・ポルトガル人勢力は、その多くが駆逐された¹²。

その後、オクニャ・ラクサマナはブラウンカル王をも殺害し、カンボジアの支配権を掌握しようとした。しかし、各地で反乱が起こり、混乱が拡大した。彼はこの混乱を収拾することができず、反対勢力に敗れ、カンボジアを追放された[モルガ 1966:174-176]。その後彼はチャンパに赴き、その地で反乱を起こしたが、最後は殺害されたという[モルガ 1966:248]。

16 世紀末、カンボジアでマレー人は勢力を拡大していた。なお、『年代記』によれば、同時期にメコン川流域のトボーン・クモム地方で「チャーム・チュヴィエ」（チャム人・マ

レー人) 勢力が大規模な反乱を起こし、国王(パラマラージャ 5 世=プラウンカル) を殺害したという[Mak Phœun 1981:75-76]。「チャーム・チュヴィエ」という集団が、ここで『年代記』に初めて登場する。

チャンパは 1471 年に北部ベトナムの黎朝の攻撃を受け、首都ヴィジャヤを占領され、南部沿岸部のファンランに拠点を移した。『ムラユ王統記(スジャラ・ムラユ)』によれば、この攻撃によりマラッカに逃れたチャム人があった[Brown(tr.) 1970:102-103][Cheah Boon Kheng(compiled.) 1998:195]。カンボジアのメコン川流域に逃れたチャム人もいたであろう。

『年代記』によると、「チャム人首領」のポー・ラートが上述のプラウンカル王の殺害に関与したという[Mak Phœun 1981:75-76]。一方モルガは、マレー人を「モロ」(ムスリム) と記し、チャム人についての言及はない。当時のチャンパ王国住民の多くは非ムスリムであったとされる[Manguin 2001:303-305]。チャンパからの移住後にマレー人の影響を受けてイスラームに改宗し、彼らと混淆していたのかもしれない。

ただし、チャム人移住者の規模については、慎重に考察する必要がある。『マレー王統記』やアユタヤに居住するチャム人について言及したタシャールの記述から判断する限り、一部の王族とその周囲に仕える人々による小規模な移住とみられる[タシャール 1991:430-431]。後に紹介する、1642 年にメコン川を往来したオランダ人のラオス訪問記に、チャム人の記述はほとんどない。

4. 17 世紀前半のカンボジア

モルガによれば、オクニャ・ラクサマナの追放後、カンボジアの大官たちは、プラウンカル・ランガラ王(プラウンカル王の父親) 直系の王統が断絶したため、1594 年の王都ロンヴェーク陥落の際に捕虜としてシャムに連行された同王の弟を、国王に迎えようと考えた。シャムに使節を派遣したところ、カンボジアでの影響力の拡大をもくろんでいたシャム王は、カンボジア側の要請を快諾し、この人物に 6,000 人の兵をつけてカンボジアに帰還させた。彼は国王として認められ、各地を平定したという[モルガ 1966:248-249]。

モルガは、この新国王がマニラのスペイン総督府と使節の交換を行ったことを伝える[モルガ 1966:249-250]。『年代記』では、この国王の名をソリヨポールとしている[Moura 1883b:56][Mak Phœun 1981:91]。王は 1618 年まで統治し、息子のチェイチェッターに譲位した。チェイチェッター王の治世は数年間であり、それほど長いものではなかった¹³。しかしこの時代、カンボジアにおける交易活動がいつそう活発化し、国力は増大した。

それに寄与したのが、日本との朱印船貿易だった。ソリヨポール王及びチェイチェッター王の時代に、朱印船貿易が最盛期を迎えていた。戦国・安土桃山時代に鉱山開発を進展させた日本は、豊かな銀や銅をもとに、1604 年～1635 年までの期間に 356 隻の朱印船を海外に派遣した。渡航先の最も多かった場所は、交趾(=広南)で 71 隻、二番目がシャム(アユ

タヤ)で56隻、三番目がルソンで54隻、四番目がカンボジアで44隻であった[岩生 1985:127-128]。カンボジアは朱印船にとって、東南アジアの主要な港市のひとつとなった。朱印船は、カンボジアから鹿皮、漆、象牙、蠟、犀角などを購入し、銅、鉄、薬罐、扇子、硫黄、樟脳などを持ち込んだ[岩生 1985:288-289]。

また、朱印船の来航が最も多かった隣国の広南も、国力を増大させていた。広南は、1558年に阮グエン・ホアン潢チンが北部ベトナム支配者の鄭氏チン(以下トンキン鄭氏と呼ぶ¹⁴)からフエへの駐屯を命じられたことを起源とする。その後、1600年ごろから阮氏は次第に独立傾向を強め、独自の外交を始めた。そうした阮氏の権力を支えたのが、華人船や朱印船との交易であった。中国から大量の生糸や絹織物がもたらされ、広南の生糸も加わり、朱印船の銀と交換された。広南の国王や大官たちは、日本船の銅や銅銭も買い上げた[永積 2001:143-151]。

こうして広南での交易活動が活発になると、東南アジア産の胡椒や白檀、丁子、ナツメグ、鮫皮などを持ち込むパタニやシャム、カンボジアからの商船も集うようになった。カンボジアにとって、広南は重要な交易相手となった。

さらに、バタヴィアのオランダ人とも、カンボジアは関係を構築した。チェイチェッター王の治世に当たる1620年代前半から、バタヴィアとカンボジアの間で交易船のやり取りが行われ、カンボジアからバタヴィアへは米、安息香、蠟、ラック、様々な小間物などが運ばれた[Dagh-register 1624-1629:26,28,99]。こうした品物を運んだ船は、後述する1630年代以降の状況から見て、マレー人と華人がその中心であった可能性が高い。また、1640年代にカンボジアへ運ばれた積み荷の内容から、この時期においてもバタヴィアからインド綿布が主要な商品として運ばれていたと考えてよい。『バタヴィア城日誌』によれば、1620年代半ばから後半にかけて、毎年オランダ自由市民の船舶を含む数隻の船がカンボジアへ航行していた[Dagh-register 1624-1629:51,130,139,224,305]¹⁵。

こうしたなかで、チェイチェッター王はロンヴェークの南部ウドンに新たに王宮を造営した。この王宮について北川香子は、カンボジア内陸の産物を収集し、河港ピニャールーに供給する絶好の位置にあるとする[北川 1998:56-57]。交易活動の活発化に対応する形で起きた現象である。この王宮造営は従来、ウドンへの「遷都」として理解されていたが、現在ではチェイチェッター王の治世に王都の中心が南へ移動したものと考えられている。当時の外国語史料はカンボジアの新王都をエウエーク、レウエーク、ラウエークなどと記している[Valentijn 1724:36]。これはいずれもロンヴェークの音を写したもので、外国人は当時の王都を、それまでと同じくロンヴェークと呼んでいた。

1620年、広南からチェイチェッターは王妃を迎えた。このことは、『年代記』のノン本[久光 1975a:28]、ムーラ本[Moura 1883b:57-59]、ヌパラット本[坂本・上田 2006:86]をはじめ、『小暦 1170年訳本ラウエーク年代記』[久光 1975a:29-30]、1685年にアユタヤに滞

在したフランス人宣教師ニコラス・ジュールヴェーズの記録[Gervaise 1998:166-167]など、多くの史料に見られる。

この婚姻について、久光由美子は、『小暦 1170 年訳本ラウエーク年代記』の記述に注目し、新興勢力である広南が武力・人的資源において圧倒的に勝るトンキン鄭氏に対抗するために、カンボジアと平和的な関係を保持することが必要不可欠であったとする[久光 1975a:30]。これに加え筆者は、当時のカンボジアが広南にとって重要な食糧を供給する後背地となっていたことを指摘したい。前述したように、広南は平野部が狭く、農業生産に限界があった。トンキン鄭氏に対抗し、また生糸生産に従事するために、カンボジアは食糧をもたらす重要な隣国となった。他方、カンボジアは、婚姻によって王国を安定させた。この後、1623 年、カンボジアはシャム（アユタヤ）の攻撃を撃退することができた。

結論として、チェイチェッター王の治世は、王都を中心とした交易網が整備され、東アジア並びに東南アジア海域世界との交易が発展し、対外関係が安定した時代であった。その後も王国は、安定を維持した。『年代記』によれば、チェイチェッター王の死後、その息子が相次いで即位したが、実権は摂政となった王弟ウテイが掌握したという。ジュールヴェーズによれば、ナック・チェスタ（『年代記』のチェイチェッター王に当たる）の死後、あとを継ぐべき 2 人の息子がまだ若年であったため、彼らの叔父にあたるナック・ブラチアが王位についた[Gervaise 1998:167]。また、オランダ語史料によれば、当時、カンボジアは「老王」（Ouden Koning）と「若王」（Jongen Koning）が統治し、実権は前者が握っていた。

「老王」は当時の「若王」の叔父であり[Casteleyn 1669:11-13]、『年代記』のウテイ、ジュールヴェーズのナック・ブラチアに相当する。

「老王」のもとでカンボジアの交易は隆盛した。1630 年代前半には、ポルトガル人や日本人が盛んに来航し、広南や日本との交易もいっそう活性化した。また、1620 年代前半以降バタヴィアとの交易が開始されたところに、1636 年にはオランダ東インド会社の船が来航し、カンボジアと VOC は正式に交易を行うことになった。このような状況下で、カンボジアにおけるマレー人はその重要性を増大させていくのである。

¹ 西洋史料では「カランバック（Calambac）」「カランバ（Calamba）」などと呼ばれる[Yule&Burnell 2000:144]。

² 現在のフエからホイアンにかけての地域を拠点とした。西洋史料では、クエンナム（Quinam）またはコーチシナ（Cauchyn China、Cauchichina、Cochin-china、Coutsingsine など、様々な綴りがある（[Yule&Burnell 2000:226-227]も参照）。日本では交趾と呼ばれた。

³ なかでも有名なのがカンボジアの動物蛋白源として知られるブラホックと呼ばれる魚の塩辛である。

⁴ 当時のカンボジアに到達するルートは、メコン川を介してプノンペン、王都ロン

ヴェーク・ウドンに達するもので、シャム湾沿岸から王都に直結する陸路の存在は知られていなかった。シャム湾沿岸が重要になるのは、ハーティエンが勃興する17世紀末以降のことである。

⁵ オランダ語史料には「ロホ（rog=エイ）の皮」という名称で現れる。

⁶ ラオス南部の都市アッタプー近郊に比定される[Lejosne 1993:198]。

⁷ なお、銀、銅、錫なども取引されていたが、当時、銀、銅は主に日本と中南米、錫はマレー半島、マラッカ海峡域が最大の産地であったから、これらの地域からカンボジアに持ち込まれたものと考えられる。

⁸ 遷都の年代は各本によって異なり、ガルニエ本、ヌパラット本では1388年、ムーラ本では1435年、VJ本では1431年としている。写本により遷都年に差異があるが、シャム側の王朝年代記の記述が、アユタヤの攻撃により1431年に王都を放棄したとしており[石井 1999:164]、この年が一般的に受け入れられている。

⁹ ラクサマナは「海軍長官」を意味し、マラッカ及びその直系の後継者であるジョホールにおいてオラン・ブサルと総称される高官の一つとして、政務、軍事面において重要な役割を担っていた[西尾 2001:159]。マラッカ及びジョホールでは、特別な意味を持つ役職であった。

¹⁰ モルガによれば、アナカパラン暗殺後、その次男であるチュピナヌが王として擁立されたが、国内の混乱を治められず追放された。その結果、ラオスに逃れていたブラウンカルが王として迎えられたが、彼が帰国したのは、オクニャ・ラクサマナを中心とする有力者が味方することを確約したからであった。その後チュピナヌは殺害されたが、その実行者はオクニャ・ラクサマナとカンコナだった[モルガ 1966:82,137-139]。

¹¹ 現地語ではチャトムック（「4つの面の町」の意）。この地で、メコン川とトンレサープ川が合流し、さらにメコン本流とバサック川に分かれる。この4つの大河川にちなんだ名称である。

¹² なおポルトガル人は、この後もカンボジアで活動を継続しており、この事件でその勢力が完全に消滅したわけではない。

¹³ チェイチェッター王の治世の期間は、論者によってその時期が微妙に異なる。ルクレールは1618～1622[Leclère 1914:338]、セデスは1618～1625[セデス 1980:243-244]、マック・プアンは1619～1627[Mak Phœun 1995:157]とする。いずれにせよ、それほど長いものではない。

¹⁴ 1527年、臣下の篡奪によって黎朝（前期黎朝）が断絶すると、これに対抗して王朝復興運動が起ったが、その過程で主導権を握った一族。1592年にハノイを奪回し、黎朝を復興（後期黎朝）すると、王爵を得て王府を開設し、黎帝を尊重しつつ実権を掌握した。ハノイを中心に紅河デルタを中心とした北部ベトナムを支配し、当時の外国人からはトンキン（Tonquin、Tonquin、東京）と呼ばれた。本論文では、後述する台湾鄭氏と区別する意味でもこの名称を用いることとする。

¹⁵ 当時 VOC はカンボジアと正式な関係を構築していなかったため、カンボジアとの交易に携わったのは、VOC に属していない「自由市民」（vrye lieden、原文ママ）であった[Dagh-register 1624-1629:51,99]。

第2章 カンボジア王ナック・チャン（在位 1642～1658）のイスラーム改宗とマレー人の交易活動 — VOC との関係をとおして —

はじめに

15 世紀～17 世紀にかけて、香辛料や森林生産物、米などを求めて東西世界の商人が東南アジアに多数来航した。一方、現地勢力もこうした状況に対応すべく、産品を集荷するシステム及び外来商人が港市で円滑に交易活動に参画できる秩序・体制の構築に努めた。その結果、当時の東南アジアでは商業が空前の活況を呈した[Reid 1993]。カンボジアも例外ではなかった。

米や森林生産物を豊かに産したカンボジアには、華人、マレー人ら外来商人が多数来航した。彼らのなかには王都ロンヴェーク・ウドンに逗留し、宮廷に影響力を行使した者も少なくなかった。16 世紀末～17 世紀中葉、マレー人の交易網も拡大し、1642 年に即位した国王ナック・チャン¹は、カンボジア王として初めてイスラームに改宗し、スルタン・イブラヒムと名乗った。

本章では、ナック・チャンのイスラーム改宗に注目し、王を取り巻くマレー人や華人、さらにはオランダ人の交易活動について考察したい。同王のマレー人の重用とイスラーム改宗についてはこれまでも研究者の関心を引き、マック・プアン[Mak Phœun 1988;1990]、北川香子[北川 2008]、リード[Reid 1993:189-190]、クラーン[Kraan 2009]らによる先行研究がある。

マック・プアンはその一連の研究において、『年代記』に現れるチャーム・チュヴィエ（チャム人・マレー人）に注目し、彼らの 15 世紀～19 世紀にかけてのカンボジアへの移住・定着の経緯を考察する[Mak Phœun 1988]。そして、彼らがカンボジアにおいて最も活動的であった時期にカンボジア国王の改宗が行われたことを論じる[Mak Phœun 1990]。また北川も、『年代記』に現れる 15 世紀～20 世紀に至るチャーム・チュヴィエの記述を取り上げ、王のイスラーム受容はチュヴィエの娘への恋が契機となったとする『年代記』の記述を紹介し、王とマレー人との関係の緊密化を指摘する[北川 2008:5-7]²。

しかしながらいずれの研究も、19 世紀以降に編纂された『年代記』の記述に基づいているため、国王のイスラーム改宗が王を取り巻く人間関係に影響を受けたとされ、王権にとって重要なマレー人の交易活動が与えた影響についてはほとんど考察されていない。

一方リードは、オランダ語史料も一部用いつつ、マレー人が 16 世紀末～17 世紀半ばのカンボジアにおいて強固な交易基盤を有し、オランダ人のもっとも手強い競争相手であったとする。カンボジア王はこのことに着目し、独占交易を志向したオランダ人に対抗するため、自らイスラームに改宗することでマレー人との関係を強化し、カンボジア王権を強

化したと説く[Reid 1993:189-190]。またクラーンは VOC 関連文書史料を利用し、王の即位からオランダ商館長・商館員虐殺事件、1644 年のカンボジアとオランダとの衝突に至るまでの状況を描き、イスラームに改宗してムスリムを新たな同盟者としたカンボジア王が、ポルトガル人の排除を求めるオランダ人との対立を強め、衝突に至ったと論じる[Kraan 2009]³。

いずれの研究も、これまで利用されることが少なかったオランダ語史料を用いて当時のカンボジア王を取り巻く交易勢力関係を考察した点は評価されるが、カンボジア王・マレー人とオランダ人との関係を、単純な対立関係に帰着させている点に疑問が生じる。後述するように、この時期マレー人とオランダ人の関係は概して良好であった。またオランダ語史料を詳しく検討すると、自らの治世の間ナック・チャンは、一時的にオランダ人と対立することはあったものの、基本的には彼らとの交流を積極的に行おうとしていたことがわかる。オランダ人との対立を基軸として王とマレー人との関係を位置づける見解は、再検討する必要があるように思われる。

第 1 節では、16 世紀末～17 世紀前半におけるパタニやジョーホールの繁栄によってマレー人の活動が活性化し、それがカンボジアへのマレー人来航者の増加につながり、その活動は 1630 年代までにメコン川を通じてラオスにまで達したことを示す。第 2 節では、オランダ人がカンボジア来航後にポルトガル人と対立しつつも、マレー人や華人との関係を改善し、交易活動の拡大をはかったことを論じる。第 3 節では、ナック・チャンの即位とイスラーム改宗を取り上げ、それがマレー人の交易網の拡大、ポルトガル領マラッカの陥落、日本の海禁政策の完成、アユタヤとの対抗関係といった要因と深く結び付いていたことを明らかにする。これらをとおり第 4 節では、ナック・チャンとオランダ人との関係を検討し、双方の関係が悪化した時期もあったものの、両者が積極的な交流をはかっており、その仲介役としてマレー人が重要な役割を果たしていたことを示す。

1. パタニ並びにジョーホールの隆盛とカンボジア

17 世紀に入ると、東南アジアの産品に対する日本市場の需要が高まった。年間四十万斤前後の生糸をはじめ、年間数十万枚の鹿皮、数十万斤の蘇木などが日本へ運ばれ、日本は東南アジア産品の最大の消費市場となった[岩生 2005:273,289-293]。生糸をもたらず華人商人や、来航した日本人商人だけでなく、彼らの求める東南アジア産品を運ぶマレー人商人やヨーロッパ人商人の活動も盛んになった。これとともに、交易港としてのパタニの重要性はいっそう高まった。オランダ人、イギリス人も相次いでここに商館を構え、17 世紀前半にはその最盛期を迎えた。パタニは、シャム湾海域のみならず、マラッカ海峡域やボルネオ島、さらには東部インドネシアと活発に交易を行った[Foreest and Booy 1980:229-230] [Teeuw and Wyatt 1970:7,13]。中でもパハン、ジョーホールとは、婚姻関係を通じて結びつきを強化した[B.W.Andaya&L.Y.Andaya 1982:67]。

一方、ポルトガルに追われたマラッカ王家が配下の海上民を率いて建国したジョホールは、16 世紀後半～17 世紀前半に、アチェ、ポルトガル領マラッカとしばしば争い、1587 年にはポルトガル、1613 年にはアチェの攻撃によって王都が破壊された。しかし、海上民や拡散したマレー人商人に支援されて、いずれの攻撃からも勢力を再興した [MeilinkRoelofsz 1962:141-142]。また 1629 年、アチェがポルトガル領マラッカ攻撃に失敗して海軍力を喪失したことも、その復興を促した。それまでアチェの影響下で活動を制限されていたジョホールやマレー半島ならびにスマトラ東海岸の港市が、活動を拡大し始めた。

カンボジアとマレー世界との交流はいつそう拡大した。1637 年にオランダがカンボジアに商館を構えた際、カンボジア王の信任を得て彼らに対応したマレー人有力者インチェ・アッサムは、パタニ出身だった [Haghen 1639:140] [Casteleyn 1669:16]。当時カンボジアには華人を管轄するシャーバンドル（港務長官）⁴が 2 名、日本人、ポルトガル人、マレー人を管轄するシャーバンドルが各 1 名存在した。当時のカンボジアにはマニラ、ポルトガル領マラッカ、広南などの他、パハン、パタニ、ジョホール、ジャンビなどから交易船が来航し、インド綿布、胡椒、錫、鮫皮などの産品をもたらした [Galen 1636:63,81]。

現在のインドネシアに当たる海域にも、相当数のカンボジア船が来航した。『バタヴィア城日誌』によれば、1630 年代初頭までにカンボジア船がしばしばバタヴィアに寄港するようになった [Dagh-register 1631:2,11]。カンボジア船の船主は、主にマレー人や華人であった [Dagh-register 1641: 90;1642:133]。また、パレンバンにもカンボジア船がしばしば来航し、1642 年にオランダが胡椒の独占取引を行う協定をパレンバンと締結した後も、オランダの不在を狙って胡椒の「密輸」を行った [鈴木 1992:102,107]。

またマレー人は、1630 年代終りごろまでに内陸のラオス（ランサーン王国）へも進出していた。ラオスは安息香、漆、麝香、鹿皮など貴重な森林生産物の産地であった。1641 年、オランダ人ウィストホフの一行がこの地を探検したとき、案内人兼通訳を勤めたのはパタニ出身のマレー人、インチェ・ラナンだった。彼はオランダ人をラオス王に引き合わせ、両者の直接交易を斡旋した [Casteleyn 1669:16] [Valentijn 1724:44]。王都ヴィエンチャンでは、マレー語が通用していた [Valentijn 1724:52]。ウィストホフによれば、滞在中に通訳としてインチェ・ラナンが活発に活動し、ラオス側もオランダ人との交渉役としてマレー人を派遣してきたという [Wuysthoff 1642:218-220]。ラオス商人のもたらす森林生産物をマレー人が海域世界に運び、マレー人がインド綿布やカンボジアの米などをもたらす関係がすでに成立していた。

2. カンボジアにおけるオランダ人の活動とマレー人・華人との関係の強化

パタニのオランダ商館は 1616 年～1620 年にかけて、カンボジアに 3 度使節を派遣した。そして、1622 年には商館を設立した。しかし、翌年カンボジアとシャム（アユタヤ）との

間に戦争が起こると、シャム王はアユタヤのオランダ商館に在カンボジア商館の閉鎖を要求した。VOC はこれに応じ、商館を閉鎖した[Muller 1917: XL I - XL II]。

東南アジア製品の重要な市場であった日本（徳川幕府）は、1635 年に日本人海外渡航禁止令、1639 年にポルトガル船来航禁止令を相次いで発布した。これにより VOC は対日貿易でいっそうの利益を拡大できる機会を得た。またジャワ島でマタラムと緊張関係にあった VOC にとって、米を確保することは重要な課題であった。一方カンボジア王にとっては、オランダ人がインド綿布や大砲などの火器をもたらし、日本向けの産品を買い付け、利益をもたらしてくれる存在に映った。

1636 年、VOC はカンボジアで本格的に活動を始めた。当時、カンボジアは「老王」(Ouden Koning) と「若王」(Jongen Koning) が統治し、実権は前者が握っていた。前述したように、「老王」は「若王」の叔父であり[Casteleyn 1669:11-13]、『年代記』において摂政として権力を振るった王弟ウテイに比定される。一方、「若王」はナック・チャンの兄であった [Casteleyn 1669:12]。オランダ人は日本人シャーバンダルの仲介を通じて「老王」と交渉し、1637 年に商館を開いた[岩生 1966:108]。

この後、オランダ人は積極的に交易活動を行うが、以前から同地で活動していたポルトガル人と東南アジア各地で抗争していたため、彼らとの対立が激化した。1637 年には、メコン川でオランダ船とポルトガル船がすれ違う際に、罵り合いがエスカレートし、オランダ側がポルトガル船を略奪する事件が起きた[Valentijn 1724:43]。さらに、VOC はバタヴィアへの米の輸出をはかって米価を吊り上げ、マレー人や華人とも対立した [Galen 1636: 109,115]。また、古米を売ろうとする「老王」と、新米を入手したい VOC との間でも対立が生じ[岩生 1966:108,367-368]、初期の活動ははかばかしくなかった。

ポルトガル人はマラッカ占領後、16 世紀半ばにはカンボジアでも活発に活動していた [クルス 2002:63]。対日交易にも、ヨーロッパ人の中で最も早く参入した。ポルトガル船来航禁止令により、日本から撤退を余儀なくされたが、その後も対日交易に巧みに参入した [Heeres 1898:50-51]。1641 年 11 月 15 日付『長崎オランダ商館日記』によれば、ポルトガル人が唐船を使って日本との交易を行っていることが判明し、幕府は対応に苦慮した [村上 1956:131][東京大学史料編纂所 1987:19]⁵。「老王」はこのように対日交易で活発に活動するポルトガル人との関係を重視した。カンボジア在住の日本人シャーバンダル森嘉兵衛による 1643 年 10 月 11 日付オランダ東インド総督宛書簡によれば、「ポルトガル人は前国王 (=「老王」) と、全貨物の一割を差し出すことを契約した」という[岩生 1966:359]。両者が親密な関係にあったことがわかる。

一方 VOC は、国王やポルトガル人との緊張関係を有しつつも、他の勢力、特にマレー人と華人との関係を次第に好転させていった。この変化をもたらした最大の要因は、シャム湾・マラッカ海峡域におけるマレー人と VOC との関係の良好化である。VOC は、ポルトガル勢力を駆逐し、マラッカ海峡に交易拠点を建設するため、パタニ、ジョホールなど、

マレー人諸王国との関係強化をもくろんだ。特にジョホールは、1636年にアチェのスルタン・イスカンダール・ムダが死去すると、1639年に VOC と同盟して勢力の拡大をはかった。1641年にはオランダのポルトガル領マラッカ攻囲に協力し、ポルトガル勢力を駆逐することに成功した。同時に VOC の仲介でアチェとも和解し、マラッカ海峡域における主要な交易勢力として確固たる地位を獲得した[B.W.Andaya & L.Y.Andaya 1982:68-69][弘末 1999:108-109]。

こうしたマレー人諸王国と VOC との関係の親密化は、カンボジアにおけるオランダ人とマレー人との関係改善にもつながった。前述したように、オランダ人はマレー人有力商人のインチェ・アッサムと接点を持つことができた。彼の紹介したインチェ・ラナンの案内のもとに、ラオス訪問が可能となった。また、当時 VOC は、東・東南アジア交易において幅広いネットワークを有する華人との関係強化をももくろんでいた。バタヴィアに寄港する華人船の関税を半額にし、華人商人が使用するピチスと呼ばれた鉛製貨幣を鑄造するなど、彼らの関心を引こうとした[Blussé 1988:46-48]。

こうした政策の結果、1630年代に入るとバタヴィアに寄港する華人船が増加し、その中には前述のようにカンボジアからの船舶も含まれていた。オランダ語史料によるとオランダ人たちは、当時カンボジア国王に信任厚かった 5 人の商人、日本人宗右衛門、華人グワンプック、華人プレスコルニョク、テビニア・テイシンバット（貨幣鑄造主任）、インチェ・アッサムと信頼関係を構築できたという[Haagen 1638:132]。ここに登場する二人の華人のうち、プレスコルニョクは華人シャーバンダルであった[Dagh-register 1641:90]。オランダ人は、日本人シャーバンダルのみならず、マレー人、華人のシャーバンダルや有力商人とも関係を強化して、ポルトガル人の妨害をかわしつつ、交易活動の拡大を図った。この結果 1640 年のオランダ側の記録には、オランダ人の持ち込んだコロマンデル産の綿布が大量にさばけ、米や森林生産物を入手できたことが記されている[Heeres 1898:48-49]。

3. ナック・チャンの即位とイスラーム改宗

前節で述べたように、カンボジア国内におけるオランダ人とポルトガル人との対立は激化の一途をたどった。さらに、マラッカ海峡域の情勢が影響して、1630年代終わりより、カンボジアにおけるマレー人とポルトガル人の緊張も高まっていた[Translaet missive van den Coninck van Cambodia 1643:333-334]。このような状況下で、ポルトガル人との結びつきを強める「老王」と、拡大するマレー人やオランダ人の交易活動に利益を求めるグループとの緊張関係は高まっていった。

「老王」は、オランダ人がマレー人の仲介によりラオスとの交易を拡大することを快く思っていなかった。1641年12月版『バタヴィア城日誌』によると、「老王」はラオス王が発行した許可証を有さない商人のカンボジア来航を禁止した。このため、オランダ人は良質なラオス産品を得られなくなったという[Dagh-register 1641:88-90]。

しかし、「老王」が権力を握っていた 1620 年代～1630 年代とは、カンボジアをめぐる状況は大きく変化していた。1641 年のポルトガル領マラッカの陥落、日本の海禁政策の完成に伴う対日交易からのポルトガル人の排除など、海域世界においてポルトガル人の占める地位は低下しつつあった。逆にオランダ人は、対日交易を許された唯一のヨーロッパ勢力となり、東南アジアではマレー人や華人との関係をもとに活発な交易活動を展開した。また、マレー人が活動を拡大していたことはすでに述べた。

こうした中、1642 年 1 月 2 日、宮廷でクーデターが発生した。「老王」と 1640 年の「若王」死去後にそのあとを継いだ「若王」（「老王」の子息）は殺害され、新王ナック・チャンが即位した。1642 年 3 月版『バタヴィア城日誌』によると、このクーデターで殺害されたのは「老王」「若王」父子とその側近のみにとどまり、混乱はほとんど起きなかったという[Dagh-register 1642:133]。

ナック・チャンの即位後、マレー人は重用され、「老王」の治下でマレー人の実質的首領であったインチェ・アッサムは、オクニャ・シュリ・マハラージャ (Oknha Çri Maharāja) の称号を得て、宮廷内でも最高の地位に至った[Articulen van Accort met die van Cambodia : 393][Mayer en Kettingh 1664:393]⁶。また、オランダ人も活動の続行を認められた[岩生 1966: 358-360]。

同年 11 月、ナック・チャンは、マレー人との関係のいっそうの緊密化をはかり、イスラームに改宗した[Regemortes 1642:313-314]。『年代記』によれば、同王は臣下たちにも改宗を求め、彼らも抵抗せずそれを受け入れたという[Mak Phœun 1981:189-190]。

リードは、この改宗にはマレー人との関係を強化してオランダ人の交易独占に対抗する目的があったとする[Reid 1993:189]。しかし、上述したようにこの時点ではオランダ人と王やマレー人との関係はむしろ良好だったのであり、この説には同意しがたい。筆者は、マレー人の交易活動の拡大及び 1641 年のポルトガル領マラッカ陥落と日本の海禁政策の強化により日本人、ポルトガル人の地位が低下し、マレー人と華人の重要性が増大したことがその理由と考える。

第 1 節で述べたように、マレー人は海域世界からラオスに至る広大な地域で活発に交易活動を行っていた。特に、1641 年の VOC によるポルトガル領マラッカの占領とジョホールとアチェの和解によって、ジョホールやマラッカ海峡域の港市のみならず、スマトラのミンカバウ人の対外活動も活発となった[Cushman(tr.), Wyatt(ed.) 2000:248] [Raja Ali Haji 1982:45-46,126]。その結果、以前にも増して、胡椒や錫がカンボジアに持ち込まれ、マレー人の重要性はいっそう増大した[Dagh-register 1641:90]。

また日本（徳川幕府）は、1633 年～1639 年にかけて段階的に海禁令を発し、日本人の海外渡航を禁止し、ポルトガル人を追放した。1641 年にはオランダ商館を長崎（出島）に移転し、同地に寄港できるのは唐船とオランダ船のみと定めた[岩生 2005:347-360][荒野

2003:126135]。これによって、東南アジアにおける日本人の活動が実質的に終了し、日本との交易の担い手としての華人の立場も強化された。

ラオスを含むメコン川流域の山岳地帯は、鹿皮、漆、蘇木、安息香、麝香など、日本や中国などとの対外交易に重要な森林生産物の産地だった。特に鹿皮・漆・蘇木は、日本が最大の消費市場であり、これらの商品を手に入して日本に運ばせることで上がる利益は莫大であった。この内陸山岳地域との交易で重要な役割を担ったのも、マレー人と華人だった。

ラオス産品を手に入る上で、交換商品となるインド綿布の供給は極めて重要であった。シャム（アユタヤ）からは「ムーア人（インド人ムスリム）」及びシャム人商人が、陸路を通じて、ラオスに毎年四万枚に及ぶ大量のインド綿布を持ち込んでいた[Wuysthoff 1642:176][Casteleyn 1669:33,35]。シャムは、ベンガル湾側にメルギ、テナセリムなどの外港を持ち、ベンガル湾交易を通じてインド綿布を手に入れる位置を占めていた。このような状況下でカンボジアがラオス産品を大量に入手するためには、シャム以上に多くのインド綿布を持ち込む必要があった。この目的を達成するために重要な存在となったのがマレー人だった。マレー人は、当時インド綿布交易において重要な位置を占めていた VOC とも良好な関係にあった[L.Y.Andaya 1975:70]⁷。このため、彼らはインド綿布を手にし、カンボジアに運んだ[Dagh-register 1647-48:93,125:1653:91]。ナック・チャンは、マレー人を介して VOC とも提携しようとした。当時、VOC はインド綿布の産地であるコロマンデル海岸にも商館を設立し、インド綿布の交易を盛んに行っていた。カンボジアのオランダ商館でも、前述したように 1640 年にはインド綿布の取引によって莫大な利益を挙げている。

また華人は、カンボジア王都の外港であるプノンペン、ピニャールーに加え、メコン川流域の各地に居留地を形成して活発に活動していた。特にソムボック（現在のクラッチエ州）にはプノンペンに匹敵する規模の華人居留地が形成され、山地民との交易で鹿皮、犀角、象牙、金などを入手し、同時にラオスとの交易にも携わった[Wuysthoff 1642:157]。

カンボジアで商業活動を行う華人のなかには、ムスリムが多数存在した。前述したように、当時パタニでは華人が多数活動しており、カンボジアで活動する華人の中にもパタニ出身者が少なくなかった⁸。マレー人の活動の拡大に伴い、イスラームに改宗することは、彼らにとっても交易面で多大なメリットになり得た。華人シャーバンドルのプレスコルニョクが、ムスリムであったことはその典型である[Haagen 1638:132]。また、1636 年 12 月に華人商人の有力者たちがラオスに赴いたが、その半数以上はムスリムで占められていた[岩生 1966:362]。

ナック・チャンはイスラームに改宗することで、主要な交易勢力であるマレー人とイスラーム改宗者の多かった華人との関係強化をはかった。同王の即位と改宗が 1642 年であったことは、1641 年のポルトガル領マラッカの陥落及び同年の日本の海禁政策の確立と緊密に対応していることが見て取れよう。

当時の東南アジア海域世界では支配層のイスラーム意識が高まりつつあり、17 世紀前半～中葉にかけて、マレー世界の周縁部において有力者のイスラーム改宗が見られた[Reid 1993:180-181]。ミンダナオ島のマギンダナオ王国では国王クダラトがスルタンを称し[早瀬 2003:63]、チャンパの支配者層のイスラーム受容もほぼ同時期（1644～1676 ごろ）とされる[Manguin 2001:304]。こうしたイスラームの拡大とともに、すでにそれを受容していたバンテン国王やマタラム王アグンも、それぞれ 1638 年と 1641 年にメッカに使者を派遣し、スルタンの称号を獲得して、その地位の正統性を高めようとした[弘末 1999:108,117]。ナック・チャンの改宗は、こうした状況下でなされたものでもあった⁹。

他方、ラオスとの交易拡大は、結果的にシャムとの競合関係を増大させた。シャムは 15 世紀以来カンボジアに対して宗主権を主張し、拒否した場合にはしばしば攻撃を仕掛けてきた。1594 年には上述したようにシャムの攻撃により王都が陥落し、時の国王がラオスに逃れて客死した。1623 年にも、シャムの攻撃があった[Bhawan 2007:26]。また、アユタヤはマレー半島にもその勢力を拡大すべく、しばしば出兵した。その最大の標的がパタニであった。特に、1624 年に即位した女王ラジャ・ウングは、シャムから与えられる称号を拒否し、ジョホールと結ぶなど、反シャムの姿勢を鮮明にした。これに対しシャムは、1634 年にパタニを攻撃したが、パタニはジョホール、パハンの援軍を得て、これを撃退した[Teeuw and Wyatt 1970:7]。

イスラームに改宗したナック・チャンは、ジョホール、パタニなどの海域イスラーム諸国との関係を緊密なものとし、共同でシャムに対抗しようとした。これらのイスラーム諸国は、アユタヤの動向について情報を提供しあった。例えば、ハーレンによれば、1636 年 8 月にパハンからの来航者が、今年はシャムがカンボジアに侵攻することはない旨の情報を伝えたという[Gaalen 1636:106]。ナック・チャンの治世にカンボジアはシャムの宗主権を承認しなかったが、シャムから攻撃を受けた形跡はない[Cushman(tr.), Wyatt(ed.) 2000:214-227][Gervaise 1998:168]。

4. カンボジア王権とオランダ人の関係の一時的中断とその再構築

その初期において必ずしも悪いものではなかったナック・チャンと VOC との関係は、両者のポルトガル人の処遇をめぐる意向の相違から、一時的に悪化する。

カンボジア王とオランダ人との関係の強化は、他方でオランダ人の独占交易への意欲を刺激した。VOC によるマラッカ占領後、カンボジアでのポルトガル人とオランダ人の関係は陰悪化した。1642 年 2 月 2 日、双方のグループが口論となり、ポルトガル人はオランダ人 2 名を殺害した[Regemortes 1642:147]。これに対し、当時のオランダ商館長レーヘモルテスは、ポルトガル人の排除を進めるため、王に多額の金品を贈り、犯人の死刑を訴えた[Muller 1917:XLIX] [村上 1956:167]。

他方、ナック・チャンにとって、ポルトガル人の排除は現実問題として不可能であった。まず、1641年のポルトガル領マラッカの陥落に伴い、同地のポルトガル人が多数カンボジアに逃れてき、この地に居住するポルトガル人の数が増加した[Muller 1917:XLVII]。ポルトガル人は火器の扱いに長け、敵に回すと厄介な存在であった。さらに「老王」時代から、ポルトガル人はカンボジアにおいて重要な交易勢力として一定の地位を築いており、王宮には彼らを支持する大官も少なくなかった[岩生 1966:119]。ナック・チャンが彼らをも取り込んで自らの権力を強化しようとしたことは、想像に難くない。王はレーヘモルテスの要求に応じず、慣習にのっとり、ポルトガル人に賠償金の支払いを命じた[Translaet Missive van den Coninck van Cambodia:333-334]。これに対し、レーヘモルテスは王に金品の返還を求めた[Muller 1917:XLIX]。その結果、王と商館長の間は陰悪となり、1643年11月27日、レーヘモルテスと商館員が王宮に謁見に向かう途中、衛兵に襲撃されて虐殺された[Kraan 2009:29-30]。

商館長及び商館員の虐殺は、バタヴィアの VOC 総督府にとっては衝撃であった。その結果、翌 1644 年にオランダは威嚇のためカンボジアに艦隊を派遣した。6月12日、ついにオランダ艦隊とカンボジア軍は衝突した[Kraan 2009:53-60]。オランダ艦隊ははじめカンボジア側と賠償金の問題などについて交渉を行っていたが、その間にカンボジア側は戦闘態勢を整え、プノンペン前面のメコン・トンレサップ両川の合流地点付近で艦隊を攻撃した。この戦闘の結果オランダ艦隊は敗北・撃退された。

この結果、1656年までオランダ商館は閉鎖された[岩生 1966:124][北川 1999:248]。しかしながら、これによってカンボジアは VOC との関係を完全に断絶したわけではなかった。カンボジア国王は 1644 年の戦闘後、直ちに VOC と接触をはかっている。1645 年 4 月には、オランダ東インド総督に対し、商館員虐殺を謝罪する使節を派遣した。翌 1646 年 5 月にも使節を派遣し、再度謝罪するとともに、1644 年の戦争で捕虜となったオランダ人 35 人を送還している。1647 年 4 月にも使節を派遣して講和を求め、条件として略奪した品物の半分を返還することを表明した[MacLoed 1927:317]。1650 年 5 月に台湾に使節を送り、1653 年 3 月にはバタヴィアに、インチェ・アッサムを大使とする使節を派遣した [Dagh-register 1653:32]。1644 年の戦闘終了直後から、カンボジアは VOC との関係の再構築に取りかかり、具体的な交渉を行っていたのである。

カンボジア側には VOC との正式な取引再開を切望する理由があった。1656 年のオランダ商館の報告によると、交換財となるインド綿布の不足が影響したと思われ、カンボジアにおいて鹿皮、象牙をはじめとする商品の集荷数が不足して価格が高騰し、シャムの方が同じ商品をより安価で多量に入手できた[Indijck, Kettingh en Stouthart 1656a:358-359]。これは、王権の基盤を交易に依存していたナック・チャンにとって憂慮すべき状況だった。

これに対し、VOC もカンボジアの使節を全面的に拒絶しているわけではないことは、オランダ人の送還を受け入れていることから明らかである。さらに 1653 年 7 月 18 日付

『長崎オランダ商館日記』によると、1651年6月15日付東インド総督レイニールスゾーン名でインチェ・アッサムに台湾への渡航許可証が発行されている[村上 1958:217]。VOC も、カンボジアとの関係再構築を目指していたのである。

こうした交渉の結果結ばれたのが、「1656 年条約」である[Winkel 1882:335]¹⁰。この条約は 10 条からなるが、特に VOC にとって重要だったのが、

- ① 向こう 25 年にわたり、日本向けカンボジア産品の独占取引を認めること（第 4 条）。
- ② マカッサル・カンボジア間の航海の全面禁止（第 7 条）。

の 2 条項であった[Indijck, Kettingh en Stouthart 1656a:358] [Winkel 1882:335]。

VOC の独占取引の希望が盛り込まれた形となっている。ただし、両条項ともほとんど実効性を有さなかった。①については、条約締結後の 1656 年に 5 隻、1657 年に 10 隻の唐船が、カンボジアから日本に来航しているのに対し、同地発のオランダ船は 1657 年と 1658 年に 1 隻ずつに過ぎない（次ページ表 3 を参照）。当時、カンボジアの対日本取引は華人が掌握しており、VOC が日本取引を独占するのは、すでに難しくなっていた。②に至っては、交渉の段階でカンボジア側が「マカッサルへの航行禁止は実施するが、同地から来航する船をすべて拒否することはできない」と主張し、VOC もそれを認めざるを得なかった[Winkel 1882:336]。

VOC との関係を修復したカンボジアは、1657 年にバタヴィアに使節を派遣し、コロマンデル海岸にカンボジア船が自由に渡航するための許可証の発行を求めた[Indijck 1658:365]。VOC はこの要求は拒否したものの、そのことで両者間の関係が影響を受けることはなかった。また、同じころにカンボジアではマレー人のシャーバンダルが交代したが、新しいシャーバンダルに就任したのがインチェ・アッサムの影響下にある人物であり、彼を通してオランダ人は交易活動を行うこととなった[Indijck en Kettingh 1657:364]。

「1656 年条約」の締結後、交易活動の実質的主導権を掌握したのは、カンボジア側だった。

年度	唐船	ヨーロッパ船
1641	2	0
1642	2	1
1643	1	1
1644	2	0
1645	1	0
1646	2	0
1647	1	0
1648	1	0
1649	1	1（ポルトガル？）
1650	2	0
1651	3	0
1652	3	0
1653	5	0
1654	3	0
1655	0	0
1656	5	0
1657	10	1
1658	2	1
1659	0	0
合計	46	5

表 3 カンボジア発長崎入港各国船数（1641～1659）

[村上 1956;1957;1958][山脇 1980][永積(編) 1987]に基づき筆者が作成

※ヨーロッパ船は断りがない場合はオランダ船を指す

小括

16 世紀末以降、パタニさらにはジョホールの隆盛により、カンボジアでもマレー人の活動が活発化した。1630 年代までに彼らの活動範囲は内陸のラオスにまで達し、マレー半島東岸さらにはマラッカ海峡の諸港市国家と緊密な関係を有するに至った。このような状況下で 1642 年に即位したナック・チャンは、イスラームに改宗してインド綿布を持ち込むマレー人との関係をいっそう強化し、さらには彼らを介して華人・オランダ人をも自らの交易活動の枠内に組み込もうとした。その改宗が従来言われていたような VOC への対抗を目的としたものではないことは、王がその治世の間一貫して VOC との関係の維持に努めていたことから明らかである。この結果、カンボジア王権は大幅に強化された。同時にカンボジアは、内陸部と海域を結ぶ地域として重要な位置を占め、黒漆など、一部の産品についてはシャム（アユタヤ）をもしのぐ量を日本に輸出した。そのためシャムとの競合関係が増大することになったが、王の改宗はマレー半島のイスラーム諸港市国家との関係強化につながり、シャムへの対抗上も有効であった。

本章の 17 世紀前半～中葉期におけるカンボジアのマレー人についての考察は、この地域におけるチャム人の活動をめぐる研究とも関連しよう。マック・ブアンと北川は、この時期のカンボジアにおける「チャーム・チュヴィエ」の活動を論じる際、『年代記』の記述にもとづきチャム人の活動にしばしば言及する。しかしこの時期のオランダ語史料には、チャム人はほとんど出て来ず、パタニとの関係を有したマレー人の重要性が示される。『年代記』でチャム人の重要な拠点の一つとされるスレイ・サントー（ゴクロック（Gockelock））は、オランダ語史料では一寒村に過ぎず、チャム人への言及もない[Wuysthoff 1642:153]。1471 年の黎朝によるチャンパの王都占領によって起きたとされる、チャム人移住の「第一の波」[Mak Phœun 1988:83]の後、彼らが 17 世紀前半のカンボジアにおいてどの程度影響力を行使できたのか、再検討の必要があろう。

¹ オランダ語史料ではナック・ヤン（Nacjan）[Meyer en Kettingh 1664:389]、ナック・ティアン（Nactians）[Kettingh 1665b:411]などと呼ばれる。ニコラス・ジュルヴェーズはこの王のことをナック・チャン（Nac-channe）[Gervaise 1998:167-171]と呼ぶ。この 3 種の史料の呼称の一致から、この王の名がチャンであったことは間違いないと思われる。ナックとは、カンボジア王族に付ける敬称である[久光 1975a:32]。本稿では、他の国王と区別するためにこの呼称を用いる。なお、『年代記』ではラーマーディパティ（レアミアトゥプティ）1 世と呼ばれる。

² 北川はほかにも、ポスト・アンコール時代について、16 世紀～17 世紀にかけてトンレサップ川流域のロンヴェーク・ウドンとメコン川流域のスレイ・サントーの 2 つの王権がしばしば並立し、後者にマレー人やチャム人が深く関係したことを指摘する[北川 1999;2001a]。本稿では、前者が後者を統合していた時期を主に扱うため、この議論に直接言及することはできないが、チャム人の活動については「小括」でその課題を提示した。

³ マック・プアン、リードらの研究を踏まえ、ナック・チャン（ラーマーディパティ 1 世）の改宗に関わる『年代記』とオランダ語史料の記述を整理・紹介したもののとして、他にもケルステンの研究がある[Kersten 2006]。これは、VOC の覇権の確立、日本の海禁政策の完成、中国における明から清への王朝交代といった当時のアジアの状況のなかで王がイスラームへ改宗した可能性を指摘するが、問題提起にとどまるので、ここでは直接とりあげない。

⁴ ペルシア語のシャーバンダル（港の王）を起源とする。インド洋全域の港市で外国人商人と交渉する官吏の称号で、税関長の役割をも果たした[Yule and Burnell 2000:816]。

⁵ 幕府はポルトガル人の介入を警戒したが、カンボジア発唐船の来航までは禁止しなかった[村上 1956:164][東京大学史料編纂所 1987:96,106]。

⁶ オクニャは、シャムにおいては高官の中で第 3 位から第 5 位の位階にある者を示す称号であり、カンボジアとシャムで共通してみられる[北川 1994:52]。オランダ人はシャムと同等の位階としてこれを理解したものと思われる。ただし、カンボジア近世碑文や法典に登場するオクニャは、最上位の官人に付される特別のタイトルとされ、位階においてシャムとの間に不一致も見られる[北川 1994:45,51]。

⁷ 例えばジョホールは、VOC との友好関係を背景に、1648 年 4 月にオランダ領ムラカに寄港することなくコロマンデル海岸に向かう許可証を獲得した。さらに、1651 年には VOC からコロマンデル海岸に向かう自由航行許可証を与えられた[L.Y.Andaya 1975:70]。

⁸ なお、すでに述べたパタニ出身のマレー人有力商人、インチェ・アッサムも華人系のマレー人であった[Haghen 1639:140]。

⁹ なお、このような王のイスラーム改宗はその国内統治と齟齬をきたすことはなかった。一般の民衆は王が改宗したからといって必ずしもイスラームに改宗したわけではなく、仏教を信仰し続けていた。このような状況を鑑み、王は仏教寺院にしばしば寄進を行って、一定の敬意を示しており[Mak Phœun 1990:66-67]、特にアンコール・ワットをしばしば訪問している[グロリエ 1997:169]。王は、カンボジアの重要な産品の一つである米を生産する農民の大多数が仏教徒であることを踏まえ、仏教を弾圧することはなかった。

¹⁰ ウィンケルはこの条約を 1656 年に結ばれたとしているので、ここではそれに従ってこのような名称にしたが、後述するように、1656 年の段階ではこの条約は未だ正式に締結されておらず、カンボジアに場所を移しての継続的な交渉とカンボジア王による批准を必要とした。それ故、1656 年に締結されたというイメージを与えかねないこの名称は、本条約の名称としてはふさわしくない。よって、次章以降ではこの条約を「第一次条約」と呼ぶことにする。「第一次」としたのは、カンボジアと VOC の間で 1665 年にも通商平和条約（「第二次条約」と呼ぶ）が結ばれており、これと区別するためである。

第 3 章 カンボジア・VOC 間通商平和条約締結（1656～1657）— カンボジア王権と VOC の交易独占の試みをめぐって —

はじめに — 問題の所在 —

カンボジアでは、前章で述べたように 16 世紀後半以降華人、マレー人、日本人、ポルトガル人らが拠点を構えて活発に交易を行った。1637 年には VOC も商館を設けた。カンボジア王はこれらの勢力と交易を進展させ、1642 年に即位したナック・チャンは、マレー人やムスリム華人との関係強化をはかって、イスラームに改宗した。

VOC がカンボジアに拠点を構えた主目的は、対日貿易の商品となる森林生産物や皮革類を入手するためである。当時中国は、明から清への王朝交代という混乱した状況にあり、中国に VOC が安定した拠点を築いて交易を行うことは難しかった。こうした状況下で注目されたのが、日本との交易であった。VOC は 1625 年、台湾南部にゼーランディア城¹を築いて根拠地とし、中国と日本及び東南アジア海域世界を結び付けようとした。さらに 1635 年 5 月、日本船の海外渡航禁止令が發布されて朱印船の活動が停止すると、VOC はカンボジア、シャム、トンキンに相次いで使節を派遣して商館を開き、朱印船の地盤を引き継ぎつつ、対日本交易の利益拡大をはかった[岩生 2005:456-457]。

しかし、オランダ人はポルトガル人と対立し、多様な来航者を取り込もうとしたカンボジア王との間で確執が生じ、前章で述べたように、1643 年王都でオランダ商館長・商館員虐殺事件が起こった。それに対抗して 1644 年カンボジアに遠征したオランダ艦隊との戦争が勃発し、カンボジアは VOC と公式な関係を断絶した。

もともと、当時東南アジア海域世界で一大勢力となりつつあった VOC は、王権強化をもくろむカンボジア国王にとって無視できない存在だった。また VOC にとっても、米及び当時最大の利益を挙げていた日本との交易に必要な鹿皮、漆などの森林生産物の入手先として、カンボジアは重要な位置を占めていた。さらに、1650 年代に入ると、それまで対日交易の中継地及び現地の産物の供給地として重要な地位を占めていた台湾での貿易が、中国人との競争に敗れ、急速に衰えた[永積 1999:357]。加えて、台湾対岸の福建に拠点を有し反清活動を展開する鄭成功（国姓爺）との対立が次第に激化し、同地における VOC の地位は脅かされた。

これらの事情から、カンボジアと VOC 双方にとって交易関係を再構築する必要性が生じた。両者の間で 1645 年以降接触が開始され、1656 年～1657 年にかけてのバタヴィアとカンボジアでの交渉の結果、通商平和条約（以下「第一次条約」と呼ぶ）が結ばれるに至った。

「第一次条約」の締結が以後の VOC とカンボジアの交易活動にいかなる影響を与えたのかは、カンボジア王権の展開を考える上で重要な問題である。17 世紀のカンボジアと VOC の関係に関しては、デイク[Dijk 1862]、ウィンケル[Winkel 1882]、ブッフ[Buch 1937]、マ

ック・プアン[Mak Phœun 1995]、リード[Reid 1999]、クラーン[Kraan 2009]らの研究があり、クラーン以外はいずれも「第一次条約」について言及をしている²。

このうちデイクとブッフは、VOC 本社重役会（以下重役会）の意向を重視する。デイクは、バタヴィアの東インド総督府が 1644 年の戦争で受けた損害の賠償と、それによって生じた捕虜、及びカンボジアが接収した物資の返還をカンボジア側が認めない限り、和平交渉に応じない姿勢をとっていたが、交易再開を望む重役会の意向に抗しきれず、結局和平交渉に応じたことを指摘する。損害に対する賠償と物資の返還は実現しなかったものの、総督府は、国王の日本向けの輸出に関する制限をやむを得ないものとして、第 4 条（後述）の承認を大いに喜び、他方重役会は、和平通商が回復されたことを成功とみなし、後は国王が条約を遵守すれば会社にとって大きな利益になると評価したと述べる[Dijk 1862:336-342]。

ブッフも、「第一次条約」締結交渉は重役会の意向によって開始されたとし、バタヴィアでの交渉の後、カンボジアでも VOC と国王の間で交渉が持たれ、いくつかの点について変更された後、国王によって批准されたとする。VOC の使節団長であるインデイクは、有利な状況を背景に条約締結を成功に導き、その結果 VOC は、毎年鹿皮十万枚をはじめ、さまざまな商品を購入でき、日本交易で莫大な利益を上げることが可能になったとする[Buch 1937:226-227]。

一方、ウィンケルとマック・プアンは、重役会の動向に言及しないが、同条約の締結を VOC 側の外交的勝利とみなす[Winkel 1882:335-336]。マック・プアンは対日本交易の独占をカンボジア側に認めさせたことで、VOC は条約締結を成功と受け止めたとする[Mak Phœun 1995:279]。しかし両者ともバタヴィアでの交渉の後、カンボジアでさらなる交渉が行われたことについては言及していない。

またリードは、同条約はカンボジア国王が VOC に結ばされた「屈辱的な」条約であり、条約締結がカンボジア国内における反国王派の勢力拡大につながったとして、カンボジア側の意義を考察する。それにより 1658 年のベトナム（広南阮氏）の介入が容易となり、それ以降カンボジアでは、ムスリムやヨーロッパ人よりもシャムとベトナムの影響力が増大していったと指摘する[Reid 1999:36]。

上記 5 者の考察は、力点の置き方に違いがあるものの、いずれも「第一次条約」の締結及びその後において主導権を握っていたのは、VOC であるとする点が共通している。しかし後に述べるように、条約締結のためにカンボジア側の使節がバタヴィアに出向き、カンボジア本国でも交渉を行い、カンボジア王は条文に対して多くの意見を出した。一連の交渉にカンボジア王が積極的に関与していたことが明らかとなる。「第一次条約」の締結がカンボジア側にとってどのような意義を有したのか、また、締結に当たってのカンボジア王権と VOC 双方の思惑の相違と、それが締結後の交易活動にどのような影響を与えたのかについて丁寧に考察する必要がある。

以上の問題点を踏まえ、「第一次条約」の内容を改めて検討するとともに、同条約締結後の VOC とカンボジアとの関係を考察する。これをとおして、同条約の締結交渉が必ずしも VOC 主導で行われてはおらず、カンボジア王の要求を VOC はかなりの程度認めざるを得なかったこと、及びこの条約が VOC 側の意図を越え、カンボジア側に有利に働くことになったことを明らかにしたい。

史料として、オランダ語で残された本条約条文及び VOC 文書を中心としたオランダ語史料を使用・分析する³。「第一次条約」が締結された前後の状況及び同条約の条文の内容を検討し、その締結がカンボジアと VOC との関係及び両者の交易活動にいかなる影響を与えたかについて考察する。

1. カンボジアと VOC との関係再構築への動き — 1644 年～1656 年 —

前章で述べたように、1643 年 11 月、国王と対立していたオランダ商館長レーヘモルテスが、王宮に参内する途中、国王の衛兵に襲撃されて殺害された。これに衝撃を受けたバタヴィアの VOC 総督府は、翌 1644 年 6 月、カンボジアに威嚇と詰問のため艦隊を派遣したが、プノンペン前面での戦いで、司令官ヘンリック・ハロウズを筆頭に、遠征軍の全兵力 348 名のうち、約 5 分の 1 に当たる 62 名が戦死、145 名が負傷し、50 名が捕虜となるという大敗を喫し、撤退した[Domckens 1644:350][Kraan 2009:54-58]。この敗北に対し、時の総督ファン・ディーメンは、シャム（アユタヤ）と同盟して再度カンボジアを攻撃しようとしたが、1645 年に彼が死去したことにより、計画は中止された[Kraan 2009:63-67]。この結果、カンボジアのオランダ商館は 1656 年まで閉鎖されることとなった。しかしながら、前述したように、カンボジアと VOC との関係は、完全に断絶することはなかった。カンボジアはインド綿布を入手するために、VOC は米や貴重な交易品となる森林生産物を入手するために、互いに相手を必要としていたからである。

1645 年 4 月、カンボジア国王が商館長、商館員虐殺を含めたオランダ人への敵対行為について謝罪するため、華人船をバタヴィアに派遣したことは前に述べた。これに対し、バタヴィア総督府は、バタヴィア在住のマレー人インチュ・アッサム⁴にカンボジアへの航行を許可し、国王への返書を託した[*Generale Missiven* II:269]。1646 年 5 月にも使節 2 名にオランダ人 2 名を同行させて再度謝罪し、総督が使節を派遣してくれるならば、1644 年の戦闘で捕虜となったオランダ人 35 名を送還すると表明した。1647 年 4 月にも使節を派遣して講和を求め、その条件として略奪した物品の半分を返還する意志を示した[MacLeod 1927:317]。

こうしたカンボジア側の動きに対し、VOC（東インド総督府）も次第に交渉を行う方向へ傾いていった。『一般政務報告』に収録された一連の書簡からは、総督府がカンボジア王に対して不信感を表明しつつも、王が会社の資産を返却し、総督府と協定を結ぶことを期待していることが明らかである[*Generale Missiven* II:315,352]。

このような状況下で 1648 年 4 月、カンボジアの快速帆船（ティンガン⁵）2 隻が、ジャワ中部の港市チルボンを経由してバタヴィアに寄港した[*Dagh-register* 1647-48:57]。また、同年 6 月には、バタヴィアからマレー人船主のジャンク船 3 隻と小型高速帆船（フレガット⁶）1 隻が、安息香を入手するため、奴隷と布（インド綿布）を積んでカンボジアに向けて出航した[*Dagh-register* 1647-48:93,125]。カンボジアと VOC との関係に関わりなく、カンボジアとジャワの諸港市は相互に交流を持っていた。

また、『ゼーランディア城日誌』によると、1650 年 7 月、華人商人サコが台湾に来航し、カンボジアの大官の書簡をもたらし、カンボジアは華人商人の情報によりオランダ人が彼らと和平を結びたがっていることを承知しており、国王も和平に傾きつつあるとの情報を伝えた[*Daghregisters van het Kasteel Zeelandia* 1648-1655:142-143]。1651 年 6 月には、カンボジアのマレー人有力者インチェ・アッサムに総督レイニールスゾーンが、1652 年 11 月には台湾長官フェルブールフが華人商人サコに、台湾への渡航許可証を發布し、カンボジア・台湾間におけるカンボジア船の直接航海を承認した[村上 1958:217]。

一方、1651 年 12 月にはトンキンに派遣されていた弁務官ウィレム・フルストテーヘンがカンボジアに赴き、国王に書簡を送り、会社と和平協定を結ぶ気があるなら、使節を次の北のモンスーンのときにバタヴィアに送るように伝達した[*Generale Missiven* II:532]。重役会の意向に押されてか、総督府は 1650 年ごろからカンボジアとの和平協定締結に積極的な姿勢を示すようになった。

1652 年 5 月、国王の側近オヤ・カラホムの使節として、インチェ・アッサムを含む 4 名がバタヴィアに来航し、総督と評議員会宛の書簡をもたらしした。しかし、彼らには和平協定を結ぶ権限が与えられておらず、商取引をした後、7 月にカンボジアへ向けて出発した。この際総督府は、カンボジアとの和解を望んでいるため、国王が然るべき権限を持った使節をバタヴィアへ派遣し、両者間の紛争を処理することが賢明であるとこれらの使節に伝えた[*Generale Missiven* II:616-617]。

1653 年 3 月 16 日、カンボジア国王の使節がバンテン経由でバタヴィアに到着し、米、安息香、日本銅などをもたらし、総督及びインド評議会宛書簡を引き渡し、両者間で関係再開に向けての話し合いが開始された[*Dagh-register* 1653:26-27]。約 4 ヶ月後の 7 月 5 日に、使節は東インド総督及びインド評議会宛書簡を携えてカンボジアへ帰国した[*Dagh-register* 1653:94]。もっとも、この使節は交渉を行う代表者ではなく、カンボジア国王はバタヴィア総督府に対し、交渉する権限を有する使節をカンボジアへ送るよう求めた。これに応じて総督府は、8 月に自由市民バステアーン・バイロンをカンボジアへ派遣した[*Dagh-register* 1653:115] [*Generale Missiven* II:697]。

その一方で、インチェ・アッサム率いるジャンク船 2 隻が、バンテン経由で同年 3 月バタヴィアに来航し、米、安息香、漆などをもたらし[*Dagh-register* 1653:32-33]、6 月にインド綿布、綿糸などを積んでカンボジアへ帰国した[*Dagh-register* 1653:91]。さらに 8 月

には、バタヴィア在住のパドッカ・ラジャがジャンク船を 1 隻、また同地のマレー人数人がジャンク船 2 隻をカンボジアへ派遣した[Dagh-register 1653:118]。

他方、ヨーロッパにおける第一次英蘭戦争（1652～1654）の影響が東南アジアにも及び、1653 年 6 月 3 日付カンボジア国王宛書簡において、VOC は国王がイギリス人を迎え入れる限り、カンボジアで活動を再開することは不可能であると通告した[Buch 1937:224-225]。このため、正式な通商条約締結は先延ばしされた。

こうして非公式ながら交易を再開した両者の間では、カンボジアからジャワへ送られる産品として特に米と安息香が、ジャワからカンボジアへもたらされる産品としてインド綿布が重要であったことが、『バタヴィア城日誌』の記述から明らかとなる [Dagh-register 1648:85,93;1653:26,32-33,91]。

米は、食料として欠かせなかった。ジャワも米の産地であったが、1640 年代になるまで、VOC はジャワの内陸農村地帯を掌握していたマタラム王国と陰悪な関係にあった。1646 年、VOC はマタラム王アマンクラット 1 世と条約を締結し、マタラムとの友好関係を構築し、米の安定的な獲得を目指した。しかしアマンクラット 1 世は王権強化を目指して、交易独占をもくろんだため、VOC はその後も希望通りに米を入手できなかった。このため、VOC は米をジャワ以外の地からの輸入に頼らねばならず、その一つとしてカンボジアを重視した。

また安息香は、焚香料として大きな需要があった。鄭和の遠征（1405～1433）に随行した馬歡が著した『瀛涯勝覧』旧港国条には、「西方の国の人や鎖俚〔南インド〕⁷の人はこの香を好んでいる」[小川 1998:44、〔 〕内は引用者による補足]とある。また、リンスホーテンも安息香が、アラビア、ペルシア、中国、ポルトガルなどに輸出され、特にインドで大量に取引されると述べる [リンスホーテン 1968:500-501][山田 1982:197]⁸。安息香の主要産地は、スマトラとタイ北部及びラオスであり、ラオス産のものは最も良質とされていた[山田 1982: 173-174,186-187]⁹。カンボジアは、メコン川を介してラオス産の安息香を入手可能であった。

当時のラオスでは、交換財としてインド綿布が重要な位置を占めていた。前章で述べたように、1642 年にラオスを訪問したオランダ人は、シャム（アユタヤ）からムーア人（インド人ムスリム）及びシャム商人が陸路を通じて、毎年四万枚に及ぶインド綿布をラオスに持ち込んでいたことを記している。このような状況下で、安息香をはじめ、対日交易の重要産品である鹿皮や漆などの森林生産物を入手するために、カンボジアも大量のインド綿布を必要とした。

2. 「第一次条約」のバタヴィアにおける仮締結とその後の交渉

カンボジアと VOC との正式な合意形成へ至る道は、しかしながら平坦なものではなかった。1656 年 7 月 8 日、バタヴィアにて「第一次条約」が仮締結された。その内容は、以下のとおりである（〔 〕内は筆者による補足）。

「一方がカンボジア王シュリー・スルタン・イブラヒムの使節であるオランカヤ、ララット・ドゥ・ラジャ及びオランカヤ、ルラ・パルワン、他方が総督ヨアン・マーツアイケル及びインド評議会の間で締結された平和条約

1. 第一に、今日より将来にわたって、カンボジア王とオランダ人の会社（de **Nederlantsch Comp**）は、その臣下臣民相互に良好、誠実かつ固い平和と友好を維持し、したがって前述した国王と会社との間では、陸海双方において、あらゆる敵対的行為を停止し、行わないものとする。
2. 第二に、もし今後この和平を知らずに、いずれかの側の民・船舶・物荷が奪い取られたなら、その民・船舶・物荷は、戻されるであろう。すなわち、〔戻される分については奪われたものと〕同等とみなされるものとし、それ以上〔のもの〕とはしない。
3. さらに、カンボジア王は会社に、以前カンボジアで受けた損害に対する賠償金を総計で 25,499 レアル、すなわち、会社の職員が同地で殺害された年である 1644 年に、会社に数名の商人たちが正当に支払うべき未払いの負債 12,791 レアル、それに加えてフライト船オラーニエンボームから奪われ、会社が品物の所有権を今なお主張している日本銀 10 箱とカンガン〔綿布〕830 反、12,708 レアル相当をともに支払うものとする。会社のさらなる請求項目は、カンボジアで国王自身と精算され、合意を得るために留保される。その達成のため、前述の使節はできる限りの協力を行うことを約束する。
4. さらに、これより向こう 25 年の間、VOC のみが、カンボジアにおいて日本にとって有用な商品の取引を実施するものとする。他の全ての商人たちは、彼らが誰であれ、どんな者であっても排除される。国王は、必要なあらゆる手段をもって会社にその権利を適用しなければならない。
5. 今後、カンボジアにおいては、会社以外のヨーロッパ人に対し、それが誰であっても、いかなる例外もなく交易を行うことを許可しない。
6. また、これ以降カンボジアから、アンボイナ、バンダ、テルナテ、その周辺に位置する島々及び会社に敵意を有する、または〔会社と〕戦争状態にある場所に航海することはできない。ただし、カンボジア発の船が海上で会社の船と出会った場合、広南の船や会社の他の敵の船とは区別される。そのためにカンボジアに居住する船主は皆、海上に出る前に会社に対し自由航行許可証を申請し、受け取らなければならない。もし彼らがそれを持っていない場合は、彼らが被るであろう損害や遅延に対する賠償や支払いを主張することはできない。
7. マカッサルにおいては、会社の大敵たるポルトガル人によって大規模な交易が行われ

ているので、上記の使節はまた、王の近くにあつて、この地域とカンボジアとの間の航海を禁止・封鎖するために取りうるあらゆる義務を果たすものとする。

8. 会社はカンボジアに再び職員を駐在させ、誰からも妨害を受けることなく、取引を再開することができる。しかし国王は、いかなる悪人も彼らに面倒や不正を行わないよう、会社の駐在者を保護する義務を負う。
9. もし、カンボジアに居住する会社の職員が行方をくらましたり、逃亡した場合には、国王は彼らを捜索し復職させる義務を負う。その際、宗教を口実にするにせよ、その他のことを口実にするにせよ、いずれにしても〔それを口実として〕逃亡した者を庇護してはならない。
10. あつてはならないことだが、駐在する会社職員が現地で重大な犯罪を起こした場合、国王は現地の司法当局を通じて彼らを裁くことはできず、オランダの法律に従つて罰せられるために、彼らを会社の商館長に引き渡さなければならない。前述の商館長自身が、国王ないしカンボジア王国に対して重大な罪を犯した場合も、国王は罪を犯した者の身柄を、提出された証拠や証言とともに、総督およびインド評議会付裁判所で裁かれるために、一番早いバタヴィア行きの船で送り出さなければならない。

本条約は、現在のカンボジア国王シュリー・スルタン・イブラヒムと、現在の東インド総督ヨアン・マーツアイケル閣下とインド評議会委員、さらには、双方の後継者及び子孫によって未来永劫維持され、履行されることにならう。

1656 年 7 月 8 日 バタヴィア城にて

署名：ヨアン・マーツアイケル、カレル・ハルトシנק。ヨアン・クナウス

ニコラス・フェルブルフ、ディルク・ヤンスン、ガブリエル・ハルパルト（書記）

並びに

大使 オランカヤ・ラジャ・インドラ・ムッダ、オランカヤ・ルラット・ドゥ・ラジャ、オランカヤ・ルラ・パルワン

ともに署名を承認した。」[Heeres 1931:93-96]

1644 年の戦争での勝利にもかかわらず、カンボジアが VOC に賠償金を支払うことに同意していること（第 3 条）、VOC の独占交易を認めていること（第 4 条、第 5 条）、オランダ商館員に対する「治外法権」が認められていること（第 10 条）など、VOC に圧倒的に有利な内容に見える。一連の先行研究が同条約を VOC の外交的勝利であると捉え、リードがカンボジアにとって屈辱的な条約としたのも、一見すると妥当であるように思われる。

しかしながら、この時点で同条約は正式な条約として発効していなかった。同条約が効力を有するためには、この後さらにカンボジア本国で交渉を継続し、カンボジア国王の承認を得る必要があったことが、デイクやブッフによって指摘されている[Dijk 1862:336-342] [Buch 1937:226-227]。そのことは、条文第 3 条でカンボジア側の使節がその内容を達成するために、VOC に協力することが明記されていることから明らかである。

本条約については、この後のカンボジアにおける交渉も考慮しなければならない。『バタヴィア城日誌』によると、VOC の使節としてヘンドリック・インデイクがカンボジアに派遣され、9 月 11 日にカンボジア国王に謁見し、バタヴィアにて仮締結された条約を提示したが、カンボジア国王はこの時点での条約の承認を拒否した。そして 10 月 15 日、国王がインデイクに、条約に関するカンボジア側の回答を伝達した。その内容は以下の通りである。

- ① 第 1 条、第 2 条、第 6 条、第 8 条、第 9 条、第 10 条については承認する。
- ② 第 3 条については、オラーニェンボームから接收した日本銀 10,000 レアルとカンガン布 830 反の返還のみを認め、商人たちの残した借金については、その回収に協力することを約束する。
- ③ 日本向け商品の取引（第 4 条）については、向こう 25 年間の VOC による排他的独占交易の実施を認める。ただし、国王が行う日本向け交易については除外される。
- ④ 第 5 条については、国王は敵対していない国の者が我が国へ来ることを禁じることはできないが、彼らを招き入れることはしない。
- ⑤ 第 7 条については、マカッサルから我が王国へポルトガル人が来航することを拒むことはできない。しかし、我が臣民がマカッサルへ航海しないようにすることについては受け入れる。

[Dagh-register 1656-1657:36-37]

②で、1644 年当時、カンボジアの商人たちが VOC に対して負っていた負債 12,791 レアルの支払いは認められず、③では、国王が実施する日本向け交易に、VOC が干渉することができないことが求められている。また④では、オランダ人以外の外国人の排除について拒絶している。⑤のマカッサル・カンボジア間の航海禁止についても、マカッサルからカンボジアへのポルトガル人の来航禁止を拒否している。いずれも、7 月の交渉で認められていた点にカンボジア王が条件を加えたり、あるいは変更を求めていることがわかる。独占交易を進めようとした VOC としては、不満の残る回答であったといえる。

国王の回答に対しインデイクは、7 月に合意した条文から大きく逸脱したものとして不満の意を表明した。インデイクは副王ナック・チャウタに対し、事態を改善すべく考えられるあらゆる理由を述べ立てたが、カンボジア滞在の時間がなくなってしまい、それ以上の交渉を行うことはできなかった[Dagh-register 1656-1657:37]¹⁰。

その後、1657年1月3日、カンボジアからマレー人ナコダ（船主）ラナンがバタヴィアに来航した際、オランダ商館長、ヘンドリック・インデイクの1656年11月12日付カンボジア発書簡と、カンボジア国王が出した VOC による鹿皮・日本向け産品独占交易許可証の写し及び訳文をもたらした[*Dagh-register* 1656-1657:63]。さらに3月10日、カンボジア国王発東インド総督宛書簡がヤハト船ドロンメダリス号によってもたらされた。その内容は以下のとおりである。

「1657年3月10日バタヴィア着 カンボジア国王発東インド総督宛書簡」〔 〕内は筆者による補足）

この書簡はカンボジア国王の誠実な心により出されたものであります。

高貴なる総督閣下の書簡を、私〔カンボジア国王〕は受け取り、その内容を非常によく理解いたし、平和になったことをわが臣民すべてに周知させました。それによって今後は、オランダ人はわが臣民に対しあらゆる援助を行う義務があり、同様に我々もオランダ人に対しあらゆる機会に同じことを行うことが義務付けられます。そして、もしこの条約が結ばれたあとに、陸域であれ海域であれ、オランダ人がわが臣民に、あるいはカンボジアからオランダ人に対して損害がもたらされた場合には、かかる損害は、それをもたらした者の側によって補償されなければなりません。

当地に産し、日本で売られるあらゆる商品を、会社は締結された条約にしたがって独占的に購入することが許されます。しかし、私が、我が船を当地より日本に派遣しようと考えた場合、会社は鹿皮の半分のみを入手できただけで、彼らが丸ごと入手することは起こりません。日本向け商品を除いたほかのすべての品物のうち、半分のみを会社は買い入れることができます。残ったものは、ここにやってくる様々な商人たちのために残されます。

総督閣下のご要望により、全てのキリスト教徒（特にオランダ人の不倶戴天の敵であるポルトガル人）のなかでオランダ人のみが、我が王国にて自由に交易することができるようものとします。しかしながら、他のキリスト教徒たちは私に対して何らの罪も犯しておらず、また罪を犯したという根拠も全く認められないので、〔この問題については〕さらに厳格な注意が払われる必要があることを要請いたします。

アンボイナ、バンダ、テルナテ及びその周辺に位置する島々へは、私は条約にのっとり、船を同地へ向けて出航・派遣することはいたしません。したがってまた、彼の地にて〔私どもの船が会社の船と〕遭遇した場合、敵または侵入者として〔会社の船は私どもの船を〕拿捕して構いません。

しかし、この地〔カンボジア〕に属し、オランダ商館長が発給したパスを保有している他の船については、海上にて自由な取引を行うことができるものとします。

向こう 26 年間¹¹、日本向けの商品はオランダ人のみによって購入することができる
とする協定が結ばれ、また平和が実現したことは私にとってとても喜ばしいことです。

総督閣下が、私〔の書簡に〕 ご満足いただけたであろうことを信じております。」

[*Dagh-register* 1656-1657:118-119]

前年 10 月に、国王がインデイクに提示した回答と内容的にはほとんど変わっていない。この後、『バタヴィア城日誌』には「第一次条約」の交渉にかかわる記述は登場しない。したがって、本書簡によってカンボジア国王が本条約を上記の内容にて承認し、バタヴィア総督府もそれを受け入れたのである。次節で述べるように、VOC には不満な箇所があるものの、条約締結を急がねばならない理由があった。

3. 「第一次条約」の内容とその意義

「第一次条約」の条文のうち重要なのは、交易に関する諸問題について定めた第 4 条から第 7 条であろう。前述したとおり、これらの条文はすべて国王との交渉を通じてカンボジア側に有利なように改定され、VOC が理想とする形での独占交易を確立するに至らなかった。

特に第 4 条で、VOC による向こう 25 年間の対日交易独占が認められつつも、国王が日本向けの船を出す場合には、会社が制限できないこととなった。カンボジア王の商業活動が会社の独占交易に優先されることを、VOC が認めざるを得なかったことがわかる。また第 5 条で、VOC 以外のヨーロッパ人がカンボジアで交易することを許可しないとしながらも、彼らのカンボジアへの来航を禁止しないことが認められた。カンボジアにおけるオランダ人以外のヨーロッパ人商人たちの活動は、実質的に保証されたことになる。

したがって、VOC にとって最大の成果であったとされる第 4 条をはじめとする、「第一次条約」の交易に関する諸条項は、交渉の段階で大きく修正された。実際、同条約締結後のカンボジアにおける VOC の交易活動を見ると、後述するように、その独占交易は全く機能していなかったことが明らかとなる。

また、第 9 条と第 10 条は、VOC 側が条文に挿入することを強く要求したもので、これも現地勢力に対する VOC の優越を示すものとされる。しかしこの両条項については、カンボジアにおける条約締結交渉の過程で、国王は特に異議申し立てをせず、承認している。

ここで想起されるのが、1643 年のオランダ商館長・商館員虐殺事件である。この事件の背景として、オランダ人とポルトガル人との抗争があり、それに関する裁判に国王自らが直接関与した。その裁定にオランダ商館側が不満を持ったことで両者の対立が高まり、その結果上記の事件が起こった。これが翌年の VOC 艦隊のカンボジア派遣と戦争、さらにはカンボジア・VOC 間の公的関係の断絶へとつながった。それは、交易に王権の基盤を置く

カンボジア王にとって大きな痛手であった。かかる事態を二度と起こさないための安全装置として第 9 条、第 10 条の両条項を、カンボジア側も必要と判断したと考えられる。

また、当時カンボジアに滞在したイギリス人の報告には、

「当地に貿易に来る諸国民は彼らのシャーバンダルを有する。シャーバンダルはあらゆる普通の事件について裁判官の役を務める」[A relation of the situation and trade of Camboja : also, of Syam Tonkin, China, and the Empire of Japan:341]

とあり、当時外国人居留地を管理するシャーバンダルが、裁判にも関与していたことが分かる。カンボジアに居住する外国人として、オランダ人に対しても同様の措置が取られたと考えれば、第 9 条と第 10 条は、オランダ人に特権が与えられたことを示すのではなく、現地の慣習に従って挿入されたものと解釈できよう。いずれにしても、両条を近代的な意味での「治外法権」と見るのは妥当でない¹²。

最終的に決定した条約の内容は、必ずしも満足できるものではなかったが、VOC には同条約の締結・批准に至らねばならない理由があった。VOC にとって、鹿皮、漆などの日本向けの交易品を安定的に入手するために、カンボジアとの関係改善は急務であった。日本向け産品の入手先としては、他に広南とシャムがあったが、この両者と VOC とはいずれも緊張関係にあった¹³。

まず、当時 VOC と広南の支配者阮氏とは対立関係にあった。VOC は日本向け生糸を入手するため、広南と敵対していたトンキンに商館を設置し、その支配者である鄭氏を軍事面でも積極的に支援していた。これに対し広南は、マカオとの交易とトンキンへの対抗という二つの理由から、オランダ人のライバルであるポルトガル人と結んだ¹⁴。それでも VOC は、より多量の生糸や森林生産物を入手するために広南と交渉を行い、1651 年 12 月に「検閲されることのない自由な交易及び他の商人が支払わなければならない輸出入関税の支払い免除」を、VOC に認める条約の締結にこぎつけた[Li Tana 1998:74]。しかし、広南はこの条約をまったく遵守せず、結局 1654 年に VOC は商館の閉鎖・撤退を余儀なくされた。

一方、シャムとの関係も良好とはいい難かった。1656 年 8 月、VOC との友好関係を維持する政策を採っていたプラーサートトン王（在位 1629～1656）が死去した。するとその後わずか 2 ヶ月の間に、2 名の王が即位しては殺害されるという混乱が続いた。このようなシャムの混乱は、VOC の交易活動にとって大きな障害となった。国王と大臣が交代することで、それまで認められていた交易に関する VOC の特権が全て無効とされたからである[Bhawan 2007:114-115]。

そして、この王位争いに最終的に勝利し、即位したのがナライ王（在位 1656～1688）である。王の即位後、シャムと VOC の関係は一時好転した。シャムは対日貿易で重要な鹿皮

や蘇木、鮫皮をはじめ、安息香や沈香、象牙などの森林生産物を輸出した。しかし、プラーサートーン王のもとで強化され、ナライ王が引き継いだ王室独占交易政策は、VOC のもくろみと対立し始めた。

さらに、1630 年代後半～1640 年ごろにかけて大きな利益を上げたオランダの台湾貿易も、重要な日本向け産品だった鹿皮と砂糖の取引をはじめとして、中国人との競争に敗れ、1650 年代には急速に衰退していた[永積 1999:353-357]。このような状況下で、VOC がその最大の利益を上げていた対日本交易に必要な森林生産物を安定的に獲得するために、その生産地であるラオスと密接なつながりを有し、自らもそれらを産したカンボジアとの関係を再構築することが重要だったのである¹⁵。また、前述したように米を安定的に獲得するためにも、それは必要であった。

また、カンボジア側も、VOC との関係再構築を急ぐ必要があった。前章で触れたように、1656 年のオランダ商館の報告によると、カンボジアにおいて鹿皮をはじめとする商品の価格が高騰し、シャムの方が同じ商品をより安価に入手できた。華人やポルトガル人はカンボジアでの取引を避け、華人はラオスと交易ネットワークを有したチャンパやコーチシナ(広南)で森林生産物を入手していたという[Indijck, Kettingh en Stouthart. 1656a:358-359]。鹿皮・漆などの日本向け産品の少なからぬ量がラオス産であった¹⁶。価格の高騰は、カンボジア王の価格操作だけでなく、交換財となるインド綿布が不足したためと考えられる。王にとって、カンボジアにラオス産森林生産物をより多く集荷させるために、多量のインド綿布を持ち込みうる VOC との交易再開は急務であった。

4. 「第一次条約」締結後の VOC・カンボジア間交易関係

「第一次条約」の締結後、VOC は条約が履行され、独占交易がいくらかでも実現することを期待した。しかし、事態は VOC の思惑通りにならなかった。

1657 年 9 月のカンボジア商館長インデイクらの報告によると、

「しかし、ラオス人との交易はまったく行わない。というのも、国王がラオス人に対し、その産物を全てインチェ・アッサムに引き渡すよう強制しているためである。同人は国王によって、称号と権威を非常に強化しており、現在最も重要な代理人として奉仕している。このため、誰もが心ならずも彼とうまくやっていかなければならない」

[Indijck en Kettingh 1657:363]

とある。ラオスから持ち込まれる鹿皮、漆、安息香などの産品が、カンボジア国王の信任を得ていたインチェ・アッサムに完全に掌握され、彼の権威がそれによって非常に強化されていることがわかる。

また、別の報告でインデイクは、銀の不足により鹿皮の集荷に支障が出ていることを指摘する[Indijck 1657:362]。一方、VOC に平和かつ自由な交易が約束されたにもかかわらず、実際にはラオスとの交易は国王が支配しており、国王はラオス人が持ってくる物全てを自分の交易のために使ってしまう、支払いは布と糸で行うことを強制している、その結果、オランダ商館が現金で購入できるものはわずかであり、布の交易に損害が生じているとも述べている[Indijck, Kettingh en Stouthart 1657:363]¹⁷。

これらは、いずれもラオス交易に参入できない VOC の不満を示すものである。しかし、「第一次条約」にはラオス交易に関して定めた条項が存在しない。それ故、VOC がどれほど不満を抱こうとも、カンボジアに対しラオス交易に関する条約違反を指摘することはできない¹⁸。前述したように、鹿皮・漆・蘇木などの日本向け産品の少なからぬ部分がラオス産で占められていた。ラオス交易に VOC が参入できなくすることで、カンボジアは対日交易の独占を認めた第 4 条の効果を、大幅に削減することに成功したことになる。

さらに第 5 条ではオランダ人以外のヨーロッパ人の交易活動禁止が謳われているが、その厳格な適用について、カンボジア国王がそれを事実上拒否したことは、すでに見たとおりである。実際、当時のカンボジアにはオランダ人以外にポルトガル人が居住し、またイギリス人やデンマーク人も来航して盛んに交易活動を行っていた[Indijck en Kettingh 1657:363-364]¹⁹。

以上のように、「第一次条約」で保証されたはずの VOC の独占交易は、現実にはほとんど効力を発揮することはなかった。VOC はこの状況に対し、何ら有効な措置を取ることができなかったのである。

小括

1656 年～1657 年にかけて、カンボジアと VOC の関係正常化のために交渉・締結された「第一次条約」は、従来言われていたように VOC 優位の下で結ばれたものではなかった。その締結に至る交渉ではカンボジア王権も積極的に関与し、結果としてその内容はむしろカンボジアにとって有利なものとなった。VOC は不満を持ちながらも、カンボジアとの条約締結を急がざるを得なかった。その理由は第一に、日本向け交易に必要な諸産品の入手先である広南、シャムとの関係が良好とはいい難かったこと、第二に、オランダの対日交易の中継地である台湾の貿易が衰退しつつあったことである。これらの事情から、VOC は対日交易において重要な鹿皮・漆・蘇木などの諸産品を獲得しうるカンボジアを重視せざるを得なかった。またそれは、米の輸入先の確保にもつながった。

一方、VOC との関係再構築は、交易を拡大して王権を強化したいカンボジア国王にとっても必要なことだった。この両者の利害の一致が、「第一次条約」締結の最大の理由であった。しかし条約の締結にもかかわらず、VOC にとってその最大の成果であるはずの日本向け独占交易は、ほとんど機能しなかった。他方カンボジアにとっては、条約締結によって

VOC との関係が正常化したことで、インド綿布が従来以上に獲得できるようになった。その結果、カンボジア王はインド、イスラーム圏向けの安息香や日本向けの鹿皮、漆などの取引を掌握することが可能となった。それは王権の強化にもつながった。

本章で VOC 側からのみならず、カンボジアにとっての「第一次条約」の意義を検討したことで、従来 VOC 優位の下に結ばれていたとされる一連の条約の、現地勢力にとっての意味を再検討できたと考える。独占取引をもくろむ VOC による大量の産品買い付けが魅力であった現地勢力にとって、独占の網の目をくぐったり、その実効性を弛緩させる方策はいくつかあったと思われる²⁰。これまで VOC の優位を示すものと考えられていた諸条約の中に、現地勢力がしたたかに生き残りをはかった実態を見出すことができれば、15 世紀～17 世紀の東南アジアにおける VOC と現地勢力との関係を、従来とは違った視点から検討することが可能になるう。

¹ 現在の台南市の外港安平に当たり、オランダ人がタイオワンと呼び、中国史料では大員と記される港を指す[永積 1999:328]。その後、1662 年に鄭成功の攻撃で陥落するまで、中国南部におけるオランダの拠点として重要な役割を果たした。

² クラーンは 1644 年のカンボジアとオランダとの戦争までを主要な対象としており、その後の VOC とカンボジアの交渉について論じるところは少ない。

³ この他、カンボジア側の史料として『年代記』があるが、19 世紀以降の編纂物である上、史料の性格上、王の栄光、善行に関わる記述に偏っており、本稿で論じる交易面に関する記述はほとんどない。

⁴ このインチェ・アッサムは「この町の住人 (ingeseten deser stede)」と記され、「この町」はバタヴィアを指すから、この人物はバタヴィアに居住していた。この人物とカンボジアで大きな力を持っていたインチェ・アッサムは別人となる。「インチェ」は然るべき家系のマレー人に一般的な称号であり、固有名詞ではなく、アッサム (ハッサンか) もムスリム名としては珍しくない。

⁵ ジャワ島西部を発祥の地とする商船で、3 本の舵を有する。

⁶ 元来は 15 世紀～17 世紀のアジアでポルトガル人が用いた戦闘用の大型ガレー船。後に 3 本マストを備え 20 門から 50 門の大砲で武装した小型の高速帆船を指すようになった。

⁷ Soli の対音で、9 世紀～13 世紀にかけて南インドで繁栄したチョーラ王朝に由来する[小川 1998:14]。山田憲太郎は、コロマンデル地方を指すとする[山田 1982:191]。コロマンデル地方は、当時インド綿布生産の中心地だった。

⁸ 山田によれば、インドでは宗教儀礼に必要な香料として使われていたのは、ほとんど安息香だった[山田 1982:191]。

⁹ なお、山田は単純に「タイ産」としているが、17 世紀当時は、北タイはビルマの影響下にあった。一方東北タイは当時ラオスを支配していたラーンサーン王国の勢力圏内であった。したがって、「タイ産」の安息香と言っても、それはアユタヤを中心としたシャム産ではなく、ラーンサーン王国、すなわちラオス産のものとするのが妥当である。

¹⁰ インデイクは 1657 年 2 月 20 日にカンボジアを出発した[Indijck 1657:362]。3 月 10 日にバタヴィアに到着し、カンボジア国王発東インド総督宛書簡を届けた[Dagh-register 1656-1657:118]。

¹¹ 条約の条文では「25 年」と定められており、1 年のズレがある。この理由は不明である。現状ではオランダとカンボジアが用いている暦の相違による可能性を指摘するにとどめる。

¹² なお、VOC がこの条文を入れることを強く求めた理由については、検討の余地がある。VOC が他の諸国と結んだ条約において、この問題がどのように扱われているかを考慮する必要がある。この点については、今後の課題としたい。

¹³ この他にトンキンもあったが、この地の産品として重要だったのは、森林生産物よりもむしろ絹、生糸であった[永積 2001:163,164-169]。

¹⁴ 16 世紀末から広南阮氏とポルトガル人との交渉は始まっており、火器の輸入ばかりでなく、彼らを技術顧問として雇用するなど、両者は密接な関係にあった[八尾 2001:252]。

¹⁵ 1633 年～1641 年まで、VOC アユタヤ商館に在勤したファン・フリートによれば、プラーサートーン王治下のアユタヤでは、王室独占交易の徹底と外国人商人に対する待遇の悪さのため、ラオス人をはじめとするメコン川上流域に居住する人々はシャムを見捨ててカンボジアに赴き、同地で好待遇を受けていたという[ファン・フリート 1988:122]。

¹⁶ 鹿皮は、16 世紀～17 世紀にかけて、カンボジアの主力商品として知られていた[グロリエ 1997 :314][Valentijn 1724:38]。ただしウィストホフは、ラオスへ向かう途中で鹿皮約 500 枚を積んだラオス船と出会ったこと、及びバサック（現在のラオス南部、チャンパサック地方）が鹿皮の集散地となっており、カンボジア商人がその購入のために同地に 10 ヶ月に渡って滞在することを伝える[Wuysthoff 1642:158][Lejosne 1993:65]。ラオス産の鹿皮もカンボジアへ相当量持ち込まれていたのである。

¹⁷ 「第一次条約」締結により、オランダ船がインド綿布を大量に持ち込むようになったことに加えて、VOC に拿捕されなくなったことでカンボジアに向かう船舶、特にマレー人の船が増加し、一時的にインド綿布が供給過多になったことが原因と考えられる。

¹⁸ なお、次章で述べるが、1665 年に締結された「第二次条約」では、この反省があったためか、ラオス交易に関する条項が追加されることとなる。

¹⁹ この時点でイギリス人はカンボジア商館を閉鎖しており、その跡地をオランダ人が商館として利用した。このため、オランダ人は商館の用地を安価で入手できたという[Indijck, Kettingh and Stouthart 1657:359]。ただし、1658 年の広南阮氏のカンボジア侵略の際、イギリス人はオランダ人とともに広南阮氏軍の略奪を受けてカンボジアを退去したとの記録がある[Journal and consultations of John Edwards and Council at Bantam, 13 August 1659:330]。このことから、イギリス人も小規模ながらも活動が続けていたことが分かる。

²⁰ 例えばカンボジアは、前にも触れたように 1657 年 7 月にバタヴィアに使節を派遣し、コロマンデル海岸への自由航行許可証の発行を求めた[Dagh-register 1656-1657:217]。インド綿布の産地であるコロマンデル海岸にアクセスして、その入手に王権が直接関与することで、VOC の独占交易に楔を打ち込む狙いがあったと考えられる。また、シャムがオランダに対抗して他のヨーロッパ勢力（フランス人）に接近をはかったことも、こうした方策の一環として理解できよう。

第4章 「1658年反乱」とその後のカンボジア・VOC関係 ― マレー人の役割 ―

はじめに

近世カンボジア史を東南アジア海域世界のなかで考察しようとする本論文において、1658年の反乱によるナック・チャン（スルタン・イブラヒム）の失脚と新王（ナック・ムントン）のマレー人抑圧政策は、カンボジアと海域世界の関係の変容を示す重要な事象となる。

1656～1657年にかけて行われた交渉の結果、VOCとの通商平和条約（「第一次条約」）を締結したことで、時の国王ナック・チャンは交易活動を拡大し、権力を増強した。しかしながら、そのことは利益配分と交易政策をめぐり、一部の王族の間に不満を生じさせた。その結果 1658年、王族の一人ナック・ムントンを指導者とした、ナック・チャンに対する反乱（以下「1658年反乱」と呼ぶ）が起きた。この反乱は、国王側の反撃により、膠着状態から次第に反乱者側の劣勢へと推移したが、ナック・ムントンが隣国広南阮氏政権（以下広南と略）に支援を求め、同国が出兵したことで状況が一変した。最終的にナック・チャンを廃位し、ナック・ムントンが王位に就いた。

この反乱についてはマック・プアンが、『年代記』、1685年にアユタヤを訪れたフランス人宣教師ニコラス・ジュルヴェーズの記述、オランダ語史料などを用いて再構成している[Mak Phœun et Po Dharma 1984:285-318][Mak Phœun 1995:286-301]。マック・プアンは、広南の軍事的介入によって、ナック・チャンからナック・ムントンへと王位が交代したこと、それによってマレー人勢力が排除された点を指摘する。しかしながら、マック・プアンは、この事件がベトナムによるカンボジアへの初めての軍事介入であり、これによってカンボジアにおけるマレー人勢力の絶頂期が終わりを迎えたとして、あくまでカンボジア史のなかの一事件として捉えている。それゆえ、なぜナック・ムントンがマレー人を抑圧しようとしたのか、また、そのことが当時の東南アジア海域世界といかなる関係のもとで展開したかについては、ほとんど述べるところがない。

本章では、上記の観点からカンボジアにおけるマレー人の活動を考察する。同時代史料のオランダ語史料を主に利用しつつ、「1658年反乱」とナック・ムントンによるマレー人の抑圧が起こった理由を考察したい。なお、ナック・ムントンのもとで、その後マレー人は復権する。その要因も合わせて考察する。

1. 「第一次条約」締結から 1658年に至るカンボジアの状況

VOCと「第一次条約」を締結したことにより、米や森林生産物を買付け、多量のインド綿布をもたらすオランダ人との交易活動が再開された。また、ナック・チャンの積極的な交易政策により、当地で活動していたマレー人、華人、ポルトガル人、ラオス人らの活

動に加え、イギリス人やデンマーク人、スペイン人も来航した[Indijck en Kettingh 1657 : 363364]。第 2 章に提示した表 3 を見ると、「第一次条約」締結後、長崎に来航したカンボジア発唐船の数が激増していることがわかる。

こうして、ナック・チャンは権力基盤を強化した。1656 年 10 月のオランダ人の報告書によると、当時王はイスラームに深く帰依し、宗教家の助言に従って王都に居住せず、いかだの上に巨大な住宅を作ってそこに住んでいた。その一方で、王都では窃盗や殺人に対して厳罰を適用し、治安の維持を積極的にはかった[Indijck, Kettingh en Stouthart 1656a:357358]。また、国王はアンコールをはじめとしてカンボジア各地に行幸した[Indijck, Kettingh en Stouthart 1656b:360]。オランダ商館長インデイクは、離任の挨拶のために国王に謁見を求めたが、王が象狩りのため地方に出かけてしまったため、そこまで出向かなければならなかった。彼は謁見のため、商館から山地へ 20 マイル以上入った場所にあるプノンコーケー (Pnomkoukeeu) に 3 日かけて到着したが、国王はすでに移動してしまっていた。そこでさらに 4 マイル〜5 マイルほど奥地へ入ったババール (Babaer) の村まで王を追いかけ、3 日後ようやく謁見できた[Indijck 1658:364-367] (各地名の具体的な場所是不明)。国王が王都を不在にしても、治安は維持されており、また巡幸により、国王の権威がカンボジアの奥地にまで及んでいたことを示唆する。国王は王国内の秩序を保持しつつ、外国との交渉を自ら担っていたのである¹。

また、ナック・チャンと結びついていたマレー人は、カンボジア宮廷におけるプレゼンスを増大させた。マレー人有力者インチェ・アッサムは、上述したように、国王の信任を得てマラッカ海峡域との交易を行いつつ、ラオス交易をも掌握した。VOC はラオス産の森林生産物の交易独占を試みようとしたが、成功しなかった。さらに、前にも述べたように、1657 年 7 月、ナック・チャンはバタヴィアに使節を派遣し、コロマンデル海岸への自由航行許可証発行を求めた。ジョホールが 1648 年〜1651 年にかけて行った同様の要求が、最終的に VOC から認められており[L.Y.Andaya 1975:70]²、マレー人のアドバイスがあったものと考えられる。国王の交易政策にマレー人は大きな影響力を行使した。そもそもカンボジアと VOC の関係再構築を仲介したのもマレー人であった。

その一方でナック・チャンは、自らの潜在的なライバルとなる王族に対して厳しい態度で臨んだ。オランダ人の報告によれば、60 歳代の王族夫妻が呪術を行った罪で三つ切りの刑に処されたという[Indijck, Kettingh en Stouthart 1656a:358]。当時国王はイスラーム宗教師の教えに傾倒し、国王のみが行使できる超自然的な力を自分以外の者が使うことに厳しい措置を取った。このため多くの王族は、国王に忠誠を誓わざるを得なかった。別の報告では、王の周辺の王子たちは、普段は粗末なプラウ船に乗せられ、王のために奉仕させられていた[Indijck, Kettingh en Stouthart 1656a:358]。

とりわけ、ナック・チャンが 1642 年に即位した際殺害した前王の王子ナック・ムントン (ナック・チャンの甥) らに対する締め付けは、厳しかった。彼らが、王が構築した利益

再配分の仕組みからも排除されていたことは、後述する「1658 年反乱」の際、宮廷の主要な高官や大臣のほぼ全てがナック・チャンを支持しており、反乱に加担したのはナック・ムントンとその兄弟、及び彼らの支持者に限定されていたことから伺える。ナック・ムントンらは、こうしたなかで王を支えていたマレー人の排除を唱えるのである。

2. 「1658 年反乱」

2-1 南シナ海における華人船の活動とナック・ムントンのマレー人排除

ナック・ムントンにそうさせた背景には、海域世界におけるマレー人の役割の変化と、彼の王妃の出身地広南の隆盛があった。

ナック・チャンの治世と同じ時期、海域世界ではパタニの重要性が低下しつつあった。パタニは 1630 年代にはジョホールをはじめとするマレー人諸王国と良好な関係を保ち、南シナ海域における中継港として重要な役割を担っていた。しかし 1645 年、パタニ宮廷の内紛の際に、在住していたジョホール出身者を殺戮する事件を起こし、ジョホールとの関係が悪化した。そのことは、マレー人商人のパタニ離れを引き起こし、中継港としての地位は後退した[B.W.Andaya&L.Y.Andaya 1982:70-71]。

また、1650 年代に入ると、福建・台湾の華人船さらに台湾鄭氏船（国姓爺船）が東南アジアに来航するようになり、華人船の活動が活発化した[L.Y.Andaya 1975:71-73][Blussé 1988:117-119]。ジョホールも鄭氏船との交易で潤った。華人商人が南シナ海の主要な港市を結びつける幹線的ネットワークを形成し、これまで東西交易に関与してきたマレー人はこれら華人の活動を支える存在へと変容した。

それとともに、広南が南シナ海の華人船の中継港として台頭した。17 世紀前半に広南は、東南アジアにおける華人船の主要な寄港地のひとつとなった。表 4 を見ると、17 世紀半ば以降広南から日本へ向かう華人船が激増していることがわかる。日本や中国、さらに台湾との交易における中継港として、広南の重要性が増大したのである[Li Tana 1998:68-69]。

ナック・チャンはこうした状況のなかでも、マレー人を積極的に活用し続けた。VOC や海域マレー世界およびラオスとの交易にマレー人を、中国と日本の交易にはマレー人とつながりを持つ華人を活用した。これによって、カンボジアの交易は活性化した。しかし、その利益に与れないナック・ムントンらの不満は増大した。

1658 年 1 月 25 日、ナック・ムントンを中心とした 5 人の王子が、国王に対して反乱を起こした³。反乱軍は、勢いに乗って王都に侵入した。反乱軍の人数は一時 8,000 名に達し、国王の側近オクニャ・デチューとイギリス人シャーバンダルを殺害した⁴。国王派の王族の一人であるナック・チャンスタ・オントブラートと華人集団の有力者の一人であるオヤ・ワンは、国王のもとに逃れた。国王側も王子の一人であるナック・プロム・キーファが宮廷高官のオクニャ・ユメラット及びカラホムと合流し、マレー人とカンボジア人の混成部隊 2,000 名を率いて布陣し、これに対抗した[Kettingh 1658:372]。

年代	カンボジア	広南	パタニ	シャム	トンキン	台湾
1647	1	2			2	1
1648	1	5	1			
1649	1	1			1	1
1650	1	3			4	
1651	3	6		1	3	
1652	4	4		1	4	
1653	5	5	2	2	4	
1654	4	4	1	2		
1655		2	3			
1656	4	7	1	3	2	
1657	11	2	2	3	1	
1658	2	4	1	5	1	
1659	4	2	1	6		
1660	1	4	9	5		
1661	2	1	1	3		
1662	1	3	1	3	1	2
1663	3	4		3		3
1664	4	5				5
1665	3	9	1	1	2	8
1666	4	6	2	4		14
1667	3	3	2	3	1	11
1668	1	4		5	1	12
1669	1	4		3	1	10
1670	2	4	2	1	1	11
合計	66	94	30	54	29	78

表 4 長崎来航唐船地域別船数（1647～1670）

[岩生 1953:pp.12-13] から本稿で扱っている地域を抜粋して筆者が作成

この後、両陣営は小競り合いを続けるが、ナック・チャンはイギリス人やデンマーク人に協力を要請し[Kettingh 1658:372]、高官・廷臣の支持を受けて体勢を立て直した。2月～3月にかけて、戦況は膠着状態となった。オランダ語史料によると、3月に入るとナック・ムントンは火器は豊富だが動員力に欠けた。他方国王側は、大兵力をもって街道を封鎖し、反乱者を包囲しているが、火器が不足していたという[Kettingh 1658:382]。オランダ人は、火器や弾薬、資金が中国からの貿易船で王のもとに届くと、国王側が勝利すると予想していた[Kettingh 1658:384]。

これに対し、ナック・ムントンは国王に和睦を提案した。その際に「自分はマレー人を排除する以外のことは望んでおらず、そうしていただけるならあなたを国王と認め、その脚に接吻いたします。」と述べている[Kettingh 1658:381]。ただし、国王にとって、マレー人の排除は承服し難かったであろう。

ナック・ムントンは、そこで広南に支援を求めた。ケッティングの報告によれば、彼にはナクプラ・インメダという名の広南出身の王妃がいた[Kettingh 1665b:410,415]⁵。当時の東南アジアの女性は商業活動に関与しており、王妃は両王家の交易関係を緊密にする重要な役割を担った[Reid 1988:155-157]。彼はのちに即位後、ケッティングとの会見で 1658 年の広南の侵入について、反乱を成功させるために自らの意志でその支援を求めたとしている[Kettingh 1665a:400]⁶。

2-2 反乱の終結と VOC の排除

「1658 年反乱」は、広南軍の介入によって、一気に決着がつくことになった。広南側も、米や貴重な森林生産物を産するカンボジアとの関係を強化することを望んでいた。『嘉定城通志』(以下『通志』) 卷 3 疆域に、以下の記述がある。

「太宗孝哲皇帝戊戌十一年（黎神宗永寿元年、大清順治十四年⁷、明永曆十二年）秋九月、高綿国王匿蟪禎犯辺、(原文注 按高綿無姓氏、凡王之子孫皆称匿蟪、禎其名也、而名則以美称者命之。雖祖先同名、亦不避諱、我国所下文書、但称高綿国王匿蟪某、盖以其王子初封名而称之、若彼国王爵所称、則有十一二字至二十三四字之多、随所微称亦無定例)、欽命鎮辺營(原文注 辰拓土之初、凡界首者名為鎮辺、考此鎮辺者、乃今之富安鎮是)、副将燕武侯、参謀明禄侯、先方該隊春勝光侯、提兵二千、二旬至高綿、每吹城大戦破之、擒其王匿蟪禎、械詣広平營行在。

聖諭赦罪、仍封匿蟪禎為高綿国王、令為藩臣、恭修職貢、毋與藩民侵擾、爰命官兵護送帰国。(以下略)」

高綿（カンボジア）王匿蟪禎（ナック・チャン）⁸が広南を攻撃したので、出兵してこれを破り、匿蟪禎に広南の藩属国になることを認めさせたという。『大南寔録前編』（以下

『前編』巻4にも、ほぼ同じ内容の記述がある。上述の史料が唱えるカンボジアが広南の領土に攻め込んできた「事実」は、ベトナム史料以外からは確認できない。オランダとイギリス側の史料は、逆に広南がカンボジアに攻め込み征服した、と述べている[Dagh-register 1659:48] [Farrington&Dhiravat 2007:330]。ベトナム史料の記述は、広南のカンボジア侵攻の正当化のための理由付けであろう。また、『通志』に見える毎吹城(『前編』では興福城)は、「現在の辺和(ビエンホア)に含まれる」と注記されており、広南軍はカンボジアに侵攻していないことになっている。ベトナムが他の国を攻撃する場合、対象国が自国の領土を攻撃したのに対して、自衛かつ正当な反撃を行うとする論法を、ベトナム史料は用いるからである[桃木 2011:177] (各地名については、57 ページの地図 6 を参照)。

ここではベトナム史料上で、この事件が起きたとされる太陰暦 9 月という時期について、広南軍の侵入ルートや到達点を考察するために検討したい。広南(記事上では鎮辺營)を出発した軍勢がカンボジアと衝突するまでの期間は、『通志』によれば二旬、すなわち約 20 日間である。鎮辺營は富安鎮(現在のフーイェン)を指し、毎吹城は前述したとおり、ビエンホアに当たることは、両史料の原文注からも明らかである⁹。そうになると、移動に 20 日かかったことになり、さすがに時間のかかりすぎである。しかし、この 20 日間を鎮辺營(フーイェン)からカンボジア王都に至るまでの期間とすると、広南軍は遅くとも 9 月の半ば(太陽暦の 10 月後半から 11 月)以降にカンボジアに入り、ナック・チャンを破ってカンボジアを制圧したことになる。

『バタヴィア城日誌』1659 年 3 月 15 日付記事は、カンボジアに関し「クアンナム人によって全面的に支配・占領されているという確度の高い風評」があったと述べる[Dagh-register 1659:48]。当時カンボジアとバタヴィアの間は、順風で片道 1 ヶ月半から 2 ヶ月程度かかる。この風評がカンボジアを発したのは、逆算して 1658 年 12 月から 1659 年の 1 月ごろとなろう。カンボジアに入った広南軍とナック・ムントンがカンボジアを「全面的に支配・占領」するまでに、1~2 ヶ月を要したと仮定すれば、ベトナム史料に記載された太陰暦 9 月という時期は、出兵に関する情報としては妥当となる。

遡行者(遡行年)	メコン河口到達日	プノンペン到着日	かかった日数
ハーヘナール(1637)	5 月 9 日	6 月 10~11 日	31~32 日
レーヘモルテス(1643)	9 月 30 日	10 月半ば	約半月
ハロウズ(1644 年)	5 月 10 日	6 月 6 日	26 日
メイヤー(1664 年)	7 月 30 日	9 月 30 日	60 日(遡行 53 日)
森助次郎(年代不詳)	不明	不明	60 日

表 5 17 世紀船舶メコン川遡行日数

[岩生 1966][Kraan 2009][北川 2015]に基づき筆者が作成

広南から海路メコン川河口に到達するには、順風で 10 日前後かかる¹⁰。さらに南に位置する鎮辺営からならば、その半分程度で到達できる計算になる。そこからメコン川を遡上してカンボジア王都に至るには、これより少し早い時期に川を遡上したレーヘモルテスの事例を見れば、半月程度で王都付近に到達することは不可能ではない（表 5 を参照）。そのように考えると、鎮辺営からカンボジア王都まで、20 日前後で到達できた可能性はある。

ただしこの時期はまだ南西モンスーンが優勢であり、鎮辺営からメコン川河口に至る期間は、上述の計算よりも時間がかかった可能性が高い。さらに、遡上中に会える船同士の戦闘も考えられ、実際にその期間内で到達できたかどうかは微妙なところである。

もう一つの可能性として、山越えをして、ラオスのメコン川中流域に至り、そこからメコン川を下ってカンボジアに侵入するルートを提示しておきたい。広南王都（フエ）から山越えをしてラオスに入るルートは、16 世紀末にはすでに知られていた[モルガ 1966:80-81]。チャンパも山岳民族と密接な関係を有しており[Hickey 1982:107-120]、広南王都以外の沿岸部からも、山越えしてメコン川流域に至るルートが複数知られていた可能性は高い。それを広南が受け継ぐことは、十分考えられる。広南にとっても、ラオスは日本向け交易のための重要な産品をもたらす場所であり、ラオスおよびメコン川流域に影響力を及ぼす必要があった[Li Tana 1998:121-122]。広南がメコンデルタに影響下に置くのは、チャンパ制圧後の 17 世紀の終わりであり、当時の「南進」はメコンデルタまで到達していなかった。

この反乱において VOC は、ナック・チャンとナック・ムントンのどちらの側にも与せず、中立を保った。しかし、VOC 商館は焼き討ちされ、オランダ人たちはカンボジアからの退去を余儀なくされた。1656 ～1657 年にかけて行われた「第一次条約」締結交渉の後、VOC はカンボジアに再度商館を設置した。第 3 章で述べたとおり、同条約で保証されたはずの VOC の独占交易は、現実的にはほとんど効力を発揮することはなかったが、それでもマレー人の協力のもとに森林生産物を入手できた。カンボジア発のオランダ船として、1657 年にヤハト船エラスムス号が、翌 1658 年にはヤハト船ブルーメンダール号が長崎に入港した[山脇 1980:141]。VOC の対日貿易も活発化しつつあった。

こうしたカンボジア国内におけるオランダ人勢力の拡大は、広南に強い警戒心を惹起させた。広南は、当時ベトナム紅河デルタ地帯を支配していたトンキン鄭氏と対立し、断続的な戦闘状態にあった。VOC は、日本向け生糸を入手するため、広南と対立していた鄭氏を支持し、商館を設置するとともに軍事面でも積極的な支援を行っていた。広南は対日本貿易のための絹や鹿皮の供給地として重要だったため、VOC は 1651 年 12 月に広南とも交易上の協定を結んだことは先に触れた。しかし、広南がこの協定を遵守しなかったため、1654 年には VOC は商館を閉鎖した。1650 年代後半、VOC と広南の緊張関係が増大しつつあった。「第一次条約」第 6 条には、「カンボジア発の船が海上で会社の船と出会った場合、広南の船や会社の他の敵の船とは区別される」[Heeres 1931:95]とあり、VOC は広南を敵対勢力とみなしていた。

一方広南は、トンキン及び VOC に対抗するため、ポルトガル人と結び、彼らから火器を輸入するばかりでなく、軍事顧問として雇用するなど、親密な関係を築いていた。オランダ人とポルトガル人は、以前から対立していたが、前述したように 1641 年、ポルトガル領マラッカが VOC の手に落ちると、同地からポルトガル人が多数カンボジアに逃れてきて、カンボジアにおけるオランダ人との関係も悪化した¹¹。また、広南にとってカンボジアの米は不可欠であった。既に 1630 年代から大量のカンボジア米が広南に運ばれていたが、1665 年のケッティングの報告でも同地で米が非常に不足しているため、その購入のために多数の広南船がカンボジアに来航したことを記している [Ketthingh 1665b:407]。

VOC の活動が活発化している状況は、ナック・ムントンにはもちろん、広南さらにそれと親密な関係にあったポルトガル人にとっても、望ましいものではなかった。「1658 年反乱」におけるマレー人の排除と VOC の追放は、こうして連動した。

「1658 年反乱」が終結した直後のカンボジアについて、伝える史料は多くはない。その一つとして、『バタヴィア城日誌』1661 年 12 月 2 日付記事がある¹²。それによると、新王ナックモンタム (Nakmontam=ナック・ムントン) が「クアンナムから王国を解放した」 [Dagh-register 1661:428] とあり、反乱後カンボジア (少なくとも王都周辺) は、1660 年前後まで広南の占領下にあったようである¹³。前述したように、反乱を起こした際、ナック・ムントンらを支持する大官や有力者はほとんどいなかった。前国王 (ナック・チャン) の支持者らが反抗することも予想され、ある程度の期間、カンボジア王都周辺に広南の軍が駐留したと考えられる。

ナック・ムントンは、ナック・チャン及び彼と結びついたマレー人勢力、VOC を排除することに成功した。その結果、彼は前王が重視していた西方世界との交易をジョホールやバンテンから広南経由で来航する華人船に委ね、日本、広南、マカオなどシナ海世界との交易を重視するようになる。永積洋子の復元による『唐船輸入目録』によると、1660 年に 1 隻、1663 年に 3 隻のカンボジア船が来航し、鹿皮、砂糖、蘇木などの産品をもたらした [永積 1987:89,93-94] [北川 2015:43]。また、前述の 1661 年 12 月 2 日付『バタヴィア城日誌』によると、この年カンボジアから長崎に 3 隻のジャンク船が来航し、前述した報告とともに、牛皮 3,080 枚と鹿皮 71,061 枚をもたらした [Dagh-register 1661:428]。

この時期のカンボジアは、広南の支援を受けることと引き換えに、王都周辺はかなり大規模な略奪を受けていた。1665 年のオランダ語史料によると、カンボジアの土地は荒廃し、住民の生活が破壊されていた [Ketthingh 1665a:400]。その結果、米さえも不足し、VOC に支援を仰がなければならなかった [Articulen van Accort met die van Cambodia:392]。このような状況にもかかわらず、ナック・ムントンは日本へ交易船を派遣したことがわかる。また、自らを支援した広南との関係は交易面でも密接さを増した。1665 年のケッティングの日記によると、同年 3 月から 4 月にかけて、カンボジアに延べ 8 隻のコーチシナ (広南) 船が来航した [Ketthingh 1665b]。



地図 6 16 世紀から 18 世紀のインドシナ半島 ([八尾 2001:236]に基づき筆者が作成)

3. VOC とカンボジアとの関係修復

広南による商館の焼き討ちにより、VOC は再びカンボジアから撤退することとなった。VOC にとっては 2 度目のカンボジアからの撤退であった。しかしながら、その後の両者間の関係は、前回とはまったく異なる展開を見せた。

前回、すなわち 1644 年のカンボジア・VOC 戦争における VOC の敗北とオランダ商館の閉鎖後、両者は翌年から直ちに関係改善のための交渉に入った。これに対し、「1658 年反乱」と広南によるオランダ商館の焼き討ち以後、カンボジア・VOC 関係は沈滞した。『バタヴィア城日誌』において両者間関係の経過を確認できるのは、1661 年以後である。この年から 1663 年までの『バタヴィア城日誌』を見ると、カンボジアから数隻の船が来航した記録が見られる程度で、カンボジアと VOC が関係再構築に向けて何らかの交渉が行われた形跡はまったく見られない。

1664 年に入ると、この状況が変化する。VOC がカンボジアとの関係修復への動きを活発化させる。そのきっかけとなったのが、同年 2 月 22 日にカンボジアから戻ってきたジャワ船がもたらしたインチェ・アッサム（1658 年までカンボジア宮廷で影響力を行使した同名の人物とは別人¹⁴⁾）による総督宛書簡であった。同書簡はマレー語で書かれており、内容は以下の通りであった。

「この書簡は、オヤ・サリ・マハラジャ¹⁵⁾より、バタヴィアの海の船舶に相応の力を行使し、世界にその名を知られるバタヴィアの総督に向けて出されたものであります。

さらに、私め〔インチェ・アッサム〕は、総督のところへ伺うべきことをお知らせします。私めはこのように、総督に長い間お会いしておりません。コーチシナ人によって破壊されたカンボジアにこれ以上長く住むことは不快であり、悲しみであります。また、私めは確かに年老いておりますが、哀れみを賜るために、神の意志に従い、そちらに赴き、総督の命を謹んで受け入れる所存でございます。

そこ〔カンボジア〕で得られる安息香に関しては、マカッサル人が 1 ピコルあたり 26 タエルから 27 タエルで購入し、一級品については 1 ピコルあたり 35 タエルの値であります。もし総督がそう望まれるのならば、この価格を支払うことを返事として書簡にお書きください。そのようにして、私めがその返済を受け、儲けを得させていただくためです。さらに、非常に純度の高い一級品の漆は、1 ピコルあたり 21 タエルから 22 タエルの値がつきます。もし総督が大量の漆が運ばれてくることをお望みならば、総督はただそのことをお命じください。カンボジアの地に産し、総督が所望されるすべてのものも同様に、ただそれをお命じください。さらに私めは、総督のところに伺いたいと望むこと、すでに 2 年から 3 年になりますが、主人であるカンボジア王は自由にさせてくれません。なぜなら、バンカサ¹⁶⁾の地が破壊され、以前〔そうで〕あったと同様に、〔盛んな〕商業と商人の頻繁な来訪を促進するように、私めに求めているからです。今のとこ

ろ、カンボジアでは商業が繁栄しております。もし私めがそれを提示できるなら、このモンスーンの時期に総督のもとへお伺いすることへの許可を求めるつもりであります。（後略）」

[*Dagh-register* 1664:50] ([] は筆者による補足)

この書簡からは以下のことが判明する。

- ①広南による軍事介入はカンボジアに甚大な被害を与えた。その被害は交易面にも及び、未だ十分に回復するには至っていない。
- ②インチェ・アッサムが VOC 総督と面識を持ち、VOC との交渉において一定程度の影響力を行使しうる立場にある。
- ③カンボジア王は、インチェ・アッサムの VOC 総督との会見の希望を却下し、VOC との関係回復に必ずしも積極的ではないが、商業活動の振興には前向きである。
- ④メコン川上流域及びラオスの代表的な産品である漆と安息香の値段について具体的な言及があることから、この時期においても上述の地域とカンボジアとの交易において、マレー人がある程度の影響力を行使していた。

インチェ・アッサムがこの 1664 年初頭にこうした書簡を送った要因として、VOC とシャム（アユタヤ）との関係悪化を挙げることができる。1656 年、ナライ王が即位すると、VOC とシャムとの関係は一時的に好転し、王都アユタヤにおける交易活動において VOC は重要な役割を担った。しかし、前王プラーサートトーン王からナライ王が引き継いだ王室独占交易政策は、VOC の重大な障害となり、両者の対立が高まった。最終的に、両者は衝突するに至った。1663 年、VOC は艦隊をシャムに派遣し、チャオプラヤー川河口を長期間にわたって封鎖した。こうした VOC の強圧的な姿勢にナライ王は譲歩を余儀なくされ、VOC の独占交易を認める条約の調印を強いられた[石井 2001:188][Dhiravat 2003:297-301]。この結果、VOC はアユタヤにおいて名目的に独占交易を実現した。しかし、実際には華人船（唐船）を用いたアユタヤ王室の交易活動に十分な掣肘を加えるには至らなかった¹⁷。ナライ王と VOC の関係は冷却化した。VOC はこの状況に危機感を抱いた。シャムの代わりになりうる交易相手を求めていた。

インチェ・アッサムは、これを VOC とカンボジアの関係を修復する好機と判断したものと思われる。タシャールによれば、1680 年代、シャム湾沿岸の中心的な港市だったチャンテボン（現在のチャンタブリー）の長官はマレー人ムスリムであった[タシャール 1991:472]。また、当時のアユタヤにはマレー人が多数居住しており、シャム湾からアユタヤに至る地域にマレー人ネットワークが存在した[タシャール 1991:431-432]。インチェ・アッサムは、マレー人を介してこうした情報を入手し、VOC との関係再開交渉において自らが主導的な役割を果たすことで、カンボジアにおけるマレー人の地位の回復をはかったのであろう。

インチェ・アッサムの書簡を受け取った VOC は、これをきっかけにカンボジアとの関係再構築への動きを活発化させた。1664 年 6 月 14 日には、カンボジアとの協議を再開するに当たって以下の条件を決定した。

「(6 月 13 日) カンボジアに向けてはゼーハーン号が当てられると聞いている。そこでは、以下の条件を提示すべし。

1. 1656 年に国王と締結した条約の確認
2. 当地で起きた最近の反乱で、我々が受けた損害の補償
3. 条約の更新に当たり、最初の 25 年の間、皮革を独占する特権の発効
4. 我々と戦争状態にある限り、中国人を追放する
5. 国王の責任のもと、我々がイギリス人から購入した敷地に新たな商館を建設する」

[*Dagh-register* 1664:238]

上記の諸条件、特に 1 及び 3 から、VOC の基本方針は、「第一次条約」において保証された状況の回復にあったと判断できる。

VOC は使節団に命令書を与え、交渉の方針を指示した。7 月 17 日、商務員ヨアン・ド・メイヤーは、ヤハト船ゼーホント号でカンボジアに向けて出発した。商務員ピーテル・ケッティングの助けを得て同地での交易を確立し、国王と新たな条約を締結するためである。総督宛国王宛、および税関長宛インチェ・アッサム宛書簡を作成し、米及び種々の商品、総額 37,092 ギルダー相当を積み込んだ[*Dagh-register* 1664:282]。命令書の趣旨は、以下の諸点である。

- ①カンボジアの状況について知る前にカンボジア河（現在のバサック川）に入らない。
- ②浅瀬や砂州に対して、またあらゆる巧妙な攻撃に対して、細心の注意を払う。
- ③国王との最初の謁見に当たっては、出席者のことを前もって知らせ、しかる後に友好の申し出をし、交渉すべき担当者を求める。
- ④担当者または国王とさらに詳しい協議に入ったなら、以前の条約が承認され、さらに 6 月 13 日の条で決議から引用されたような他の諸点についても要求するところまで、ことを進めるように努める。
- ⑤前国王が作った負債については、現国王に支払わせる。
- ⑥国王がこれらの諸点すべてを認めないなら、そのときは交渉を中止して米やその他の商品を売却するにとどめる。国王が使節をバタヴィアに派遣するように求め、さらに同地に商務員補 1 名を留まらせる。
- ⑦反対に、我々が満足したならば、商務員ケッティングは簿記役のウェイケルスロート及び他の人員 7～8 名とカンボジアに留まる。

- ⑧あらゆる手段をもって、インチェ・アッサムがこちらにやってくるように仕向けるよう努める。そのために税関長による彼宛の手紙が書かれ、これとともに送られる。
- ⑨イギリス人の敷地に、商館を建設させる。
- ⑩補償を罰則とすることで、疑わしい、あるいは悪質な負債が作られないようにする。
- ⑪条約では海岸における権利という問題も取り入れられ、規定される。そのため、もし会社または彼の臣民に属する船舶が座礁した場合、国王は回収費用と労働賃金のみの他にはそれについて何らの権利を主張することなく、船舶あるいは品物を回収することを助けることが義務づけられる。

[*Dagh-register* 1664:282-283]

①と②は、1664 年時点においても、VOC がカンボジアの正確な情勢を把握しえていなかったことを示している。「1658 年反乱」以降この年まで、VOC とカンボジアとの交流はほとんどなかった。

③～⑦は、交渉の方針を示したものである。ここで注目すべきは⑥に、交渉が不成立に終わった場合でも、カンボジアに商務員補 1 名を駐在させることが明記されていることである。交渉が長期化することをも視野に入れた、VOC のカンボジアとの関係再開に対する強い意欲が伺える。

⑧の記述から、VOC がインチェ・アッサムを交渉の窓口と考えていることは明らかである。このことは他方で、VOC はカンボジアにおけるマレー人の地位低下をあまり認識していなかったと考えられる。

⑩と⑪は、「第一次条約」では定められていなかった、新しい項目である。本項目が実際に締結された条約でどのように規定されたかについては、後述する。

結論として、この時点で VOC は正確なカンボジア情勢を把握し得ない状態にあったが、交渉に関する詳細な方針を決めており、意欲的にこの交渉に取り組む意志を示していた。

4. 「第二次条約」の締結

メイヤー率いる VOC 使節団は、1664 年 7 月 30 日にメコン川河口に到着した。53 日をかけて川をさかのぼり、9 月 30 日にプノンペンへ到着した[Kettingh 1665a :399]。カンボジア国王も一行を受け入れた。使節団は直ちに交渉を開始し、同年 11 月 30 日付の書簡に同封して締結される見込みである条約の草案を送付している。結局、翌 1665 年 2 月 1 日にこの草案に沿った形で、2 回目のカンボジア・VOC 通商平和条約（「第二次条約」）が締結された。なお条約の条項には、VOC ならびにカンボジア側の付帯条項が添えられた。その内容は以下のとおりである。

「カンボジアとの和議に関する諸条項（先のヨアン・ド・メイヤーとピーテル・ケッティングによる 1664 年 11 月 30 日付カンボジア発バタヴィア宛書簡に同封された）」¹⁸

要求する諸点

1. 第一に、カンボジア国王とオランダの会社、さらには互いの臣民及び臣下との間で、十分に誠実かつ強固な平和及び友好関係が強化されること。これは今日より始まり未来永劫維持され、その場合には前述の国王と会社との間には、水陸双方にていかなる敵意も敵対も生じることはない。

〔国王の返答〕

- ・〔国王は会社に対し〕非常に親愛の念を抱いているので、彼の父親と同様に、国王は会社と交易を望んでいる。

2. 第二に、上述の国王は会社に対し、前国王が、条約に従って支払うことを約束したフライト船オラーニエンボームから持ち出した日本銀 10 箱とカンガン布 830 反の代価 12,708 テールの残額、すなわち 8,333 テール 5 マースを会社に保証し、支払うことに同意すること。

また、カンボジアにおいて会社が受けた商品、現金、銀製品についての損害 64,000 テールの返還を受け容れること。それはコーチシナ〔＝広南〕人がそれらを略奪し、すべて奪ってしまったときに、会社が当地の商館にて保有していたが、その資本とその利益は大いなる価値があり、会社はそれを失った。

また、我々のカンボジアにおける商館は、コーチシナ人によって一略奪され一焼き討ちされたので、国王は我々に対し、彼の父の時代にそうしたように、その好意を以てオランダ河沿いの土地を与える。そこに新しい適切な商館が、国王の意に従って、煉瓦あるいは木材で作られること。

〔国王の返答〕

- ・ 8,333 テール 5 マースを返還することを国王は了解せず、それについてまったく受け入れるつもりはない、先王は不倶戴天の敵であったので、彼が支払う義務はないと述べた。

コーチシナ人による損害はとても悲しいことである。

〔総督府向けの注意喚起および報告事項〕

- ・ 注意せよ。

これらの損害と借金について、高貴なる閣下と話し合いを持つために、バタヴィアに使節を派遣する予定である。

イギリス人の敷地よりも良いこの土地を勧めさえし、会社が好みに従って商館を建てることを許可した。

3. 第三に、カンボジア国王と永遠かつ堅固な和平を結び、維持するために、東インド総督ヨアン・マーツアイケル閣下及び東インド評議会〔東インド総督の諮問機関〕が同国王に対して抱いている正しく良好な好意を明らかにしたいことは、特別に編成された使節団から見て取れる。この使節団から東インド評議会は、カンボジアが米を必要としていることを知り、そのために我々は、販売するための米 40 ラストをともに運ぶ。

また、固い同盟と平和がますます力を持つことができ、それがさらに力を増していくために、もし上述の東インド総督および東インド評議会が、必要な時に同等の援助をすることを国王に求めた場合、会社の商館長が必要なだけの米を買い上げられるよう、許可を与えること〔を国王に求める〕。

〔国王の返答〕

- ・そのことは大いにそうしたく、必要な場合には可能な限り互いに助け合う。

4. 上述の会社は、カンボジアで、今よりはじまる向こう 25 年の間、会社のみが他のすべての商人を排して、日本向け商品の取引と売買を行えるよう、国王に求める。

他の商人は、いかなる者であれ、上に挙げた商品を運んではならず、そのことが見つければ処罰される。会社はその商品を差し押さえ、没収することができる。国王は会社に対し独占の許可を付与し、会社は必要なあらゆる手段をもって、しかるべくその権利を維持する。

また会社は、誰に対しても、大きくまとめてでも小さく分けてでも、貧者にも金持ちにも、それが誰であれ、それぞれの望みに従い、皆に会社の商品を売ることができる完全な特権を与えられる。かつてオクニャ・シュリ・マハラージャ（別名インチェ・アッサム（Intie Assam））が、会社の商品の買い上げを独占できると主張し、そのことは会社にとって非常に大きな不満となり、そのような不合理な、かつて聞いたこともないような方法が大いに会社を苦しめ不快にさせ、そのことが会社がカンボジアでの取引をやめる原因となったが、そのような害を受けることなく、自由に妨げられず交易を行いたい。会社はカンボジアにおいて、会社の商品をあらゆる者に販売し、現地の商品が何であれ、誰からであれ、どこの国の人からであれ、利益が上がりまた有用と考えられれば、それを購入することが出来る。

〔国王の返答〕

- ・彼〔国王〕は、その父の時代にもそうでなかったように、その王国において独占的に品物を買い上げ、運搬する特権をあたえることは、誰に対しても行わないが、彼に対する会社の好意を認めたので、彼は向こう 20 年にわたり、全ての日本向け取引を会社に許可した。

- ・自由にして妨げられることなく、売買を行うことを許可した。

5. 会社は国王に対し、ラオス人がこの地に来たならば、商品を取り引きしにオランダ商館に来て、会社の商館長がまず優先的に取引できるよう求める。会社の取引に必要と考える商品を購入できるようにするためである。

〔国王の返答〕

- ・ラオス王とは兄弟のような関係であり、すでに使節を送ってしまっているので、国王は会社と優先的に取引するように〔ラオス王に〕命令することはできない。しかし、彼ら〔ラオス人〕は我々と、我々は彼らと自由に取引することは好みのままにできる。

〔総督府向けの注意喚起および報告事項〕

- ・注意せよ。

まず第一に優先すべきこととして、コーチシナ人による損害を認めるよう求めた。

6. 今後カンボジアにおいては、会社の人間のほかに他のヨーロッパ国民は、誰であれ、いかなる例外もなく、交易を行うことはできない。

〔国王の返答〕

- ・国王は、彼の国ではいかなる者に対しても取引を禁止することはできない。すでにいくつかの国が彼らの使節を派遣してきているので、今や彼らに対して友好関係を断つことはできない。

会社が彼にそれを求めることは変である。というのも、外国人たちは多大なる好意を王国に示しているので、〔会社がそれを求めることは〕王国にとって著しい損害となるからである。

7. カンボジアから、アンボイナ、バンダ、テルナテ、その周辺に位置する島々や、会社に対し敵意を持っていたり、戦争状態にある地域に航海することはできない。会社の船が、海上にて会社の敵である船と出会った際に区別できるように、船長は海に出る前にカンボジアに駐在する会社の商館長に自由航行許可証を申請し、受け取らなければならない。許可証がなければ、彼らが被った航海での損失や損害に対する補償や支払いを一切主張することもできない。

〔国王の返答〕

- ・王国から自由に公開したいものは皆、商館長によるしかるべき書類を持つこと。そうしない者は、旅で起こりうる損害や難儀に対し自ら対処することになる。商館長は、不適切な場所に航海しようとしたり、危険を犯したりするような者に対しては、何人たりとも書類を与えるべきではない

8. 国王はその臣下や臣民、さらに住民がマカッサルに航海することを禁止する。また、どのようなやり方であれ、マカッサルからカンボジアへ航海したり、交易に来ることも決して許可しない。

〔国王の返答〕

- ・第 6 条と第 7 条への回答に準ずる。

9. 会社は、中国人たちと公然たる戦争状態にあるので、国王は中国人がカンボジアから北方に航海したり、そこからカンボジアに再び戻ることを認めない。というのも、北方に派遣されている我が艦隊の提督と船長に、中国人が我々に与えた大いなる危害に対し、一層多くの報復を行うべく、海上であれ陸上であれ、北方のあらゆる地域にいる全ての中国人の生命と商品に対し、多少なりとも可能ならば損害を与えるよう、緊急の命令を発したからである。

それ故、拿捕された中国人のジャンク、あるいは中国船にあったあらゆる商品は、それを。積み込んだ人やどこの国の出身者であれ、その如何に留意することも識別することもなく、全ての商品は会社によって戦利品であると宣言され、そのようにすると周知される。また、会社は拿捕された商品や損害に関する補償要求は、それについて権利を主張する者があったにせよ、その者がどんな者であれ、出された要求に応じることも全くない。戦利品として会社に差し押さえられた品物については、戦争の法に従う。

〔総督府向けの注意喚起および報告事項〕

- ・注意せよ。

この契約を結ぶために、私たちのところにやって来ている人々は、みな中国人またはその出自の人々なので、要求している警告や禁令に関する正式な文書を得ていない。以下の境界—すなわち、北方はチンコチャゴス（Cincochagos）、南方はプーロ・ウビ（P^o Ouby）及びプーロ・カンドル（P^o Candor）¹⁹まで—の内部では中国船にも、我々の敵対者にも損害を与えないよう〔国王が中国人たちとともに〕我々に提案する。

それは、我々には奇妙に思える。国王の祖先の時代にそうであったと彼らは言っているにもかかわらず、我々はこのようなことは未だかつて聞いたことがない。しかし、この問題については多くの議論がなされ、河から外へ出た途端に〔我々は〕攻撃できる。それゆえ、使節がバタヴィアでこれについて総督閣下と話をしなければならない、と彼〔国王〕に言った。

10. あらゆる、ものを持ち去ること²⁰を防ぐために会社は国王に以下のことを求める。

もし会社、あるいはバタヴィアの臣民の船や船団がカンボジア沿岸あるいは周辺で難破したり、座礁したり、その他の困難な災難に遭遇した場合、国王およびその臣民はそのような船または船団に対し、可能であればそれらが失われないようにするために、援助や支援を行う義務がある。また、難破に遭った商品については、例外なく、権利を主張することなく回収を助けることとする。国王あるいはその臣民に、なされた援助に対して支払いをする場合、その海難救助料や賃金についてはなされた援助が受けるに値するとおりに、もしくはなされた援助の重要性によって適切に判断されるべきである。

〔国王の返答〕

- ・同意する。彼はすでにそうすると約束しており、報酬が支払われれば、彼は満足する。

11. 会社は、何人からも妨害や障害を受けることなく交易を行うために、再びカンボジアに居住地を得ることができる。国王は、いかなる損害も不正も生じないよう、あらゆる悪意ある人々から会社の職員²¹を守り保護する義務を負う。

〔国王の返答〕

- ・そのことに同意し、約束した。

12. もし、会社の職員の誰かがいなくなったり、逃亡したりした場合、国王は、宗教あるいはその他いかなる理由であれ、その人物を我が物にすることなく探し出し、連れ戻さなければならない。

〔国王の返答〕

- ・そのようなことが起きた場合、そうすることに同意した。

13. あってはならないことだが、会社職員の誰かがカンボジアで何らかの重大な犯罪を犯した場合、国王も当地の司法当局もその者を裁くことは出来ず、オランダの法律によって罰するために、犯罪者は会社の商館長に引き渡されねばならない。上述の商館長自身が国王またはカンボジア王国に対し、何らかの重大な犯罪を犯した場合、国王は罪を犯した人物の身柄を確保するのみに留め、東インド総督および東インド評議会の下で裁かれるために、その事実に関する証拠や証言とともに、一番早いバタヴィア行きで〔同人を〕送る。

〔国王の返答〕

- ・そのようになされることになろう。」

[Meyer en Kettingh 1664:391-397] (〔 〕 内は筆者による補足)

「第二次条約」は全 13 条から成るが、広南による略奪への賠償を求める第 2 条をはじめ、第 5 条、6 条、8 条、9 条に、VOC とカンボジアとの間に不一致がみられる。とりわけ、これらの条文で謳われているカンボジアへ来航する他国者の締め出しに、国王は難色を示した。

「第一次条約」にまったく存在しなかった条項は、第 3 条の米の販売に関する部分、第 5 条、第 9 条、第 10 条となる。第 5 条はラオス交易に関する条項であり、第 10 条は VOC の船がカンボジア沿岸で難破した場合、カンボジア側が同船に行う支援及びそれに対する報酬に関する条項である。この 2 つの条文については、「第一次条約」に明記されなかったがゆえに生じた問題に対応するために、新たに挿入されたものと考えられる。国王は、第 10 条については同意しているものの、第 5 条についてはラオス国王との友好関係を盾にとって、VOC の要求を拒んでいる。対日交易において、ラオス産品は重要な交易品だったからである。条約正式締結後の 1665 年 2 月 11 日付命令書によれば、「ラオス人を〔オランダ商館に〕引き付けなければならない」[Meyer 1665a:399]（〔 〕内は筆者による補足）とされており、VOC の要求は最終的に通らなかったものと考えられる。

第 9 条は、華人の扱いについて定めた条項である。当時 VOC は、鄭成功の台湾攻（1662 年）によって、華人勢力とは公式には敵対関係にあると認識していた。条文の中で華人船の略奪を、「戦争の法」に従うものとして正当化している。しかしながら、このような VOC の要求は、華人に交易を依存するナック・ムントンにとって容認できるものではなかった。そのため彼は、少なくとも自らが勢力圏と認識している範囲では、VOC が華人船に攻撃を加えないよう求めた。上の草案では、この提案について VOC は難色を示し、国王と総督が改めて協議する必要があるとしているが、前述の 2 月 11 日付命令書によれば、「国王はその王国の境界がチンコチャゴス（Cinco Chages）、プーロ・コンドル（Poeloe Condor）、プーロ・ウビ（Poeloe Uby）に及ぶと主張している。それゆえ、我々は〔この範囲内では〕中国船を攻撃することは差し控えなければならない。」とされており、最終的に VOC はカンボジア側の要求を受け入れざるを得なかった[Meyer 1665a:399]（〔 〕内は筆者による補足）。

このように、ラオス交易と対華人政策については、VOC は自らの意見を条約に反映させることはできなかった。また、第 2 条の負債や賠償の支払いをめぐって同意に至らず、第 5 条、第 6 条、第 8 条、第 9 条についても完全な同意をみたわけではないが、1664 年 6 月 14 日に決定されたカンボジアの関係再開に必要な最低限の条件が満たされたと VOC は判断した。またナック・ムントンにも、広南軍の略奪により疲弊したカンボジアに対し、VOC が優先的に米を販売するという条項が魅力的であったのであろう。1665 年 2 月 1 日、「第二次条約」が正式に締結された。

5. 関係再構築後のカンボジア・VOC 関係

「第二次条約」は、カンボジア国王の書記によってカンボジア語で記され、VOC の署名がなされた。一方、VOC には国王の署名があるオランダ語テキストが手渡された[Meyer

1665b:401-402]。これを以て同条約は発効し、カンボジアにおける VOC の活動は正式に再開された。この際 VOC には、彼らを管轄するシャーバンダル、ナクプラ・ニリピットの名において、特許状が与えられた。その内容は

「会社以外に、カンボジア王国に産する皮革を買い占めることができる国〔民〕は存在しない。日本向け交易に有用な品物に関し、それを王国から持ち出そうとする者は、いかなる者であろうと会社によって罰せられるであろう。会社職員が違反を見つけた場合、その商品をジャンクや船から降ろさせ、会社のために没収してもよい。」

というものであった[Meyer 1665b:402]（〔 〕内は筆者による補足）。この特許状には国王の印が押されており、ナック・ムントンは VOC に建前として対日本交易の独占を認めたことになる。

ただし、VOC もカンボジア国王の姿勢を全面的に信用したわけではなかった。「第一次条約」においても、ナック・チャンと同様の取り決めを交わしたが、実効性はほとんどなかった。加えてカンボジアでは、鄭氏派を含め華人の活動が活発になっていた。使節団長のヨアン・ド・メイヤーは、条約締結に伴ってその任を終えてカンボジアを離れ、バタヴィアに戻る事となった。その際に「商館長」²²に就任したピーテル・ケッティングに以下の命令を与えている。

「国王と 1665 年 2 月 1 日に結んだ条約について、彼〔ケッティング〕はそれに正確に従い、20 年にわたって与えられている皮革の独占交易が実行されるよう留意しなければならない。ケッティングは、特にそのためにずるがしこい中国人に用心しなければならない。・・・(中略)・・・我々は〔中国人によって〕台湾から追放され、中国人と公に戦争状態にあるから、他〔チンコチャゴス、プーロ・コンドール、プーロ・ウビ以外〕のところでは逆に〔中国船を攻撃〕しなければならない。」[Meyer 1665a:399]（〔 〕内は筆者による補足）

この命令書は、皮革の独占交易を実行するために、華人の活動に用心するよう求めている。前述のように、カンボジアにおける対日交易に華人が重要な役割を果たしており、VOC は華人が大きな脅威になりうると認識していた。なお、国王が王国の一部と主張した島々では、華人船への攻撃を控えざるを得なかった VOC も、基本的に華人とは戦争状態にあることを再確認している。

このようにして、メイヤーはケッティングへの引き継ぎと残務処理を行った²³。その後、メイヤーはプノンペンに赴き、同地で待機していたヤハト船ゼーホント号に乗り込み、2 月 13 日に出航した[Meyer 1665b:402][Ketthing 1665b:406]。メイヤーはカンボジアを去るに

あたり、国王および国王の弟の若王（皇太子）ナクシダイッ・ナモティパディ（Naccidaidth Namotipadij）から総督及び会社宛に、蘇木、蜜蠟、低級の安息香、カランバック（伽羅）を受け取った[Kettingh 1665b:405]。

メイヤーから商館の業務を引き継ぐと、ケッティングは積極的な行動を開始した。メイヤー滞在中の 2 月 12 日には、国王の象の監督長官であるオクニャ・ティークレイを訪問し、国王が VOC に与えた特権を成文化し、銅鑼を打って正式に布告するように求めた。国王は特許状を出しただけで十分としてこの要求を拒んだが、オクニャ・ティークレイはこの件についてオランダ人に協力する姿勢を示した[Kettingh 1665b:406-407]。

しかし、国王を取り巻く貿易役人たちは一枚岩でなかった。すでに華人商人たちの影響力が、役人たちにも及んでいた。3 月に入ると、ケッティングは、オランダ人担当シャーバンドル、ナクプラ・ニリピットに命じ、華人担当シャーバンドルおよび主要な皮革商人に対し、VOC が国王から与えられた皮革独占の特権を順守するようしばしば要求した[Kettingh 1665b:407-410]。しかし、ナクプラ・ニリピットと通訳のギデオンは、この命令を真剣に実行しようとしなかったため、ケッティングは前者を上級シャーバンドルのナクプラ・ラムシッドに、後者をゴンザブロに交代させた[Kettingh 1665b:411-413]。またナクプラ・ニリピットは、オランダ人から預かっていた皮革の独占に関する特許状を、あれこれと理由をつけて返却しようとせず、ケッティングは対応に苦慮した[Kettingh 1665b:412-413,416-417]。

その後もケッティングは、オクニャ・ティークレイやナクプラ・ラムシッド、外国人担当官代理ナクプラ・テーポルティオンらの協力を得て、華人がオランダ人の皮革独占交易を侵害しないよう交渉をした。しかし、華人担当シャーバンドルのチャウポニャー・シスルモットや華人商人の妨害によって交渉は難航した。

さらに、国王や王族自身による交易に対して、ケッティングは慎重な態度を取らねばならなかった。ナック・チャンの場合と同様、カンボジア国王は自らが絶対的な権限を有し、条約には拘束されない特権的立場が認められているという態度を取っていた。メコン川の地形上、武力でカンボジア国王を封じ込めることは困難なため、VOC もそれを認めざるを得なかった²⁴。ケッティングは、王弟ラマティパディ王子（前出の若王（皇太子）ナクシダイッ・ナモティパディ王子と同一人物）から、コーチシナ人の王妃ナクプラ・イニメダと国王の母ナシダイッ・プレルティアウが鹿皮を日本に送りたがっているとの相談を受けた。華人が王族を隠れ蓑にして皮革の交易を行おうとしていることを認識しつつも、彼女らの希望を黙認するしかなかった。

結局、4 月 24 日に華人商人と VOC の間で、皮革の値段に関する合意がなされた[Kettingh 1665b:422-423]。その後もオランダ人は、来航する華人船に自らが得た特許状に基づき、皮革の積み込みを禁止するよう求めた[Kettingh 1665b:423-424]。しかし、VOC は皮革交易を意のままにすることはできなかった。5 月 7 日の段階で、VOC が入手できた鹿皮は僅か四千枚程度に過ぎなかった。

ケッティングはこの件について同日ティークレイと協議し、8日には同人にナクプラ・テーポルティオンと新任の外国人担当官オクニャ・カラホムを加えて、善後策を練った。ケッティングは、華人が彼らの船に皮革を積み込んでおり、この件について国王に苦情を直接伝えたいことを打診した。国王がオランダの意向を認めそうにないことが予想できたオクニャ・カラホムは、オランダ人が直接国王を訪ねるのを見合わせるようにと忠告した。しかし、ケッティングがあくまで謁見にこだわったため、ナクプラ・テーポルティオンを同行させた。国王のもとに着くと、ケッティングは状況を国王に伝え、善処を求めた。これに対し国王は、オランダ人のために皮革を集めるべく、華人から鹿皮その他の商品を購入しようとしたところ、華人が支払いを銅で行うよう求めてきたので、皮革をそろえることができなかったと回答した。ケッティングは、皮革が華人に流れた可能性があるため抗議したが、国王の回答は曖昧なものに終始した[Kettingh 1665b:425-426]。VOCと国王との間の齟齬が拡大した。この件は後日、国王が大砲を鑄造するために華人ジャンク船の船主から銅銭を購入し、代価を鹿皮で支払ったものであることが判明した。これは国王自身の交易だったため、VOCは船を臨検できず、ジャンク船が鹿皮を積んで出航するのを傍観するしかなかった。国王の非協力姿勢が影響して、この年の後半には、VOCの意向を無視して鹿皮を積んだ華人ジャンク船3隻が日本へ向かう事態になった[Cheng 2013:219]。結局のところ VOC は、日本交易を独占することはできなかったのである。

マレー人勢力の後退は、オランダと華人商人・カンボジア国王との確執をより先鋭化させることとなった。その後も、カンボジアにおける VOC の交易活動ははかばかしくなかった。

同じころ、シナ海域では台湾鄭氏の影響力が強まりつつあった。1665年5月、清の艦隊が台風で壊滅すると、台湾近海での鄭氏の活動が活発化し、日本向けのジャンク船をしばしば拿捕するようになった。また、1666年には、鄭氏は台湾北西部の淡水の要塞を再建し、守備隊を置くとともに、基隆のオランダ人と交渉を行った。交渉が決裂すると、同年5月に基隆要塞を攻撃した。この攻撃は失敗に終わったものの、鄭氏は基隆を監視することで同要塞の影響力を低下させ、台湾近海の制海権を掌握した[Cheng 2013:215-216]。

しかし、鄭氏にとってはこれだけでは対日交易ルートの一部を支配したに過ぎず、日本交易向けの諸産品を入手するために、インドシナ各地の港との関係を確立する必要が生じた。また、1661年以降、清朝が施行した遷界令によって海賊の活動が活発化し、それが鄭氏の活動と関係を持つようになった。しかしながら、シャム（アユタヤ）は1664年のVOCとの条約により、華人に対するオランダ人の優越を認めていた[Dhiravat 2003:299-300]。また、トンキンでも鄭氏の活動は、VOC及びそれと結びついたトンキン^{チン}鄭氏政権の妨害で、はかばかしい結果を出せなかった。その結果、彼らの目はカンボジアに向けられるようになり、同地の交易からVOCを排除することを構想し始めた。ここで登場したのが、華人ピアウジャであった。彼はもとは海賊だったが、トンキン交易で失敗して台湾鄭氏と結びついた。

当時ケッティングは、VOC の鹿皮に対する排他的特権を実現すべく努力していた。しかしながら、彼が頼みとするカンボジア商人が死去し、宮廷での庇護者のオクニャ・カラホムがその地位を退いたことで、ケッティングの立場は弱体化した。彼は日本向け商品として僅か 6,262 テール相当の物品しか購入できず、華人が七万枚以上の皮革を積載したジャンク船を日本へ送っても、これに対抗する術を持たなかった[Cheng 2013:221]。

1667 年 2 月、ピアウジャはプノンペンに到着した。その後、ピアウジャがカンボジア宮廷に仕えたと、彼の影響力は格段に高まった。オランダ商館は危機感を強め、彼らのアドバイザーであるチャウポニャー・ザムに相談した。ケッティングは彼を通じて高官のチャウポニャー・テセモットに接触し、オランダ人の安全と引き換えに 1,000 テールをピアウジャに支払うことを提案した[Wijckersloot 1667:448]。ピアウジャはこれを拒否し、プノンペン在住華人へのオランダ人の負債を自らの一党が集めるために、バタヴィアに航行する許可証を発行するよう求めたが、ケッティングはこれを峻拒した。しかし、この少し後にチャウポニャー・ザムが、チャウポニャー・テセモットと激しく口論した末に左遷され、VOC は宮廷での庇護者をまた失った[Cheng 2013:221-222]。

6 月 20 日、ピアウジャは 200 人近い兵を率いてオランダ商館へ向かい、ケッティングの引き渡しを求めた。この結果ケッティングと部下数名が連行され、身代金として銀 4,873 テールが支払われた[Wijckersloot 1667:448]。6 月 25 日にバタヴィア発の VOC のヤハト船がカンボジアに来航した時、ケッティングはバタヴィアから増援と豊富な積荷がカンボジアに向かいつつあると述べ、国王に保護を求めた。しかし、同船のオランダ人船員から、これ以上の増援は望み薄との情報を得たピアウジャは、7 月 9 日夜半、オランダ商館の襲撃に踏み切った[Generale missive 1670:451]。これに対しオランダ側はなす術がなく、ケッティングら商館員が虐殺され、商館は炎上した。

カンボジア国王もこの虐殺を黙認した。実行した華人たちは、何ら処罰されることはなかった。これに対して VOC は憤激したが、同時期のアユタヤとの緊張関係が緩和されたため[Dhiravat 1990:137]、VOC はカンボジア商館の閉鎖に踏み切った。その後も VOC とカンボジアとの間では、後述するように交易関係は継続するものの、VOC がカンボジアで商館を構えることはなかった。

一方マレー人は、ナック・ムントン統治下でもカンボジアで活動が続いていた。優遇はされていなかったが、彼らには次に述べるような存在理由があった。

6. 「1658 年反乱」後のカンボジアにおけるマレー人の活動

この時期の VOC のカンボジア関連史料には、マレー人に関する言及は極めて少ない。例えば、今回は単に「ラオス人を引きつけなければならない」と記すのみで、ナック・チャンのもとにいたインチェ・アッサムのような存在は伺えない。ナック・ムントンによるマレー人抑圧策によって、ラオス交易のかなりの部分がマレー人の手から離れたことを示

している。一方ナック・ムントンは、この領域にも着々と影響力を伸ばしていた。1665 年 4 月にマニラから来航したスペイン人がラオス商人と安息香の取引を行う許可を求めたとき、これを拒絶することなく承認している[Kettingh 1665b:421-422]。他方 VOC は、ラオス商人から質の劣る少量の安息香しか入手できなかった[Kettingh 1665b:439]。

また、VOC と王との間の交渉を仲介したカンボジア側高官についても、明確にマレー人であることが示されている事例はない。これは、華人の事例—華人有力者（オクニャ・ワン、オクニャ・テイシンバット）、華人マンダリン（チャウポニャー・シスルモット）と明記されている—とは明確な対照をなす。華人が存在感を増大させていることを示す。

ただし、このような状況でも、バタヴィアとの交渉においてマレー人は一定の役割を果たしていた。『バタヴィア城日誌』によれば、1666 年 1 月 15 日午後、カンボジアから当地（バタヴィア）の停泊地に、バタヴィアの住人インチェ・ナランの「現地の船」が来航し、前年 12 月 17 日に書かれた商館長ピーテル・ケッティング発東インド評議会宛書簡をもたらしたという[Dagh-register 1666-1667:5]。1667 年 3 月 21 日にも、カンボジアから 1 隻の「現地の船」が到着し、商務員ピーテル・ケッティングの前年 12 月 5 日付書簡をもたらした[Dagh-register 1666-1667:248]。後者の「現地の船」の船主については記述がないが、前年と同じパターンであることから、こちらもマレー人の船である可能性が高い。バタヴィア総督府がカンボジアの状況についてマレー船から情報を得た事例は少なくなく、当時においても VOC とカンボジアのマレー人が関係を保持していた。

この時期バタヴィアからカンボジアへ向かった船の積荷を『バタヴィア城日誌』で見ると、以下の通りとなる。

① 1665 年 3 月 31 日

1 隻カンボジアへ、布 188 レイクスダールデル相当を輸出

[Dagh-register 1665:66]

② 6 月 30 日

1 隻カンボジアへ、綿布 225 レイクスダールデル相当を輸出

[Dagh-register 1665:152]

③ 1666 年 2 月 28 日

カンボジアへ 1 隻、98 レイクスダールデル相当の布[インド綿布]

[Dagh-register 1666-1667:20-21]

④ 5 月 8 日 フルート船スプルー号のカンボジア商館向けの積み荷

総額 15,657 ギルダー14 スタイフェル 14 ペニング、種々の布と柄物の布一式、45 箱分

[Dagh-register 1666-1667:67]

⑤ 12 月 31 日 カンボジアへ 1 隻、布 29 レイクスダールデル相当

[Dagh-register 1666-1667:216]

- ⑥ 1667 年 5 月 26 日 ヤハト船スヘルヴィス号
柄布 3 箱分と食料一山のみ、総額にして 2,997 ギルダー12 スタイフェル 4 ペニング
[Dagh-register 1666-1667:280]
- ⑦ 5 月 31 日
カンボジアへ 1 隻、41 レイクスダールデル相当の布
[Dagh-register 1666-1667:285]
- ⑧ 1668 年 4 月 30 日
カンボジアへ 1 隻、370 レイクスダールデル相当の布
[Dagh-register 1668-69:65]
- ⑨ 6 月 30 日
カンボジアへ 2 隻、346 レイクスダールデル相当の布
[Dagh-register 1668-69:110]
- ⑩ 1669 年 4 月 30 日
カンボジアへ 1 隻、1,950 レイクスダールデル相当の布
[Dagh-register 1668-69:314]
- ⑪ 5 月 31 日
カンボジアへ 1 隻、布 520 レイクスダールデル相当、kust
koraeltjes [サンゴ?] 48 レイクスダールデル相当、鼈甲 30 レ
イクスダールデル相当、鏡 12 レイクスダールデル相当
[Dagh-register 1668-69:334]
(〔 〕 内は筆者による補足)

このうち、④と⑥は、カンボジア到着後同地で皮革を購入し、日本に向けて出発している [Dagh-register 1666-1667:67:280]²⁵。シャム（アユタヤ）との緊張関係が 1667 年頃から緩和するまで、VOC にとってカンボジアは対日本交易の寄港地となっていた。

ここで注目すべきは、カンボジア向けの主要な積荷が、布すなわちインド綿布とされていることである。米をはじめ日本向け交易品の鹿皮、蘇木、漆などの交換財としてインド綿布が重要な位置を占めていたことは前に述べた。その傾向はこの時期においてもそれほど変わってなかったと思われる。

上述したとおり、華人が東南アジア各地に進出していたが、彼らの主要な活動は東南アジア各地と台湾や日本を結ぶルートで、バタヴィアとカンボジアの間では依然としてマレー人が活動していた。オランダ商館が襲撃されたのちの 1670 年にも、カンボジアよりマレー人インチェ・ラナンの船がバタヴィアに来航し、鄭氏華人のオランダ商館襲撃を伝えるカンボジア王の書簡をもたらしている [Generale missive 1670:451]。

7. 1670 年代カンボジアにおけるマレー人の復権

ナック・ムントンは鄭氏華人を優遇したが、華人を取り巻く状況は変動しつつあった。

第一は清朝の遷界令の影響である。台湾を拠点とした鄭氏の活動に対抗して清朝は遷界令を發布し、1661 年夏からこれを福建沿岸全域に施行し、さらに 1663 年までにこれを広東から浙江の一部にまで拡大した。台湾鄭氏も、日本、カンボジア、バンテンをはじめとするジャワ島各地の諸港市と交易し、1670 年には台湾にイギリス商館の開設を認めて、対抗した[永積 1999:364]。しかし、1670 年代に入ると遷界令が徐々に効果を発揮し始め、鄭氏を追い詰めた。この時期の台湾では、商品作物であるサトウキビの栽培が制限され、食糧を自給するために水田耕作に切り替えられた[上田 2013:326-327]。遷界令の強化によって、長崎に来航する中国船の数も激減し、1 年でわずか 9 隻にすぎない年もあった[永積 1993:363]。さらに、三藩の乱(1673~1681)において鄭氏が反清の姿勢を取ったことで、清は遷界令をさらに強化した。これによって、鄭氏の交易活動は大打撃を受け、その影響で食糧問題が発生し、軍の補給にも事欠くようになった。1680 年ごろには鄭氏の財源は枯渇し、その支配は動揺した[永積 1999:365][奈良 2016:69-70]。

第二に、対日本交易が変化しつつあった。生糸を例に挙げると、1640 年代にはトンキン産生糸が、日本のシェアの半分以上を占めていたが、1650 年代後半以降はバタヴィア経由でもたらされるベンガル産生糸が、その大半を占めるようになった[永積 1991:125-126]。さらに日本が 1668 年に銀輸出禁止令を發布したことで、銀に代わって金が輸出されるようになった。金は東南アジア地域を素通りしてベンガル、コロマンデルへと送られたので、ベンガル産生糸の集散地となるバタヴィアが重要性を増加させた[永積 1991:363]。それに伴って、東南アジア諸地域と日本との貿易は衰退し始めた。

第三に、VOC は 17 世紀半ばまでにベンガルやコロマンデル、スーラトに拠点を構え、1664 年にシャム(アユタヤ)を屈服させ、1669 年にはマカッサル王国を滅ぼして、海域世界で優位を確立しつつあった。インド綿布や 17 世紀後半以降重要な商品となるアヘンを得るために、東南アジア諸国にとって VOC との関係は重要になった。カンボジアでも VOC との関係再構築を望む勢力が台頭する。

こうしたなかで、ナック・ムントンは政策転換を余儀なくされた。『バタヴィア城日誌』によると 1670 年 1 月 5 日にカンボジア船がバタヴィアに来航し、国王の書簡をもたらした。この書簡においてカンボジア国王が名乗った称号はヤン・ド・プルトゥアン²⁶だった[Dagh-register 1670-71:4]。

この称号はマレー語で「国王」を意味する²⁷。ただし、イスラーム王からということではなく、カンボジア国王からの意味である。マレー人が翻訳者として仲介役となったためであった。

この 1 月 5 日付書簡の内容は以下のとおりである。

- ① ケッティングとウェイケルスロートが赴任していた時代、カンボジア王は彼らを手厚く遇した。
- ② 中国人たちによってオランダ人が殺害され、生き残ったオランダ人はカンボジアから逃がれざるを得なくなった。
- ③ カンボジア国王は、特に中国人がオランダ人を殺害した理由について調査を命じた。
- ④ ある中国人が、オランダ人殺害の理由を、3名のオランダ人が、オランダ人が中国人を殺害するぞと脅したためだと申し立てた。
- ⑤ その3名のオランダ人を尋問したところ、同様の回答が得られた。
- ⑥ 国王は、しかし、この回答を信じられず、結局中国人ピアウジャと中国人担当シャーバンダルを悪事の廉で処刑するよう命じた。
- ⑦ 3名のオランダ人については、バタヴィアに送還する。

[*Dagh-register* 1670-71:3-5]

1667年の華人によるオランダ商館焼き討ち事件への国王の弁明である。この書簡を送ったカンボジア国王は、1667年当時王位にあったナック・ムントンに他ならない。1670年代に入るとナック・ムントンは、前述した状況の変化から、華人優遇政策を転換し、宮廷内で重要な役割を果たしていた華人2名を殺害した。カンボジアに乗り込んできたピアウジャの目的は王国の富の収奪であり、オランダ商館焼き討ち後、彼と国王が対立したことは想像に難くない。彼らを粛清した後、国王は海域世界で優位を確立したVOCとの関係修復に踏み切った。

このためカンボジア国王は、VOCとの関係維持に重要な役割を果たしてきたマレー人を復権させねばならなかった。ナック・ムントンは1670年、71年、72年とバタヴィアに書簡を送った。この書簡のやり取りに大きな役割を果たしたのが、カンボジア在住マレー人インチェ・ラナンであった。『バタヴィア城日誌』によれば、これらの書簡はすべて彼の船で運ばれたという[*Dagh-register* 1670-71:2,275;1672:162]²⁸。

ただし、ナック・ムントンの努力は、権力強化にはつながらなかった。1672年末ごろまでにナック・ムントンが死去したことが、カンボジア国王の書簡から確認できる。1673年2月25日にバタヴィアに到着したカンボジア国王の書簡は、前国王（ナック・ムントン）が死去したことを伝える。この書簡を送った人物が新たに国王（ヤン・ド・プルトゥアン1世＝1世王と呼ぶ）の地位を継ぎ、最高の地位にあると述べている[*Dagh-register* 1673:40]。書簡が到着した時期から逆算すると、1672年末までにナック・ムントンが死去し、1世王が王位に就いたことになる。ナック・ムントンが殺害されたことを明示するオ

ランダ語史料は管見の限り見当たらないが、以下に示す『年代記』『華夷変態』の記述と考えると、その可能性が高い。

『年代記』ムーラ本、ヌパラット本によれば、1672 年、当時の国王（ムーラ本ではボトム・レアチア王、ヌパラット本ではパドマラージャ王、在位年代からオランダ語史料のナック・ムントンに当たる）が、チェイチェッター王子に暗殺された。しかし、同王子はすぐに故国王の妃の命令を受けたマレー人の手によって殺害され、別の王子が王となった[Moura 1883b:63-64][坂本・上田 2006:89-90]²⁹。『通志』巻 6、城池にも同様の記述がある。それによると、前王を殺害して王位に就いた逋心なる人物が、王妃の一党であったマレー人勢力に殺害されたという[久光 1975a:35]。

『年代記』『通志』とも、王妃とマレー人勢力が親密な関係にあったことを唱える。この王妃は、以前述べた広南出身の王妃とは考えにくく、他の王妃であろう。いずれにせよ、当時の宮廷内でマレー人が復権していたことがうかがえる。

また、『華夷変態』1679 年（延宝 7 年己未）20 番柬埔寨船の報告によると、6 年ほど前のカンボジアでは、本屋形（国王）を大王と呼び、大王の弟が副王となって一王と呼ばれていたが、これと別に二王なる王族がいた。この人物が軍事力を掌握し、ついには大王を打ち取って自らカンボジア国主となったという。大王をナック・ムントンとすると、一王がその弟で皇太子でもあったラーマーディパティ王子となる。大王を「打ち取って」カンボジア国主となった二王が 1 世王と考えると、『年代記』ばかりでなくオランダ語史料の記述とも一致する。

カンボジア国王が鄭氏系華人を抑圧したことで、彼らと緊密な関係を有した広南との緊張関係は高まった。新王の即位に対し、不満を持つ王族が存在した。これを支援して広南軍が介入する。1675 年 11 月 30 日付シャム商館商務員ヤン・ファン・デル・スピーク及びシャム評議会発総督宛書簡は、広南がカンボジアに遠征軍を派遣したことを伝える。そのため 1 世王は、一時山岳地帯に避難を余儀なくされた[Dagh-register 1675:343]。

さらに、1677 年 2 月 1 日にバタヴィア在住のマレー人インチェ・ラナンがもたらしたカンボジア国王書簡によれば、こうした状況下で 1 世王が死去し、息子（ヤン・ド・プルトゥアン 2 世=2 世王）が王位を継いだ。この苦境に対処するためマレー人船主のリパットから大砲 4 門を借り受けた[Dagh-register 1677:37]。これは VOC の意向に沿ったものだった。これによって、2 世王は広南軍を退却させた。翌 1678 年 3 月 1 日バタヴィア着の書簡で 2 世王は、VOC が提供した大砲が計り知れない貢献をしたと述べ、感謝の意を示した[Dagh-register 1678:82-83]。

この状況は、『年代記』『華夷変態』双方の記述にも反映されている。まず『年代記』によると、

- ① 1674年に国王の叔父が、ベトナム（広南）の援軍を得てカンボジアに侵攻したが、戦闘中に病死した。叔父の後継者が、国王との戦闘を継続したが、敗北しベトナムに撤退した。
- ② 1676年、国王が死去し、王弟が即位した。

以上を伝える[久光 1975:33-34][Mak Phœun 1995:333-357]。

他方、『華夷変態』の 1679 年 20 番柬埔寨船の報告によれば、同船は 1677 年に長崎からカンボジアに渡航した。しかし、内戦に巻き込まれ、国王に反抗する二王子に徴用されて参戦を強いられ、彼の敗北後ようやく脱出して長崎に戻ってきたという。この際、二王子には広南の軍勢が加勢していた。これに対し国王（＝2 世王）側は、シャムの支援を得て二王子を破り、彼はラオス河に逃れた³⁰。2 世王の名は、オランダ語史料では 1679 年を最後に見られなくなるが、『華夷変態』は 1682 年までカンボジアの情勢は安定していたとしているので、このころまで生存していたと思われる。

マレー人は、こうして王権を支える存在として復活した。遷界令が強化されるなかで、マレー人を介して VOC と関係を維持することは、カンボジア王にとって重要であった。

小括

以上の考察から、以下のことが明らかになった。

1. 「1658 年反乱」の成功で王位に就いたナック・ムントンは、広南及び華人との関係を重視し、先代のイスラーム王に対する反感もあって、マレー人を抑圧する政策を取った。その結果、同王の治世においては、マレー人の活動は沈滞化を余儀なくされた。
2. ナック・ムントンの華人を重要視する政策は、華人及びナック・ムントんと VOC の対立関係を先鋭化させた。1667 年、台湾鄭氏に属する華人勢力がオランダ商館を襲撃し、商館長らを虐殺し、国王がそれを黙認すると、VOC はオランダ商館閉鎖を決断した。
3. 清朝の遷界令が効きだした時期、ナック・ムントンは VOC との関係再構築を希望しバタヴィアに使節を派遣した。この交渉で使節として重要な役割を果たしたのはマレー人だった。このため、ナック・ムントンは台湾鄭氏系の華人を退け、マレー人を復権させざるを得なかった。以降の国王も、VOC との関係再構築を求めて、しばしば書簡の交換を行った。

カンボジアの交易政策はマレー人をいかに扱うかで大きく変わったことがわかる。マレー人の重用は、VOC を中心とする海域世界との関係を重視することを意味した。ただし、カンボジアにおける広南やシャムの影響力も強まりつつあった。やがて清朝の遷界令が廃止され、東アジアとの交易が復活すると、カンボジアの状況は一層流動的になるのである。

¹ このような、国王が王都に居住していないという事態は、カンボジアに限った現象ではない。隣国のシャムでもナライ王が王都のアユタヤに居住せず、さらに内陸のロブリーに宮殿を築いて居住していた事例がある。ショワジによれば、王は毎年そこで 7~8 ヶ月を過ごし、アユタヤよりも気楽に暮らしたという[ショワジ 1991:216]。

² ジョホールのスルタン、アブドゥル・ジャリルは、1648 年 4 月に VOC にこれを求めて許可され、1649 年にそれを実行した。1650 年にも使節を派遣し、同様の措置を求めたのに対し、VOC はこれを拒否したが、翌 1651 年に結局許可した[L.Y.Andaya 1975:70]。

³ 他の 4 人は、それぞれ Nac Preaute、Nac Pra Ciricitit、Nac Pra Odel、Nac Pra Praangh という名だった[Kettingh 1658:371]。

⁴ この「イギリス人シャーバンダル」については、当時カンボジアで活動していたイギリス人は極めて少数であったことから、実際にイギリス人がこの役目を務めていたとは考えにくい。当時の東南アジアにおけるイギリス人の拠点がジャワのバンテンにあったこと、ナック・チャン治下のカンボジアとバンテンはかなり密接な関係にあったと考えられること[遠藤 2014:14]から、カンボジア在住イギリス人の管理を担当するシャーバンダルにマレー人がついていた可能性が極めて高い。彼がナック・ムントンらに殺害された理由も、そこから説明できると筆者は考える。

⁵ ケッティングの報告では、「コーチシナの王妃と国王の母ナシダイッ・プラティアウ」と記されている。この「国王の母」はケッティング報告の別の箇所[Kettingh 1665b:415]でもコーチシナ（広南）の王妃と対になって登場していることから、この人物もコーチシナ人である可能性がある。

⁶ この部分は、『年代記』ムーラ本及びジュールヴェーズによれば、彼らの祖父（チェイチェッター王）に嫁いだコーチシナ人王妃を通じて支援を求めたという[Moura 1883b:61-62] [Gervaise 1998:169-170]。これに対して『年代記』ヌパラット本では、イスラームに改宗した王の従兄弟（チェイチェッター王の甥）の一人である in 王子の母親がベトナム人で、この母親が息子（in）をベトナムに行かせ、ベトナム軍を連れてこさせたとある[坂本・上田 2006:89]。王妃の世代に不一致が見られるが、ベトナム人王妃の関与を認める点は同じである。

⁷ 原文ママ。正しくは十五年である。

⁸ 高綿はクメールの音写と考えられる。また、匿蟬は注に凡王子孫皆称とあり、王族に付ける敬称で、禎が国王の個人名となる。すなわち匿蟬禎は禎王を意味し、禎はその発音（tsien）からチャンであると考えられる[久光 1975a:31-32]。オランダ語史料やジュールヴェーズの記録にあらわれるナック・チャンを指す。

⁹ 現在のベトナムにビエンホア省は存在しないが、おおむねホーチミン市から少し北上した地域一帯に該当する。なお、フーイエンは、1611 年に広南に占領されていた[桃木 1999:67]。

¹⁰ 1643 年のオランダ船リロ号の航海では、プーロ・コンドルからトロン湾（現在のダナン付近）まで 10 日の行程だった[加藤 1993:4]。

¹¹ 広南との関係で想定しておきたいのが、ナック・ムントンとポルトガル人との関係である。ポルトガル人と広南との関係は、彼らがマカオ、中国との交易で重要な役割を担い、また広南宮廷に技術者、医師、軍事顧問などとして雇用された者が少なからずいたため、非常に親密であった[Li Tana 1998:72-73]。また、ナック・ムントンの祖父であり、ナック・チャンに殺害された「老王」は、第 2 章

で指摘したとおり、ポルトガル人と親密な関係にあった。このような両国での活動を背景に、カンボジアと広南(さらにはマカオ)との間にポルトガル人ネットワークが形成され、相互に連絡を取りながら活動していた可能性が考えられる。

¹² この報告は、カンボジアから直接もたらされたものではなく、長崎経由でもたらされたものだった。そのことは、当時のバタヴィアとカンボジアとの間でほとんど交流が行われていなかったことを示唆している。

¹³ また、『年代記』では、ナック・チャンを捕らえたベトナム(広南)軍はいったん本国へ引き上げたが、後に再び戻ってきて、カンボジアの二人の王子と戦い、敗れて撤退した、としている[Moura 1883:62][坂本・上田 2006:89]。これは『年代記』がナック・ムントンの行為を正当化する目的で記したものと考えるべきであろう。

¹⁴ 『バタヴィア城日誌』によれば、「以前当地(=バタヴィア)のマレー人カピタンであり、現在カンボジアに居住している」人物であるという。前章で言及した『一般政務報告』に登場する、1646年に総督府がカンボジア国王宛の書簡を託した同名の人物に相当する可能性がある。

¹⁵ オクニャ・シュリ・マハラージャの音写であることは明らかである。マレー人の指導的な立場にある者に付与される称号だったのかもしれない。

¹⁶ 具体的にどこを指すかは不明であるが、以前の商業中心地のひとつであろう。

¹⁷ この条約の重要な条項として、実質的に唐船による交易を禁じる規定が盛り込まれていた。しかし、アユタヤ発の唐船(「暹羅屋形仕出しの船」=シャム国王が出資した王室船)が多数長崎に入港しており、実効性は不十分だった[石井 2001:188]。

¹⁸ ここに掲げたものはまだ草案の段階であり、正式に批准されたものではないが、最終的に批准された条約はこれとほぼ同じ内容である。この草案には、交渉時になされた国王のコメントと使節団のバタヴィア総督府に対する意見が残されており、交渉の内容を検討するには便利であると考え、こちらを掲載した。

¹⁹ 別の史料では、Cinco Chages、Poloe Condor、Poeloe Ubyとも記される[Meyer 1665a:399]。それぞれ、現在のブンタオ(サンジャック岬)、コンドル島、ウビ島に当たる。

²⁰ 難破した船の荷物を見つけた現地の人間が、それを持ち去ってしまうことを指す。第二条に見える、前国王がフライト船オラーニエンボームから日本銀10箱とカンガン布830反を持ち出した事例などは、その典型といえよう。

²¹ 原語は *residenten* (居住者の意)。この場合は会社職員を指すが、商館で使役される奴隷もこの言葉に含まれる。

²² ケッティングを「商館長=*opperhoofd*」ではなく「商務員=*k(c)oopman*」と表現する事例が多い[Generale Missive (van Gouverneur-Generaal aan Bewindhebbers) in dato 30 Januari 1665:398][*Dagh-register* 1666-1667:227,313]。1665年2月12日付総督宛書簡にて、ケッティングは自らの待遇改善を求めている[Kettingh 1665a:400-401]。彼に対する会社の待遇は商館長へのものではなかったのかもしれない。ただし、当時のカンボジアにおいてケッティングが商館長として振る舞い、周囲もそれを認めていたことは間違いなく、本論文ではカンボジア商館長として記述することにする。

²³ メイヤーはVOC総督府に、カンボジア語で書かれた国王の書簡2通を送っている。そのうち、一方は表敬の書簡で国王の印がなく、ポルトガル語の訳文が付

されており、もう一方は条約を批准する形式をとっており、初期による印はあったが訳文が付されていなかった [Meyer 1665b:402]。

²⁴ メコン川を遡上するルートとしては、「日本河」(メコン川本流)と「カンボジア河」(バサック川)の両ルートがあり、状況に応じてどちらかを航路として選択することが可能だった[北川 2015:51]。

²⁵ 他の事例と比較すると、④と⑥は積み荷の総額が突出して多く、VOC にとっての日本貿易の重要性が伺えよう。

²⁶ マレー語では Yang di Pertuan。オランダ語では Jan de Pertewan、Jangh de Pertuan、Jan Depertuan、Jang Depertuwan、Jang de Pertuan など、様々な綴りがある。なお、オランダ語史料、『年代記』『華夷変態』のいずれを見ても、当時のカンボジア国王がイスラームに改宗していた事実は確認できない。書簡がマレー語で書かれていたために、国王の称号もマレー風のものになったものと考えられる。

²⁷ 『バタヴィア城日誌』1665 年版に収録されたカンボジア国王発東インド総督宛書簡では、国王は「ナクア・パラボマラージャ」と称した [Dagh-register 1665:399]。この称号はカンボジア国王がしばしば名乗った「パラマラージャ」に当たる。

²⁸ 1670 年代のカンボジア・VOC 間の書簡は全部で 11 通に達し、そのうちマレー語で書かれたことが明示されている書簡はほぼ半分の 6 通である。その他の 5 通も国王の称号がヤン・ド・プルトゥアンであることから、マレー語で書かれた可能性が高いと考えられる [Dagh-register 1670-71:2,3-5,275-276;1672:17-18;1673:40;1674:156;1676:162-163;1677:37;1678:82-83,438;1679:236-237]。

²⁹ VJ 本ではこの事件をオランダ語史料よりも 1 年早い 1671 年のこととしている(国王名はパラマラージャ) [Mak Phœun 1981:207-208]。1 年のズレが起きた理由は不明だが、用いられている暦の計算から生まれたものかもしれない。

³⁰ 17 世紀のオランダ人がプノンペンより上流のメコン川を「ラオス河」と呼ぶことから、プノンペンより上流のメコン川沿いを指す[北川 2000:66]。

第5章 18世紀～19世紀のカンボジアにおけるマレー人の活動 ― ネットワークの再編とチャーム・チュヴィエの登場 ―

はじめに

本章では、17世紀末～19世紀のカンボジアにおけるマレー人の活動について考察する。遷界令が廃止され、展界令が發布されると、東アジアとの交易は再び活性化する。米や森林生産物を輸出できるカンボジアは、再び重要な地となった。しかし、1680年代以降のカンボジアでは、王族内の対立と広南やシャムの干渉が連動し、国王が短期間で交代し、トンレサープ流域を拠点とするウドン（柬埔寨屋形、山王）とメコン川流域を拠点とするスレイ・サントー（二王、水王）に、王権が分裂する事態となる。加えて、広南に帰順した華人集団がメコンデルタに入植し、通過する船舶に通行税を課した。本章では、王都ロンヴェーク・ウドンからメコン川河口に至る交易ルートが衰退し、代わってシャム湾沿岸の港市がカンボジアの外港の役割を担うようになったことを論じる。

18世紀のシャム湾沿岸では、マレー人の活動が活発になり、その状況は19世紀まで続く。それにより、シャム湾岸と内陸部との交易ネットワークが再編されることを明らかにする。同時に、この時期にマレー人がメコン川東岸に移住してきたチャンパの人々（チャム人）と次第に結びつき、現在チャーム・チュヴィエと呼ばれる人々が、集団として登場してきたことを指摘したい。

1. 1670年代以降 ― 内乱と王都周辺の交易活動の衰退 ―

シャムや VOC の支援により、ひとまずカンボジア王権は安定した。しかし、広南のカンボジアへの介入はさらに続いた。今度は傘下にあった華人集団が、カンボジアに侵攻した。1679年、明の遺臣と称する楊彦迪、黄進、陳上川らが率いる華人部隊3,000人余りが広南に仕官を求めた。これに対し広南は、彼らをメコンデルタに入植させた。『華夷変態』1683年5番暹羅船によれば、1682年11月に、広南にメコンデルタ入植を命じられた「東寧秦舍（台湾鄭氏最後の当主鄭克塽）の手下、禮武鎮之官楊二」が「兵船70隻以上、人数3,000程」を率いてカンボジアに乗り込んだ。このため、柬埔寨屋形（カンボジア国王）は山中に逃亡した。また、オランダ語史料の『一般政務報告』（1683年12月31日付）には、「華人逃亡者が50隻の船でカンボジアに赴き、少なからぬ者が同地に落ち着いていた。国王は恐れて内陸の首都に引き込み、そこからシャム国王に援助を求めた」とある[*Generale Missiven IV* 1683:615]。船の隻数などに相違はあるが、同じ出来事を指していると考えられる。

カンボジア国王は、再びシャムに支援を求めた。1684 年 5 月 31 日付『一般政務報告』によると、「カンボジア国王とコーチシナの側についている弟 Nachenon¹との間で対立があり、互いにできる限り相手を痛めつけようとしている。それを防ぎ、互いに控えるようにさせるために、シャム国王が 10,000 人の軍を送ろうとしていると言われている」[*Generale Missiven* IV 1684:688]とある。また 1685 年 3 月 18 日付同報告書によれば、「カンボジア国王と弟とは互いの争いに高揚しており、シャム国王の仲介を求め、(シャム)国王もそれに乗り気である」[*Generale Missiven* IV 1685:787]と記され、当時カンボジアが王国を二分する内乱状態にあったこと、国王側がシャムの支援を要請し、シャム王も積極的に介入する意思を示していることがわかる。

当時のシャムはナライ王のもと、1681 年から 1685 年にかけてサファヴィー朝ペルシアと、1684 年から 1687 年にはフランスと使節の交換を行うなど、対外的に積極的な姿勢を見せていた。カンボジアに対する介入も、そうした政策の一環と考えられよう。ただし、当時アユタヤを訪れていたフランス人宣教師ショワジは、カンボジアとの戦争の状況は思わしくなく、シャム軍は大敗したと述べており、介入は失敗に終わった[ショワジ 1991:232]。その後もカンボジアの内乱はおさまらず、1686 年 3 月の段階でも内戦は継続していた[*Generale Missiven* V 1686:12]。

状況が動いたのは、1687 年に入ってからだった。1687 年 12 月 23 日付『一般政務報告』によれば、「カンボジアの使節は結局 (シャム) 国王から、彼の 2 隻の戦艦をイギリス人船長の指揮のもとカンボジア河へ送り、華人をそこから追い出し、平和を取り戻すことの約束を得た」[*Generale Missiven* V 1687:125]。その結果、大砲を積んだイギリス船 2 隻に現地人が乗り組み、反乱者を追い出すためにカンボジアに赴いた[*Generale Missiven* V 1687:156]²。

『華夷変態』の 1687 年の 107 番暹羅船も、①楊氏が柬埔寨屋形を追い払い、「柬埔寨の海辺」を我儘にしていたが、その副将黄氏が楊氏を討ち、本屋形 (国王) の甥である二王に加勢したこと³、②山中に逃亡していた本屋形が、シャムの援軍を得て 1687 年に黄氏と二王を打ち破り、黄氏は二王を守護して広南へ逃げ、本屋形がカンボジアに戻ったことを伝える⁴。メコンデルタの支配権をめぐる華人勢力に内紛が起き、それに乗じて、カンボジア国王がシャムの支援を得て、華人及びそれと結んだ二王に勝利したのである。

こうして、二王は敗北した。しかし、彼は広南の支援のもと、メコン川流域のスレイ・サントーに拠点を構えた。以降、スレイ・サントーがロンヴェーク・ウドン王権から分立するに至った[北川 2000:65-67]。

これにより、1683 年から 1688 年まで長崎へのカンボジア船は途絶えた。1689 年に 2 隻、1690 年に 1 隻の入港があったものの、いずれも内乱の影響で交易は小規模にしか行われなかった[北川 2015:67-68]。さらに、黄進に代わって華人集団のリーダーとなった陳上

川が、メコン川河口を勢力下に置き、通過する船舶に対して通行税を課した。外来船やロンヴェーク・ウドン王権にとって、メコン川通行の大きな障害となった。

これに対処するため、カンボジア国王は VOC に働きかけた。1689 年には、カンボジアに商館を設置するよう要請するため、華人 Octno Siha Symbat に書簡と贈り物を託し、バタヴィアに派遣した[*Generale Missiven V* 1689:319]⁵。1690 年 3 月にも使節として華人シャーバンダルを派遣し、再び商館設置を要請するとともに、バタヴィアで交易を行う許可を求めた[*Generale Missiven V* 1690:375]。しかし VOC は、もたらされた書簡が国王自身によって書かれたものではなかったことを理由に、彼を正規の使者として扱わず、その要請も認めなかった[*Generale Missiven V* 1690:406]。ここで派遣された使節は、いずれも華人であり、従来 VOC との関係構築に重要な役割を果たしたマレー人が後退していることがわかる。

1690 年代に入ると、状況が一時的に変化した。『華夷変態』1692 年 58 番柬埔寨船の報告では、1691 年秋に二王が病死し、王子が後を継いだものの幼少であり、統治することができなかったため、その臣下はことごとく国王（ロンヴェーク・ウドン王）に降伏した。この機に乗じて国王が王子を討伐したため、王子は広南に逃れて内乱は終息したという。『年代記』も、スレイ・サントーに拠ってロンヴェーク・ウドンのアン・ソー王に対抗していたアン・ノン＝二王が死去し、スレイ・サントー王権は一時的に消滅したとしている[北川 2000:69]。

1692 年に広南はチャンパを併合した。しかし、現地民の抵抗に悩まされ、完全に制圧するまでにかなりの時間を必要とした⁶。鎮圧にはメコンデルタの華人集団も動員されたらしく、広南の同デルタへの介入が一時的に弱まった。しばらくこの状況は続き、柬埔寨屋形仕出しの船（カンボジア国王が出資した王室船）を含めて、盛んに日本に商船が来航した（1694 年 61 番暹羅船、62 番柬埔寨船、1695 年 26 番、27 番、28 番柬埔寨船、1696 年 51 番、69 番、81 番柬埔寨船、1697 年 77 番、81 番、83 番、87 番柬埔寨船）。

しかし数年後、広南が再び介入を強める。『華夷変態』38 番、40 番、60 番柬埔寨船の報告によれば、1698 年 2 月、広南の使者が船 4 隻、300 人以上を引き連れてカンボジアを訪れて朝貢を要求した。拒否すれば兵船を差し向けると脅迫して、5 月中旬に帰国したという。同年に広南は、サイゴン（現在のホーチミン市）に嘉定府^{ザディン}を設置し、再びメコンデルタ地域への影響力を強めた。

これに対しカンボジア国王は、朝貢要求を拒否した。そこで、1699 年広南は、兵船数百艘をカンボジアに派遣することを決めた（『華夷変態』60 番、61 番、62 番広南船）。この際、「柬埔寨湊口」（現在のカントー付近[桜井 1999a:207]）⁷にいた上述の陳上川が、兵船の指揮者になったという。同年 34 番柬埔寨船によれば、彼はカンボジアに来航した中国商船 7 隻のうち 4 隻をカンボジアの湊外で襲撃した。このためカンボジアと通商する船は、商船 1 隻から荷物いくらかを彼に供出することを求められたという（53 番柬埔寨船）。

『前編』巻7も同様な抗争を伝える。1699年7月に真臘王匿秋（アン・ソー王）が広南の意向を無視して、碧堆、求南、南栄⁸の三塁を築いた。これに対し広南は、阮有鏡將軍に命じてこれを討伐させ、陳上川も出兵してカンボジアと戦った。広南は翌1700年3月に碧堆、南栄に拠ったカンボジア軍と戦ってこれを破った。真臘王匿秋は4月に降伏し、朝貢することを認めた。

しかし、その後も山王と水王の抗争は続いた。『前編』巻7によれば、1705年以来真臘国王匿深^{とくしん}（山王）と匿淹^{とくおん}（水王）が対立し、前者がシャムに、後者が広南に援軍を求めた。広南の兵が匿深を攻撃し、岑溪（現在のミトー付近⁹）でシャム軍と遭遇してこれを大破した。匿深とその弟匿新はシャムに逃れ、匿淹は羅壁城（ロンヴェーク）に帰還したという。また、同巻8によれば、1711年に匿深がシャムから帰国し、シャム派の重臣と共謀して匿淹を殺そうとした。これに対し、匿淹はラオス人を使者として広南に援軍を求めた。その結果、1715年に匿深がロンヴェークで広南軍に包囲され、城に火を放って逃亡したという。『年代記』にも同様の記述がある¹⁰。スレイ・サントー王権の消滅以後も、カンボジアはシャムに支援を求める勢力（山王＝ロンヴェーク・ウドン王）と、広南及びメコンデルタの華人勢力と結ぶ勢力（水王）に分かれて抗争していた。

山王は、シャムに再び支援を求めた。1716年、義兄弟によって国を追われたカンボジア国王は、シャムの宮廷に丁重に迎えられたという[*Generael Missiven* VII 1716:219]。シャム王は、カンボジア国王（山王）を積極的に援助し、1718年には海陸両軍を派遣し、その帰国を支援した。しかしながら、広南が現国王（水王）を支援したため、戦況はシャムの不利となり、目的を達することはできなかった[*Generale Missiven* VII 1718:326;359]¹¹。

1717年から1723年までの『華夷変態』も、同様の状況を伝える。1717年（広南船、柬埔寨船、占城船、2番暹羅船）の情報によると、不和となったカンボジアの山王と水王は、戦闘の結果、山王側が敗れ、山王は1715年正月にシャムに逃れた。シャムは山王を援助し、1716年3月に数千の兵をもって国境に出兵したが、メコン川の水が氾濫していたので引き返した。シャム王は1717年4月にも出兵したが、やはり洪水のため引き返した。山王の不利を伝える。

翌1718年にも戦闘状態は続き、23番暹羅船によると、この船が広南の海上を通過した際、敵国の船とみなされ攻撃を受けたという。1719年26番暹羅船によると、事態を收拾するために、水王がシャム王と山王のもとに使者を派遣し、和睦を申し入れた。1722年の2番暹羅船の報告では、和睦が成立し、1720年に山王をカンボジアに送ったとある。ただし、その後水王側が攻勢を強め、山王は再びシャムに逃れ1722年に同地で病死した。1723年12番柬埔寨船によると、水王が一人でカンボジアを治めていた。その後、1730年代前半までは水王の治下でカンボジアはある程度安定しており、『唐船進港回棹録』によれば、1726年から1732年までの間、カンボジア船が継続的に来航している[大庭 1974:65-96]。

しかし、1730年代半ばから山王をシャムが支援し、カンボジアが再び内乱状態になったことが、アンコール・ワット碑文（1747年）及びプレア・ソトアト（ハーティエン鄭氏第二代当主鄭天賜）の書簡（1740及び42年）から確認できる[北川 2014:7-14]。この頃まで、山王（ロンヴェーク・ウドン王）はシャムに支援を要請し、シャムもこれに応えている。当時のシャムは、ターイ・サ（在位 1709～1733）、ボロマコート（在位 1733～1758）両王のもとで最盛期を迎えていた[石井 2001:197-200]。山王にとって、シャムは頼むに足る実力を有していた。一方、シャムはこの時期、中国（清朝）に大量の米を輸出していた[石井 2001:197,200]。より多くの米を入手したいシャムにとって、その大産地であるカンボジアを掌握することは必要だった。

しかし、18世紀半ば以降ロンヴェーク・ウドン王は、後述するハーティエン及びその後ろ盾である広南への傾斜を強めるようになる。1757年に宮廷で内紛が起きると、王はハーティエンに逃れ、その支援を受けてロンヴェークに戻っている[北川 2001a:148]。18世紀後半以降、王都ロンヴェーク・ウドン周辺は次第にベトナムの影響下に入っていく。

このような変化の背景として、①シャムの衰退と、②広南のメコンデルタ地域への影響力のいっそうの拡大、という要因が挙げられる。①については、1758年のボロマコート王の死後、シャムではエーカタット王（在位 1758～1767）が即位し、反対派を弾圧するなど、宮廷内で内紛が頻発した。さらに、1752年に西隣のビルマでコンバウン朝（1752～1885）が成立し、1760年代までに対立勢力を破って全土を掌握した。その後、コンバウン朝はシャムを盛んに攻撃するようになった[石井 2001:200-202]¹²。このため、シャムはカンボジアに目を向ける余裕を失った。②については、グエンフックコアット 広南阮氏第八代当主阮 福 潤（在位 1738～1765）のもとで行われた様々な改革の一環として、メコンデルタの本格的な軍事制圧が実施された[嶋尾 2001:292]。それによって、カンボジアに対する広南の影響力がいっそう拡大した。18世紀後半の交易不振によって、広南は農業部門への課税を強化し、南方・西方への依存を強めていた[八尾 2001:255]。後背地としてのカンボジアを掌握する必要性が、これまで以上に増大したのである。

以上のように、17世紀末～18世紀半ばのカンボジアでは、対立する二つの王権に双方を支持する広南とシャムが介入して、王都周辺がしばしば戦場となった。この結果、カンボジア王都周辺は大きな被害を受けた。『華夷変態』1717年2番暹羅船によれば、当時のカンボジアはどの場所も「衰弊の様子」を呈したという。さらに、広南と結びついた華人勢力がメコン川ルートを掌握したことによって、カンボジアの交易活動は打撃を受けた。

王都周辺でのマレー人の活動も後退した。『年代記』は、その後も宮廷で兵士として活動するマレー人の存在を語る[坂本・上田 2006:99-100]。また、バタヴィアをはじめ、海域世界との交渉や交易に携わったマレー人も存在したであろう。しかしメコン川流域での彼らの交易活動は、縮小を余儀なくされた。

一方、清朝による遷界令解除（1681 年）と展界令の発布（1684 年）により、南シナ海沿岸地域と中国との交易は再び活性化した[上田 2005:303]¹³。来航する中国商人が増え、東南アジアの産品を集荷でき、かつ西方世界の商品を手に入る港市が求められるようになった。こうした状況下で、西方世界とシナ海域の中継点かつカンボジアの外港となりうるシャム湾東部沿岸の港市が台頭してくる。荒廃した王都を去って、こうした場所に新天地を求める人々も少なくなかったと思われる。

2. ハーティエンの勃興

シャム湾沿岸東部は、南西モンスーンの時期に内陸部へ向かう水路を利用し、バサック川（カンボジア河）を経由してカンボジア内陸部と交易できた。この地に、17 世紀終わりにハーティエンという港市が勃興した。ハーティエン台頭に寄与したのは、広東雷州出身の華人鄭玖である。彼は、1671 年にカンボジアに来航した。当初プノンペン周辺で商業活動に従事し、次第に国王の信任を得、王から商業全般の諸事を委ねられたという。しかし前述したように、1680 年代に入るとカンボジアは内乱で疲弊し始め、またメコンデルタでの華人の勢力伸長によって、メコン川が交易路として使用しにくくなった。このような状況下で、鄭玖は他の地に活路を求めた。

そこで彼はハーティエンに着目し、商業上の重要性を王に説き、1687 年から 1695 年の間に国王より同地の地方官に任ぜられた[藤原 1986:224-228] [北川 2001b:191-192]。『鄭玖伝』によれば、彼は同地の港市柴末府（バンテアイ・メアス）に「漢人（ベトナム人）・唐人（華人）・真臘（カンボジア人）・閩婆人（マレー人）」の商人が集まっているのを見て、同地の芳城（ハーティエン）に移住したという[藤原 1986:226-227]。『通志』『前編』にも同様の記述がある。当時のバンテアイ・メアス＝ハーティエンは、すでに諸国の商人が集まる港市となっていた。ただし、この地域を治める地方官の地位は、当時のカンボジアにおいては最低ランクに相当し、カンボジア王権のシャム湾沿岸に対する関心は必ずしも高いものではなかった[北川 2001b:192]¹⁴。当時のハーティエンは、水や食料の供給地に過ぎなかったのだろう。

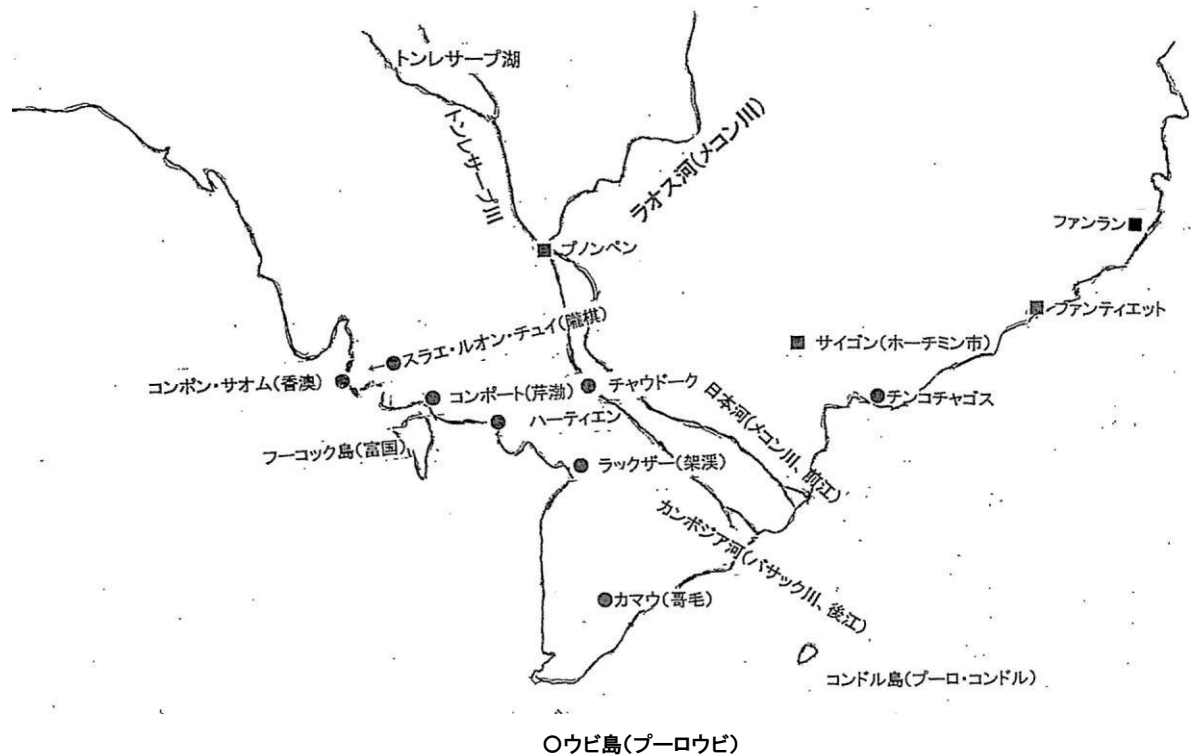
鄭玖はしかし、この地の将来性に着目した。彼はハーティエンで賭博場を開設し、賭博税の徴収にかかった。また銀山の開発をもくろみ、そのために流民の招集につとめ、富国（フリーコック島）・芹渤（コンポート）・架溪（ラックザー）・隴棋（スラエ・ルオン・チュイ）・香澳（コンボン・サオム＝現在のシハヌークヴィル）、哥毛（カマウ）及びハーティエンの七社村（次ページの地図 7 参照）の建設に着手した[藤原 1986:228-233]。

一介の補給港に過ぎなかったハーティエンは、その後華人来航者の増加と銀山開発の進展により、東アジアとの中継港として、またカンボジアの外港として発展する。ハーティエンでの鉱山開発は順調に進展した。鉱山労働者は華人が大部分を占めた。銀山開発によって華人人口が大幅に増加し、ハーティエンの人口は 2,800～14,000 名程になった¹⁵。人口増大は

賭博税の税収増大にもつながった。また、彼らが使用する日用品やアヘンなどの嗜好品の需要も増え、ハーティエンは交易港としても発展していく。

アレクサンダー・ハミルトンの 1720 年の報告によれば、当時のカンボジアにはチュパングソアップ（コンボン・サオム）とポンテアマス（バンテアイ・メアス＝ハーティエン）の二港があった。バンテアイ・メアスは、上述のように南西モンスーンの時期には水路を通じてバサック川と連絡することができ、その上流には王都（ロンヴェーク・ウドン）があるが、同市までの航行は長く困難なので、外国商人はバンテアイ・メアスに留まったという¹⁶ [Hamilton 1930:105]。前述したように、当時のロンヴェーク・ウドン王都周辺はしばしば戦場となり荒廃していた。困難を犯してまで王都を訪問するメリットは外国人商人にはなく、水陸両路で内陸とつながり、米や森林生産物を彼らに供給する役割をハーティエンが果たすようになった。

さらに、鄭玖は広南にも接近する。前述したように、広南は 1698 年に嘉定府を設置し、



地図 7 ハーティエン勃興時（17 世紀末）インドシナ半島南部（筆者作成）

メコンデルタに入植した華人と連携しつつ、デルタ地帯への影響力を強めつつあった。こうした状況に対応して、鄭玖は 1708 年ごろ広南にも帰附し、河仙鎮総兵に任命された[藤原 1986:216-217]。これによってハーティエンは広南の後ろ盾も得、それにより対外交易の重要な商品となる森林生産物を、メコン川経由で集荷することが可能になった。

ただし、鄭玖の広南への帰附は、ハーティエンが広南の一方的支配下に入ったことを意味しなかった。ハミルトンがハーティエンを訪れたとき、彼を迎えたのは、ポルトガル語を少し話すカンボジアの役人であり、その到着はカンボジア王に報告された。[Hamilton 1930:107]。ハーティエンは、カンボジア王との関係も維持していた。なおハミルトンによれば、上述したコンボン・サオムでの取引にはカンボジア王の許可が必要であったが、広南とも関係を持つバンテアイ・メアス＝ハーティエンではそれが不要であったことを記す。

鄭玖はハーティエンを拠点として、シャム湾東部沿岸地域に勢力を拡大する。次代の鄭天賜の時には、中国に小港口国と称して朝貢し、ヨーロッパ商人にも「カンカオ国」として知られるまでに発展した[桜井 1999a:207]。このハーティエンの発展にマレー人も関与した。次に述べるように、この地に綿布や胡椒さらにアヘンを持ち込み、カンボジアの米と交換するマラッカ海峡域の商人が来航した。19 世紀に至っても、後述するようにハーティエン、コンポート周辺にはマレー人が数多く居住し、マレー語由来の地名が散在した[ボニーマン & ヘルムズ 2007:163-165]¹⁷。

3. シャム湾沿岸におけるマレー人の活動

ハーティエンの発展に伴って、シャム湾沿岸におけるマレー人の活動は活性化した。

前述したハミルトンの報告によれば、当時カンボジアはブルネイ、マラッカ、ジョホールなどの海域のマレー人諸王国と交易を行っていた[Hamilton 1930:80-84]。当時のマレー語史料である *Hikayat Siak* (『シアク王統記』) には、カンボジアの港として「パンタイ・エマス」の名が見える。これは「黄金海岸」を意味し、内陸部のピニャールではなく、ハーティエンを指すものと考えられる。この地には 500 人ほどのミナンカバウ人が居住し、その多くが裕福だったという[Tengku Said & Muhammad Yusoff Hasim(ed.) 1992:156]。

また、ジョホール・リアウ王国のブギス人副王の王統記である *Tuhfat-al Nafis* (『貴重な贈り物』) に記された副王ダエン・カンボジャ(在位 1745～1777)の出生譚によれば、彼の両親がカンボジアを訪問し、同地に滞在していたミナンカバウ人たちと闘鶏を行い、「魔法の蹴爪」の加護により勝利した。その後リアウ・リングに戻る途中で妻が妊娠していることを知った父親は、カンボジアでの勝利を記念して、生まれた息子をカンボジャと名付けたという[Raja Ali Haji 1982:45-46]。ダエン・カンボジャの出生の時期は、彼の副王在位年代から逆算すると、カンボジア王都周辺が戦乱のさなかにあった時期と推定される。彼の両親が王都ロンヴェーク・ウドンを訪れたとは考えにくい。彼らが訪問したのは、パンタイ・エマス＝ハーティエンであろう。この地に、マレー人やブギス人が多数来航し、活動していた

ことを示している。ハーティエンの発展によって、海域マレー世界とカンボジアとの交易は活性化した。マレー人はスズ、コショウ、ガンビール¹⁸、インド綿布などをカンボジアに持ち込み、米や森林生産物と交換した[B.W.Andaya&L.Y.Andaya 1982:104]。18世紀のカンボジアと交易したパレンバン、ブルネイやジョホール、マラッカなどもカンボジアの米を求めた。例えば、1687年4月にウビ島を訪問したダンピアは、同地で米を積んだ2隻のカンボジア船を目撃した。また、シャム湾航海に失敗して5月にウビ島に戻った際、「カンボジア川を出てこれからマラッカ海峡域へ向かう途中」の米と漆を積んだ小型の帆船が、停泊していたという [Dampier 1703:399,401]。彼によれば、当時のカンボジアは、米、麒麟血（薬種、ワニスの原料となる樹脂）、ラック、黒っぽく分厚い大きな壺、カンボジアと呼ばれる黄色く透き通った樹脂（ガンボージュ¹⁹を指すと思われる）を産した[Dampier 1705:105]。

またパレンバンの場合、1722年～1730年にかけて、シャムとカンボジアから毎年3隻から5隻ほどの船が来航し、米や塩、カンボジア製衣類などをもたらした。また、1744年にパレンバンが米不足に悩まされていた時、米を積んだシャム船が来航したのを契機に、当地のスルタンはシャムやカンボジアとの交易に関心を抱いた。1746年に彼は、シアンタン経由で3隻の船をカンボジアに派遣した[鈴木 2015:13-14]。VOCがこの動きを警戒し、同年ムシ川河口にオランダ船を派遣してパレンバンに来航する交易船の活動を妨害したとき、スルタンは、ジャワの米が非常に高価なため、シャムとカンボジアからの来航船がなければパレンバンの民は餓死してしまうとVOCに抗議した[Vos 1993:37]。当時のパレンバンは、シアンタンを経由してシャム及びカンボジアとの交易網で結ばれていた[鈴木 2015:14]²⁰。

なお、オランダ語史料ではカンボジアとなっているが、これがハーティエンを指す可能性は高い。ハーティエンは、米や塩をパレンバンに供給する重要な港市であった[B.W.Andaya 1993:123]。

さらにアヘン取引も活性化した。『大南寔録』正編第二紀巻 79 によれば、^{ミンマン}明命13年（1833年）4月、ハーティエン鄭氏一族である鄭侯煒が、米や砂糖をジャワに密輸し、代価としてアヘンを購入して帰国したところ発覚し、処罰されたという。これは鄭氏の勢力が衰え、阮朝に従属を余儀なくされた19世紀の事例である。この時期、ハーティエンのアヘンのかなりの部分が、米と交換する形でジャワ島から輸入されていた[藤原 1986:295-296]。前述したように、カンボジア米は17世紀以降ジャワ島にも輸出されていたから、こうした構造は18世紀においてもそれほど変わらなかったと思われる。まして、ハーティエンの自立性がより高かったこの時期には、アヘン取引が規制されることはなかった。

当時のジャワ島でアヘン貿易に大きな役割を果たしていたのは VOC であった。しかし18世紀前半に、マラッカ海峡域で流通したアヘンは、バタヴィアからではなくなり、VOCが関与しない、主にイギリスのカントリートレーダーが運んできたものであった[大久保 2017:121-122] [Raja Ali Haji 1982: 90]。前述したように、ハーティエンは米や塩をパレン

バンに供給していたから、マラッカ海峡域のアヘン流通の仲介をも行っていたと考えられ、それにマレー人が関与していた可能性は極めて高い。

その後、18 世紀後半に広南を打倒し、ベトナムを席卷したタイソン反乱（1771～1802）によって、ハーティエン鄭氏の勢力は壊滅した。しかし、19 世紀に入っても、マレー人はシャム湾沿岸で活発に活動していた。19 世紀初頭のベトナムからシャムへの道筋を詳細に記した『暹羅国路程集録』（1811）によれば、河僊（ハーティエン）には、華人とマレー人の店が立ち並んでいたという[宋・楊 1966:39]。東西交易は、華人商人とマレー人商人との出会いの場としてシャム湾を必要とした。

この後ハーティエンは衰退したが、それに代わる港市として、コンポートが台頭してくる。1821 年にベトナムを訪問したクロフォードによれば、シャム湾沿岸の港である Pongsom（コンボン・サオム）と Kampot（コンポート）に、4,000 ～5,000 人ほどのマレー人が居住し、ジョホール、パハン、クランタン、トレンガヌなどのマレー諸国に米、ラック、綿布、絹、手工業製品を輸出していた[Crawford 1830:251-252]。また、1830 年 6 月 30 日付シンガポール貿易報告書によれば、1684 シッカルピー²¹相当のマレーの反物（Piece Goods Malay）、1431 シッカルピー相当の米、及び 1578 シッカルピー相当のタバコが、カンボジアからシンガポールへもたらされた[Singapore Diary 1830]。後述するように、この当時王都周辺はベトナムの強い影響下にあったため、カンボジア国王がこの船を仕立てることができた可能性は低く、コンポートを中心としたシャム湾沿岸から、マレー人の手で派遣されたものと考えられる²²。

前述したように、18 世紀半ば以降、カンボジア王は広南への傾斜を強めた。1777 年、タイソン反乱によって広南阮氏は滅亡するが、その生き残りである阮 福 映 ^{グエンフックアイン} とカンボジアは関係を保持し、1802 年の阮朝成立以降も、カンボジアはその影響下に置かれた。1811 年のカンボジア国王のベトナム亡命を契機に、1813 年ベトナムはカンボジア国王をプノンペンに移し、保護下に置いた[北川 2001a:152]。これによって、カンボジアの政治はプノンペンに駐在するベトナム人官吏の影響下に置かれた。カンボジアの国内状況はいっそう流動的になった。

一方、アユタヤ滅亡後一時的に後退していたシャムの影響力も、この頃までにはラタナコーシン朝（1782～現在）のもと、阮福映に対する支援活動などを通じて回復していた。シャムはトンレサープ湖南岸のバットンバンを拠点にカンボジアに影響力を行使しようとし、ベトナムと対立した。1833 年にはシャムとベトナムの間で衝突が起こり、シャムが敗退した。1834 年に時のカンボジア王が死去すると、ベトナムはその娘を女王として擁立したが、実際の政治はプノンペンに駐在するベトナム人官吏が行った。さらに各地の地名をベトナム風に改称し、1840 年には女王をはじめとする王族をベトナムに移し、カンボジアを事実上併合しようとした。

これに対し、カンボジア人の反ベトナム蜂起が起き、それに乗じたシャムはバンコクに亡命していたアン・ドゥオン王子を擁し、ウドンに入城させた。ベトナムはこれに反発してカンボジアに出兵した。1845年にシャムとベトナムの間で戦闘が起きたが決着がつかず、講和が成立した[北川 2001a:152-153]。ベトナムは、1830年代の明命帝（阮朝第二代皇帝、在位1820～1840）の中央集権政策に反発して起った各地の反乱の影響で国内が動揺しており、カンボジアをめぐる問題でシャムと妥協せざるを得なかった。

1848年にアン・ドゥオン王（在位 1848～1860）が正式に即位すると、王はカンボジアの再建に乗り出した。そのための財源のひとつとして重視したのが、対シンガポール交易であった。その担い手として、王はマレー人を活用した。ブイユヴォーは、ウドンからコンポートに向かう途中の野営地で、「マレー民族あるいはチャーム（原文ママ）の出自のマホメット教徒（原文ママ）の小官人」と一緒になった[ブイユヴォー 2007:102]。また、1851年にヘルムズが王都ウドンを訪問した際には、ポルトガル系の高官モンテイロ氏が道中の便宜を図り、「マレー語とカンボジア語に精通している通訳」を派遣した[ボニーマン&ヘルムズ 2007:174]。

さらに、1854年にカンボジアを訪問したマドラスの将校（A Madras Officer）の『カンボジアの3カ月』によれば、コンポートにトゥアंक・タイ、王都ウドン近郊のコンボン・ウロンにボブット・セーナーというマレー人商人がいたという[マドラスの将校 2007:190,225]。トゥアंक・タイは「大変聡明なマレー人」で、シンガポール商人 C（同書では、現地人を除く登場人物名がすべてイニシャルのみの匿名とされている）の「お気に入り」であり、生糸、象牙、ガンボージュ（藤黄）とスティックラックの交易を手広く行った。「誠実さ故に、カンボジアでは大変に尊敬されており、王が毎年貢物として受け取るこの国の産物を売るために、陛下のジャンクがシンガポールに派遣されるときはいつも、船荷監督として王に雇われていた」という[マドラスの将校 2007:190]。一方ボブット・セーナーは、商人 C の主な債権者の一人のマレー人商人で、王からこのタイトルを与えられ、いくつかの職に就いていた。彼が住むコムボン・ウロンは、ウドンから6マイルほどのメコン河岸にあり、2,000人ほどの住民がいた。彼は朝食を出し、村のマレー人女性が織った絹の見本を見せたが、それは「素晴らしい出来栄え」であったという[マドラスの将校 2007:224-225]。

これらの記述から、コンポートと王都ウドン近辺に住むマレー人商人がいずれもシンガポール交易にかかわり、重要な役割を果たしていたことがわかる。利用されるルートがメコン川→南シナ海（17世紀）とメコン川からつながる水路および陸路→シャム湾（18～19世紀）という違いこそあれ、19世紀においてもマレー人は、カンボジアと海域世界との交易において重要な役割を担っていたのである。

4. 18 世紀～19 世紀にかけてのカンボジア内陸部におけるマレー人の活動

18 世紀～19 世紀にかけて、マレー人がシャム湾沿岸で活動しつつ、カンボジア内陸部とのネットワークを形成していたころ、チャンパを追われたチャム人のなかに、カンボジアに移住した人々がいた。

チャンパからカンボジアへのチャム人の移住が盛んになるのは、チャンパが広南に制圧され、順城鎮となった 17 世紀末以降であった。チャンパ王家はかろうじて存続したものの、広南に対する従属が強まり、従来の交易国家としての性格は失われた。このため、広南による圧迫を嫌い、活動の場を求めてカンボジアに移住するチャム人が増加した。『年代記』ムーラ本によれば、1692 年、チャンパの王族が約 5,000 人を率いてカンボジアに逃れてきたという[Moura 1883b:67]。彼らの多くがトボーン・クモムやストウン・トランを中心とした、プノンペン以北のメコン川中流域に移住した[Mak Phœun 1995:397-398]²³。チャム人は、チャンパ王国時代ジャライ、エデ、バナール、ラグライなどのベトナム中部高原地帯に居住する山岳民族と内陸ルートを通して関係を有していた[Hickey 1982:107-120]。こうした山岳民族との関係を再形成できる場所として、これらの地域が移住先に選ばれたのであろう。

既述したように、ラオスに至るメコン川流域ではマレー人も活動していた。また、ハーティエンの発展により、その後背地であり、メコン川を通じて内陸部との結節点ともなるチャウドークの町がマレー人の手で 1752 年に建設された。カンボジアの河川交通の要となるプノンペンにも、マレー人のコミュニティが存在した。すでにムスリムが多数派となっていたチャム人は、マレー人と交流を持つことになる。チャム人とマレー人との関係については、様々な史料から明らかで、例えば 1854 年にカンボジアを訪問したマドラスの将校は、カンボジアのマレー人が話すマレー語は、多くのカンボジア語やチャムパ語（原文ママ）が混っており、彼らはスマトラのミナンカバウから来たマレー人とは異なる容貌をしていると述べる[マドラスの将校 2007:225]。カンボジア在住のマレー人が、世代を重ねる間にカンボジア人やチャム人との混血が進んだことを示す。マレー人とチャム人との混血により、チャーム・チュヴィエと呼ばれる集団が形成される。

こうしたなかで、マレー人とチャム人は時として王権を揺るがす勢力となる。とりわけ、タイソン反乱の勃発や、フランスによるベトナム侵略の開始によってベトナム・カンボジア関係が変容すると、広域で活動した彼らの存在は無視できなくなる。本節では、そうした事例として、①1782 年のチャーム・チュヴィエの動向、②1810 年代のトゥオン・アスミットの活動、③1858 年のチャーム・チュヴィエ反乱という 3 つの事例を検討し、18 世紀半ばから 19 世紀にかけて「チャーム・チュヴィエ」集団が社会的に台頭したことを明らかにしたい。

4-1 1782 年のチャーム・チュヴィエの動向

1771 年、広南阮氏の圧政に対して、ベトナム中部クイニョン（当時は帰仁府）近郊の
タイソン
西山邑で、阮氏三兄弟（阮 岳、阮 呂、阮 恵）が指導する反乱（タイソン反乱）が起
こった。反乱はベトナム全土に拡大し、1777 年に広南阮氏、1786 年にはトンキン鄭氏を
滅亡に追いやった。しかし、1780 年ごろから広南阮氏の生き残りである阮福映（後の阮朝
初代皇帝嘉隆帝、在位 1802～1820）が、嘉定城（サイゴン）を拠点にタイソン阮氏と抗
争を繰り広げ勝利し、阮朝（1802～1945）が成立した。

タイソン阮氏の活動とそれによる戦乱が起こった範囲は、ほぼ現在のベトナム国内に限
定される[嶋尾 2001:288-291]。しかし、カンボジアにも影響は及んだ。阮朝建国の功臣の
一人に、カンボジア兵を率いて阮福映を支援した阮文存という人物がいる[嶋尾 2001:300]。
『大南正編列傳初集』²⁴によれば、彼はもと奴隸出身のカンボジア人であったが、カンボ
ジア兵数千名を集めて阮福映のもとに参じ、功績を挙げてこの名前を与えられたという。
広南が影響力を強めていたカンボジアにも、阮福映を支援する人々がいたことがわかる。

『年代記』ヌパラット本によれば、1779 年、時のカンボジア国王が死去し、7 歳の王子
が後継者として即位した。その後、高官たちの間で主導権をめぐって抗争が行われたのち、
1782 年に勝利したオクニャ・ヨマリエチ・パエンが宰相になった[坂本・上田 2006:116-
123]。しかし、殺害された高官の一人が任命したトボーン・クモムの代官と国司が、チャ
ム人の元王族たちとともにパエンに造反した。彼らは、庶民から徴兵して軍を作り、プノ
ンペンまで攻め上り、マレー人トゥオン・サエト・アプダラ・ヴァーマダラとその他のマ
レー人たちに働きかけ、チャム人と連合してパエンを攻撃したという。このため、パエン
とその支持者たちは、シャムに逃れた[坂本・上田 2006:123]²⁵。

ヌパラット本は、トボーン・クモムで反乱を起こしたチャム人勢力と、プノンペン付近で
彼らと連携したトゥオン・サエトラマレー人勢力との連携を描き、この反乱を「チャーム・
チュヴィエの反乱」としている。これに対応する記録が、『大南寔録正編第一紀』巻 2 にあ
る。それによると、癸卯 4 年（1783 年）10 月に閩婆（マレー人）が真臘（カンボジア）を
攻め、国王匿印（アン・エーン）が暹（シャム）に奔ったという。国王がシャムに逃れるま
でになったのであるから、このときの反乱はかなり大規模なものであったことが、『年代記』
とベトナム史料の記述からうかがえる。

さらにヌパラット本によれば、この後、マレー人宗教家トゥオン・ストラが、プノンペン
対岸のロヴィエ・アエムの地で自立し、大臣を任命するなど独自の政権を樹立する動きを見
せた。しかし、彼の勢力伸長を恐れたカンボジアの高官の手で殺害された[坂本・上田
2006:124]。

『年代記』及び『大南寔録』の記述から、18 世紀後半に入るとトボーン・クモムのチャ
ム人や、王都近郊に居住するマレー人が、自らの政権を立てようとするまでの勢力を有し

ていたことがわかる。

4-2 トゥオン・アスミット＝トゥオン・パーの活動

チャム人とマレー人との合流は、タイソン反乱後も続く。カンボジア在住のマレー人高官と面識を有したムーラは、ノロドム王（在位 1860～1904）の大官を務めたトゥオン・サエト・アリの父親である、トゥオン・サエト・アスミットのベトナムとカンボジアにまたがる活動について、記述を残している²⁶。

それによると、トゥオン・アスミットは、タイソン反乱が起こっていた若いころ、チャンパにおける反ベトナム運動に参加し、下コーチシナで活動した[Moura 1883a:458]。マレー人の援助によって運動は成果を挙げていたが、チャム人の多くが、マレー人が優位を占めることを恐れて、むしろアンナム人（原文ママ）と手を結んだため、運動は挫折した。チャンパはベトナムに再征服され、彼は 18 世紀の終わりごろ「チャムの愛国者たちの一党」とともに、カンボジアに逃れた²⁷。到着後、彼は国王から厚遇されたという[Moura 1883a:458]。

一方、ウォンによると、チャム人の反ベトナム運動を指導したクランタン出身のマレー人、トゥオン・パーの事績を記したチャム語写本が存在するという。それによると、タイソン反乱のさなかの 1796 年、この人物がビン・トゥアン（ファンラン地域）とカンボジアに居住するチャム人及びマレー人を率いて反ベトナム運動を起こし、阮福映に抵抗した。彼は、チャム人の反ベトナム運動を支援するために神に遣わされた人物である、と自称した。2 年にわたる戦いの後、彼らは敗北し、トゥオン・パーはメッカに逃れたという[Wong 2004]。実際には、上述のトゥオン・アスミットの事績と、次に述べる『年代記』の記述からみて、この人物とトゥオン・アスミットが同一人物である可能性は極めて高い。

『年代記』ヌパラット本は、トゥオン・パーの名で、トゥオン・アスミットのカンボジでの活動を記す。彼が初めて登場するのは、1811 年のことである。同年彼は、親ベトナムの国王に反抗したシャム派の王子がプノンペンで起こした反乱の鎮圧に関与した。その後シャム軍の侵攻を受けた王がベトナムへ亡命した際に、使節を命じられた。前者の時にはまだタイトルを有していなかったが、後者の際に「プレア・プット」というタイトルが付され、カンボジア移住後、宮廷内でオクニャに次ぐ地位を与えられたことがわかる²⁸。さらに王が 1812 年に帰国する時には、「オクニャ・リエチ・デチャツ」のタイトルを有し、国王の先遣隊を指揮している[坂本・上田 2006:145-148][北川 2008:8]。

1814 年、コンボン・スヴァイのチャウファイ・スロック（国司）一族が、ベトナムへの依存を強める国王に不満を持ち、反乱を起こした。しかし鎮圧され、ラオスのコーンに逃亡した。国王は、当時オクニャ・ヨマリエチ（司法大臣）に昇進していたトゥオン・パーの弟であるトゥオン・マートを、オクニャ・デチャー（国司）²⁹に任命した[坂本・上田 2006:151-152]。ここでトゥオン・パーが就いている司法大臣は、当時のカンボジア宮廷の五大大臣の一人であった[北川 2008:8]。

1820 年にはプノンペンでカエウという僧侶が、ベトナムの支配に反発し、3 人の宮廷高官と結託して反乱を起こした。トゥオン・パーはこの反乱を鎮圧し、僧侶を殺害、高官 3 名を捕らえてベトナム人官吏のもとに護送した。しかし、高官たちは、反乱を起こした理由をトゥオン・パーと反目していたからであると主張し、結局トゥオン・パーもその責任を問われ、彼らとともに処刑された[坂本・上田 2006:161]。

ムーラによると、トゥオン・パー＝トゥオン・アスミットの急速な昇進は、他のカンボジアの官吏の嫉妬を招いた。加えて、彼がベトナムに使節として派遣されると、ベトナム宮廷は彼の過去を問題視し、彼の手足を縛ってカンボジアに送り返した。結局、カンボジア王は彼を処刑した。マレー人たちはアスミットを救おうとしたが、彼はそれを思いとどまらせ、従容として死に臨んだという[Moura 1883a:458-459]。

ヌパラット本、ムーラの伝記とも、チャム人・マレー人たちを率い、昇進したが、カンボジア人高官たちの嫉妬やベトナム側の反感を買い、最終的に処刑されたマレー人の存在を伝えている。また、ムーラ及びチャム語写本の情報から、彼がカンボジアにとどまらない活動網を有していたことがうかがえる。

4-3 1858 年のチャーム・チュヴィエの反乱

アン・ドゥオン王治世末期の 1858 年、フランスがベトナムに侵略を開始した。このとき、カンボジアのマレー人とチャム人勢力が、王権に抵抗する動きを見せた。彼らは、カンボジアのみならず、ベトナムのチャウドークとも密接な関係を有した。

『年代記』ヌパラット本によれば、1858 年にソムダイッ・ボーテース・チャンヴァンのタイトルを持つ「マレー人」トゥオン・リーが、トボーン・クモムのクメール人代官の圧政を嫌い、妻子を連れてチャウドークのベトナム人のもとに逃亡した。

その後、トゥオン・リーの兄弟であるトゥオン・ヒム、トゥオン・スー、トゥオン・サエットという名の「チャム人」3 名が、配下のチャム人たちを指導して反乱を起こし、トボーン・クモムの代官を追い出した。後述するムーラ本とムオの記述から、国王が派遣した代官の苛斂誅求に反発したものと考えられる。これに対し、国王は自ら鎮圧に向かい、反乱軍を破った。敗れた反乱の首謀者たちは、トゥオン・リーと同様、妻子を連れてチャウドークに逃れた[坂本・上田 2006:209-210]。

王はトボーン・クモム、スレイ・サントー・チュヴェーン、コンボン・シエムのチャム人・マレー人（チャーム・チュヴィエ）の家族を連行し、王都により近いプノンペン、コンボン・ルオン、バンティアイ・ロンヴェークに移住させた。しかし、翌年トゥオン・リーの「実の兄弟」であるトゥオン・サエット、トゥオン・カー、トゥオン・ラッがチャウドークからひそかに川を遡上し、コンボン・ルオンからプノンペンに入植させられたチャム人たちをチャウドークに連れて行ったという[坂本・上田 2006:210-211]。

一方、ムーラ本によれば、トボーン・クモム在住のトゥオン・ヒム、トゥオン・スー、トゥオン・イットという 3 名のマレー人首長が、同地の知事の苛斂誅求に耐えかね、チャム人とマレー人を糾合して反乱を起こした。彼らはトゥオン・リーという名のマレー人の弟で、全員がトゥオン・アスミットの息子だった[Moura 1883b:133]。彼らはその後、カンボジア国内のチャム人・マレー人勢力を糾合して国王の軍と戦い、トゥオン・ヒムは戦死し、トゥオン・スーとトゥオン・イットは、チャウドークへ逃れた。また、彼らの兄であるトゥオン・リーは当時王都にいたが、反乱への加担を疑われるのを恐れて、同じくチャウドークへ逃れたという。反乱の鎮圧後、王はチャム人とマレー人をポーサット、ロンヴェーク、コンボン・トラーチ、コンボン・ルオンに移住させた。しかし、チャウドークへ逃れた人々が、カンボジアへ再度侵入し、彼らを救出してチャウドークへ逃走したという[Moura 1883b:133-134]。

細部に差異があるものの、ムーラ本とヌパラット本の内容はほぼ一致する。また、反乱の首謀者が、いずれもトゥオン・アスミットの息子とされていることから、彼の処刑から 30 年余りたった時点でも、その縁者がカンボジアのマレー人、チャム人社会及び王宮内で影響力を保持していたことがわかる。両本とも、これらの騒乱をチャーム・チュヴィエによるものとしている。

一方、1859 年にカンボジアを訪問したムオも、上述の出来事に言及している。彼は 7 月 12 日に王都ウドンからトンレサップ河岸にあるカトリック宣教師の村、ピニャールーに向かう途中で、「反抗を試みた罰として、メコン河の東部平野から移された哀れなチャム族」が住む、杭上に建てられた、鳥小屋のような竹の粗末な小屋の存在を記す[ムオ 2002:141]。また 11 月の末か 12 月初めに、メコン東岸で以前に通った時には、「チャム族が住んでいた美しい平原」が、荒れ果てているのを見て驚いた。ムオによると、彼らを統治するカンボジア人高官の搾取によって、チャム人たちの不満が高まった。彼らの指導者は一度逮捕されたが、後にベトナムに逃れた。彼は機を見て戻ってくると、チャム人たちに蜂起を促した。ブノンペン付近に住むチャム人はウドンまで遡って、仲間の逃走を助けた。カンボジア国王は、チャム人の逃走を阻止するよう命令を出したが、高官を筆頭にすべてのカンボジア人が反乱の知らせを聞くと、逃亡してしまった。反乱を起こしたチャム人たちは合流し、全員コーチシナに渡ったという[ムオ 2002:171-172]。

ムオの記録は、『年代記』の記述と一致するところが多い。彼はチャム人の境遇に同情する一方で、反乱と逃走の時に彼らが取った行動を「まことに堂々としたものであった」としている[ムオ 2002:172-173]³⁰。当時メコン川を航行する船の漕ぎ手は主にチャム人であったという[ブイユヴォー 2007:107]。メコン川を航行する際にムオも、彼らに頼ることが多かったためであろう。

1860 年にアン・ドゥオン王が死去し、ノロドム王が即位すると、1861 年に王弟シヴォタが反乱を起こした。これを知ったトゥオン・リー、トゥオン・スー、トゥオン・アエル、

トゥオン・ラッの 4 人は、チャム人とマレー人を率い、チャウドークからウドンへ戻ってノロドム王に謁見し、反乱軍と戦う許可を求めた。王はこれを許し、彼らを元の村に住まわせ、トボーン・クモムの国司職などの地位を与えたという[坂本・上田 2006:222-223][北川 2008:12]。

チャウドークは、18 世紀半ば以降ベトナムの影響下にあった。『年代記』の記録によると、反乱を起こして逃亡したマレー人の指導者は、チャウドークのベトナム人のもとに逃れており、彼らがベトナムとも接触を有した可能性が指摘できる。以上の記述から、当時カンボジアに居住していたマレー人とチャム人が、メコン川ルートを軸とした広大な地域で活動していたことがわかる。18 世紀から 19 世紀前半にかけての王都近辺に居住するマレー人と、メコン川流域に居住するチャム人との交流により、チャーム・チュヴィエと呼ばれる集団が形成されていくとともに、『年代記』はチャム人とマレー人が最終的にカンボジア王権に帰順したことを唱えるのである。

5. フランス植民地支配下のカンボジアにおけるマレー人の周縁化

これまで見てきたとおり、カンボジアにおいてマレー人は、16 世紀以降 19 世紀に至る状況の変化に対応しつつ、活動を継続してきた。しかしながら、19 世紀後半にカンボジアがフランス植民地体制下に組み込まれると、彼らの立場も変容する。

1863 年、カンボジアはフランスの保護国とされた。前年（1862 年）にサイゴンが開港し、カンボジアはフランスの直轄植民地であるコーチシナと直接結びついた。これによって、それまでベトナムに抑えられていたメコン川下流域が開放され、メコン川が海域への交通路として利用できるようになった。

その結果、海港としてのコンポートの地位は低下した。さらに、1865 年にプノンペンへの遷都が行われ、これ以後カンボジアの産物はプノンペンからサイゴンへと向かうようになった。このため、コンポートとウドンを結ぶ陸路はその存在意義を失い、1880 年代までに崩壊してしまった。それまでカンボジアの海港として繁栄していたコンポートはカンボジア中心部との繋がりを断たれ、シャム湾沿岸の一地方港に転落した[北川 1992:98-99]。

次ページの表 6 は、1854 年から 1869 年までのシンガポール・カンボジア間の取引額を示したものであるが、1863 年の保護国化以降、特にプノンペン遷都の年である 1865 年を境に、輸出入両面にわたって取引額が劇的に落ち込んだことがわかる。メコン川ルートが復活した影響を、コンポートを拠点とするシャム湾交易は直接的に被ったのである。

シャム湾交易の衰退とともに、コンポートと王都ウドン周辺を拠点として活動していたマレー人もその活動を分断され、重要性を低下させた。一方、メコン川がフランスの勢力下に置かれると、流域に居住するチャム人の存在がフランス側に認識されだす。当時カンボジアに来航したヨーロッパ人の記録によれば、マレー人は王都周辺及びシャム湾沿岸に居住し、

年	輸出額	輸入額	総計
1853～54	148,437	134,321	282,758
1854～55	112,604	147,527	260,131
1855～56	118,300	125,301	243,601
1856～57	193,496	230,890	424,386
1857～58	261,697	274,145	535,842
1858～59	—	—	—
1859～60	—	—	—
1860～61	—	—	—
1861～62	78,167	49,957	128,124
1862～63	141,858	100,431	242,289
1863～64	67,338	105,812	173,150
1864～65	68,686	108,712	177,398
1865～66	6,365	19,016	25,383
1866～67	2,750	45,317	48,067
1867～68	35,925	48,901	84,826
1868～69	50,725	31,612	82,337

(単位はスペインドル)

表 6 シンガポール・カンボジア間貿易額変遷表 (1854～1869) [Wong 1961:239]所収

交易に携わる人々とされている。彼らとチャンパとのつながりについては、直接的に言及されていない。「チャム」という呼称は、管見の限り 1850 年代～1860 年代にカンボジアを訪問したフランス人の記録に初めて現れる。彼らの認識によれば、チャム人はメコン川の東岸に居住し、チャンパの末裔とされる [ブイエヴォー 2007:69]。

1880 年代以降、フランス人によるチャンパ・チャム族研究が盛んになる。その先駆者的存在として重要な人物が、エティエンヌ・エモニエである。彼は 1869 年に海軍陸戦隊少尉としてサイゴンに赴任して以来、植民地官吏として職務に携わるかたわら、カンボジア語・チャム語を習得した。1882 年からは公式にフランス・アカデミーの要請を受けて、4 年にわたってカンボジア、ラオス、ベトナム南部を踏査し、遺跡の調査と碑文収集に携わった [石澤 1979:53-54][藤原 2008:99]。チャンパについては、1884 年 12 月から調査を開始

し、主にファンラン地域で調査を行い、碑文拓本及び各種チャム語写本の収集を行った³¹。その後彼は、チャム語写本研究を精力的に行い、それを基礎に古チャム語碑文の解読に成功し、チャンパの歴史を初めて再構成した[Aymonier 1890;1891a]。

このようにエモニエは、初期のチャンパ・チャム族研究に大きく貢献したが、同時に彼はカンボジア研究でも多大な足跡を残した。彼はカンボジア全土を踏査し、歴史・地理・宗教・社会等、各方面に及ぶ調査を行った。こうした調査の中でエモニエは、カンボジアにもチャム人やマレー人や両者の混血者が存在することを知るに至る。彼は、当時のカンボジアに居住する「チャム人」について、大半がチャンパからの移住者であり、マレー世界から直接来航した人々は、全体の 20 分の 1 に満たないと述べている[Aymonier 1891b:95-96]。シヤム湾岸のマレー人の多くが、19 世紀終わり近くになると他地域に移ったためであろう。

一方 1898 年に、フランス極東学院が開設される³²。この組織はインドシナのみならず、インドと中国を含むアジア全土を研究対象とする理念を掲げた。初代院長であるルイ・フィノは、インドシナは民族と文明の合流地点であり、理解するためにはそれぞれの源泉にさかのぼらなければならないとし、「マレーシアなしでチャムを研究することはできない」と述べる[Finot 1901:383]。エモニエとは異なる、イスラームや言語面の近縁性を通じて、チャムとマレーを結びつける視点が現れたと言える。こうした学問的な傾向が、実際の植民地行政にも反映される。フランス植民地体制下においてチャム人とマレー人が明確な区別をなされず、「マレー人」とひとまとめに分類されていたことは、植民地統計文書の記述から明らかである[Rencensement général de la population Cambodgienne en 1921 en 1926]。この「マレー人」は、狭義の民族概念としてのマレー人でなく、チャム人などのムスリムを含む概念であった。

また、多くが 19 世紀以降に編纂された『年代記』においても、マレー系の人々は、メコン川中流域、特にトボーン・クモム地方に拠点を置く地域勢力「チャーム・チュヴィエ」としてしばしば描かれる。カンボジア王都周辺で、マレー半島・マラッカ海峡域とつながりを有するマレー人が数多く活動していたにもかかわらず、彼らと王室との関係に、『年代記』はほとんど言及していない。『年代記』が描く彼らの活動範囲は、トボーン・クモムを中心としたプノンペン以北のメコン川中流域である。18 世紀～19 世紀にかけてシヤム湾沿岸で活動していたマレー人に関する記述は、『年代記』に見られない。

『年代記』編纂者にとって重要なことは、シヤム湾沿岸地域ではなく、メコン川流域の支配の正統性であった。18 世紀～19 世紀にはメコン川流域にベトナムが進出し、その影響力を増大させていた。こうした状況下で『年代記』編纂者は、メコン川流域からベトナムの支配を排除し、カンボジアによる支配を正当化するための語りを必要とした。フランスが仏領インドシナ経営のため、メコン川を交易ルートとして重要視したことは、カンボジアにとっても好都合であった。1856 年、アン・ドゥオン王は、フランス皇帝ナポレオン

3 世に対し、メコンデルタ地域がカンボジアのものであると主張した。また 1858 年には、フランス軍のサイゴン攻撃に乗り、メコンデルタに出兵した[北川 2001a:154-155]。

こうしたなかで、メコン川流域に居住した「チャーム・チュヴィエ」が、カンボジア王権に取り込まれたという語りを、『年代記』は強調することになった。しかも、この「チャーム・チュヴィエ」が以前から存在したという「事実」が必要であった。『年代記』では「チャーム・チュヴィエ」が、ロンヴェーク・ウドンに王権を形成した時代からスレイ・サントーで活動したとされる。こうしてメコン川流域に居住するチャム人の存在が重視される一方、マレー人（チュヴィエ）は、同じムスリムのチャム人の付属的存在として扱われることになったのである。

これに対してマレー人の側が、自らの民族的アイデンティティを積極的に主張するような動きをした形跡は、ほとんど見られない。彼らにとっては、マレー人かチャム人かよりも、植民地体制下で活路を見出していくことが重要だったからであろう。カンボジアにおけるマレー人の周縁化は、植民地化が進むなかで、フランス・カンボジア双方の働きかけを通じて進行していったのである。

小括

17 世紀末、カンボジアへの広南の介入が強まり、ロンヴェーク・ウドン王はシャムに支援を求め、最終的に王権は、トンレサップ沿岸を拠点とするロンヴェーク・ウドンと、メコン川流域を拠点とするスレイ・サントーに分裂した。また、17 世紀末以降メコン川河口は、広南の支援のもとにデルタに入植した華人勢力に牛耳られるようになった。この結果、従来カンボジア交易の中心地だった王都周辺は荒廃し、その重要性を減退させた。

18 世紀になると、シャム湾沿岸の港市が台頭した。なかでも重要だったのが、鄭氏が建設したハーティエンだった。元来一介の補給港に過ぎなかったハーティエンは、鄭氏による銀山開発などで発展し、内陸部と海域世界を結ぶ交易港の役割も果たすようになった。ハーティエンの発展とともに、マレー人は、錫、胡椒、ガンビール、インド綿布などをカンボジアに持ち込み、米や森林生産物と交換した。マレー人の活動は、18 世紀末のタイソン反乱による動乱によっても変わることはなく、19 世紀に入っても彼らはシンガポールを中心とした海域世界との交易で重要な役割を担った。

一方、17 世紀末にチャンパが広南に征服されると、多数のチャム人がカンボジアのメコン川中流域に移住してきた。チャム人は、交易活動を通じてマレー人と混淆した。両者は、ベトナムや海域世界とも関係を有し、王権への対抗勢力ともなった。マレー人とチャム人の交流は、19 世紀前半までにはかなり進行した。『年代記』でチャーム・チュヴィエと呼ばれる集団として実体化するのはこの時期と考えられる。一方カンボジア王家は、メコン川におけるカンボジア支配を正統化するため、チャーム・チュヴィエが以前から存在し、最終的に王家に帰順したことを『年代記』で強調した。

マレー人は、激動するカンボジアの状況に対応しつつ、19 世紀半ばに至るまでカンボジアにおいて一定の存在感を示してきた。しかしながら、植民地化の進展とともに彼らを取り巻く状況は変化する。彼らが築いたネットワークは分断され、チャム人に注目が集まるなかで、マレー人は次第に周縁化を余儀なくされたのである。

¹ ナックというカンボジア王族に付する敬称がついていることから、王族の一人であることは間違いない。『年代記』で広南と結んでスレイ・サントーに拠点を置いたウパヨリエチ・アン・ノーンと同一人物の可能性が高い。

² ダンピアによれば、1688 年シャム王はメコン川河口に住み着いていた中国人海賊をイギリス人に攻撃させたという[Dampier 1703:105-107]。メコンデルタに入植した華人は、すでに述べたように広南とつながりを持っていたから、カンボジアに対する影響力強化をもくろむシャム王にとって大きな障害だった。一方、カンボジアで交易を行いたいイギリス人カントリートレーダーにとって、彼らの活動が邪魔なものであったことは想像に難くない。両者の利害が一致して、共同での出兵になったものと思われる。

³ 1684 年 5 月 31 日付『一般政務報告』によれば、華人の首長 2 名が対立し、一方が他方を銃で射殺したという[*Generale Missiven* IV 1684:618]。黄氏が楊氏を倒した事件に対応していると考えられる

⁴ 『年代記』も、1688 年にプニエ・ダンジョンエルなる人物がカンボジア国王に敵対し、華人の軍勢を集めて国王と対決したが、王が勝利したと述べる[久光 1975b:24]。1687 年～1688 年にかけて、シャムの支援を受けたカンボジア国王が、広南及び華人勢力の支援を受けた王族（二王）を打ち破ったのである。なお、プニエ・ダンジョンエルについては、ムーラ本にこの人物に相当すると思われる「有力な中国人タン・チョン・セル」が現れる[Moura 1883b:66]。華人有力者の一人であろう。

⁵ ただし、この時の使節は逆風などの理由でジョホールに寄港し、同地で VOC の代表委員を訪問している。

⁶ その結果、チャンパは、チャンパ王が旧領民を支配し、同地に移住したキン族の村は広南が派遣した役人が支配するという、特殊な形態の属国（順城鎮）として 1835 年まで存続することになる[桃木 1999:67]。

⁷ 1690 年 75 番柬埔寨船に、彼が拠点としていた場所として「柬埔寨之湊口馬工代」^{コンタイマ}が見え、同一の場所を指すと考えられるが、具体的な位置の比定は困難である。

⁸ 碧堆は不明であるが、求南はバ・プノムあるいはバナム、南栄はプノンペンに当たる[北川 2001a:146]

⁹ 『前編』巻 6 に 1689 年に広南軍が美湫海口からこの地に至ったとあり、現在のミト^{ミト}ー付近のメコン川本流流域の一地点と思われる。

¹⁰ 『年代記』によると、1714 年に水王安・エムがラオ人とベトナム人を動かして東岸の諸地方を押さえ、王宮を包囲した。山王はシャムに逃れ、代わりにアン・エムが即位した[北川 2000:71]。

¹¹ シャムでも、この遠征は、特にコーチシナ人（広南）が現国王を支援した場合、目的を達成できないとの見通しが強かった[*Generale Missiven* VII 1718:326]。

¹² 最終的に、1767 年アユタヤはビルマの攻撃の前に陥落し、王朝は滅亡する。

¹³ 上田信は、台湾平定の目途がついたことから清朝がこの年に遷界令を解除したとする。ただし、遷界令に先立って出された海禁令（1656 年発布）はこの後もし

ばらく効力を有し、台湾鄭氏降伏の翌年、1684年に展界令を發布して民間の海外貿易を許したとする[上田 2005:302-303]。このような複雑な過程をたどらず、1684年に遷界令が解除され、展開令が發布されたとする論者も存在する[大庭 1999:55]。

¹⁴ 1693年編纂のカンボジア法典『クラム・スロック』にはこの地の支配者のタイトルとしてチャウファイ・スロック・バンティエイ・ミエスという役職が登場する。ただし、この役職の階級はチャウファイ・スロックとしては最低の位階を占めるに過ぎず、当時のシャム湾沿岸に対するカンボジア王権の関心は極めて低かったと言わざるを得ない[北川 2001b: 191-192]。

¹⁵ 黎朝の最盛期である洪徳年間（1460～1490）の法令によれば、村落の 500 戸以上を大社、300 戸以上を中社、100 戸以上を小社としていた[桜井 1999b:149]。この値に従い、一戸を 4 人で形成するものとする、当時のハーティエン七社村の人口は 2,800 人から 14,000 人程度となる。

¹⁶ ハミルトンによれば、ハーティエンとカンボジア王都は陸路でも連絡しており、その場合距離は約 50 リーグから 60 リーグ（240km～288km）ほどだったという[Hamilton 1930:106]。

¹⁷ ボニーマンによれば、コンポート港のランドマークとなる山が「グヌン・スス」とマレー語で記されている。また、シャム湾から南シナ海にかけて点在する島々の名にマレー語で島を意味する「プーロ」が使われている（プーロ・コンドル、プーロ・ウビなど）のも、当該海域におけるマレー人の活発な活動を示唆している。

¹⁸ 同名のつる性植物の葉を煮詰めて抽出した物質（阿仙薬）。リアウ、スマトラ諸地域に産し、マラッカ海峡周辺の貿易においては重要な国際商品であった。

¹⁹ 草雌黄とも呼ばれる、マンゴスチン科の木から採取される黄色の樹脂。カンボジアから多く産し、カンボジアのマレー語名が訛ったものとされる[Crawford 1856:142]。オランダ語では *guttegom* と呼ばれ、薬用や染料として用いられた。

²⁰ *Tuhfat-al Nafis* によれば、ダエン・カンボジャの両親はカンボジアを訪問した際に、往路・復路ともシアンタンに立ち寄っている[Raja Ali Haji 1982:45-46]。彼らの出発地はバタヴィアであったから、当時のシアンタンは、海域世界とカンボジア、シャムなど大陸部を結ぶ中継点としての役割を果たしていたと考えられる。

²¹ 新鑄ルピーとも呼ばれ、1793 年～1836 年までイギリス東インド会社ベンガル管区内で使用された銀貨。

²² ただし、当時の統計では *piece goods Malay* はカンボジア以外にも、マレー半島、ジャワ、バリ、コーチシナからも輸入されている。すなわち、*Malay* が「東南アジア現地産」の意味で用いられており、これらの取引に実際にマレー人がどの程度関与していたかについては検討する必要がある。

²³ ただし、彼らのすべてがプノンペン以北のメコン川沿岸に居住したわけではなく、プノンペン近郊のチュローイ・チョンヴァーに入植した者もいた[Mak Phœun 1995:398]。プノンペン近郊は、川からの侵攻に対し王都を防衛する基地という役割を担っていた[北川 2001a:146]。

²⁴ 慶應義塾大学言語文化研究所影印本の第 4 冊に収録されている。

²⁵ この記述はガルニエ本には存在しない。また、ムーラ本はパエンに殺害された大臣がその死の直前にトボーン・クモムの知事に、万一の時には東方諸州の民衆を率いて決起するよう使者を派遣した[Moura 1883b:97-98]と記すのみで、マレー人の活動については記していない。同じ王族同士の抗争ならまだしも、マレー人の反乱で国王がシャムに逃れたという事実は、記録し難い事実だったのかもしれない。

²⁶ ムーラ本では、この人物は「ヨモ・リエチ・トゥオン・パー、すなわちマレー人トゥオン・セット・アスミット」と書かれ[Moura 1883b:104]、別の個所では『年代記』ではトゥオン・パーの名で現れるが、マレーの本名はトゥオン・セット・アスミットである」となっており、ヌパラット本のトゥオン・パーと同一人物とされている[Moura 1883b:133]。

²⁷ ムーラはこのカンボジア移住の時期について「正確な日時をマレー人から得ることは不可能である」としている[Moura 1883a:458]。ただし、ムーラ本には1814年にトゥオン・アスミットが登場することから、ここから逆算すると18世紀末のタイソン反乱末期であることは確実と思われる。この乱では、多くのチャム人がタイソン阮氏かそれに対抗する阮福映の両陣営に引き込まれ、分断された[桃木 1999:72]。

²⁸ プレアはカンボジアの官吏の称号である。当時の官吏のタイトルは6つあり、この称号はオクニャに次ぐ第3位の位階に当たる。各タイトルにはそれぞれ10のハウペアンで示される等級があり、プットはこの等級の何位目かであろう[坂本・上田 2006:547-549]。

²⁹ つまり、チャウファイ・スロックと同じものである。タイトルが異なる理由は不明。

³⁰ この時チャム人たちは、自分たちを無事に通過させてくれれば、クメール人たちの財産には一切手を出さないが、通過を阻むならば殺戮も辞さない旨の声明を出し、その言葉どおり「見張りもなしにつながれていた大船」にも手出しをせず、小型の独木舟で河を下って行ったという[ムオ 2002:172-173]。

³¹ この調査は、その後北方に拡大し、1885年7月にはビンディン（現在のクィニン近郊）まで達したが、同年起きた文紳の反仏蜂起によって打ち切られた[石澤 1979:70]。

³² この年に結成されたのは、正確には「インドシナ考古学調査隊」であり、1900年に「フランス極東学院」に改称した。

結論—まとめと展望—

カンボジアは、古くから海域世界とのつながりを持っていた。東南アジア大陸部の中でもマレー半島やマラッカ海峡に比較的近く、またメコン川やトンレサプ川を介して海域世界にアクセスしやすい地理的条件にあったためである。アンコール王朝の初代王であるジャヤヴァルマン 2 世が「ジャワから帰国して」王位についたというクメール語碑文の記録や、ザーバジュの王がクマール（クメール）の王国に攻め込み、王の首をはねたという 10 世紀のアラビア語史料の記録などは、そうした海域世界とカンボジアとのかかわりを示すものである。

カンボジアが海域世界との関係を強めるのは、16 世紀以降マレー人が活動を活性化させてからであった。16 世紀後半、パタニやジョホールなどの海域諸国から来航したマレー人は、カンボジアで交易活動を展開し、時に軍事力も行使しつつ、その地盤を確立していった。16 世紀末に登場したオクニャ・ラクサマナは、宮廷勢力と結んで権力をふるったその代表であった。

17 世紀に入ると、鹿皮、蘇木などの東南アジア産品に対する日本の需要が高まり、交易は一層活性化した。カンボジアと海域世界との交流はさらに拡大した。海域世界に進出したカンボジア船の船主は主にマレー人であった。また、1630 年代半ばまでに、マレー人はメコン川を介して内陸ラオスに及ぶネットワークを構築した。この結果、マレー人の影響力は増大した。1642 年に即位した国王ナック・チャンは、マレー人との関係を強化するべく、自らイスラームに改宗した。VOC との交渉を担ったのも、マレー人だった。1656 年～1657 年にかけて交渉がなされ、締結された「第一次条約」条文に記載されたカンボジア側の関係者が、いずれもマレー人であることは、それを如実に示している。

1658 年にナック・チャンを排除して新たに即位したナック・ムントンは、マレー人の活動を抑圧するとともに、広南との婚姻関係を背景に、台湾鄭氏系華人を登用し、彼らに交易活動を委ねた。しかし、この時期でも、マレー人有力者が VOC に関係改善を求める書簡を送るなど、海域世界との交渉をマレー人は担っていた。その後、遷界令や日本交易の衰退の影響によって鄭氏系華人の活動が振るわなくなると、ナック・ムントンは海域世界との交易に活路を見出さなければならなくなり、マレー人を復権させた。1670 年代を通じて、マレー人は VOC との交渉で重要な役割を果たした。

17 世紀末～18 世紀にかけて、王位をめぐる王族の内紛に隣国のシャムと広南が介入し、カンボジア王都周辺は荒廃した。さらに、メコン川ルートが広南と連携した台湾鄭氏系華人勢力に抑えられ、交易路としての利用が難しくなった。このため、王都周辺地域におけるマレー人の活動は、沈滞を余儀なくされた。マレー人は、代ってシャム湾沿岸地域での交易に

活路を見出し、鄭氏を中心とした華人勢力とも提携しつつ、ハーティエンの建設・発展に貢献した。

17 世紀末の広南によるチャンパの征服によって、その住民多数（最低でも数千人規模と思われる）がカンボジアに移住した。彼らの中にはカンボジア王都周辺に居住する者もいたが、多くはプノンペン以北のメコン川中流地域に移住し、そこを拠点に活動した。18 世紀半ば以降、イスラーム化していたチャム人と王都周辺のマレー人とが交流するようになった。『年代記』に記録された 1782 年のマレー人とチャム人たちの活動は、両者の間に緊密な関係が築かれていたことを示唆する。『年代記』で「チャーム・チュヴィエ」と呼ばれるようになる集団は、この時期に形成されたと思われる。マック・プアンが議論する 1471 年のチャム人の「移住」は 17 世紀末以降のそれとは、規模・性格とも異なるものと考えべきである。

他方、同じ時期に王都周辺のマレー人は、シャム湾沿岸のマレー人とも結びつき、カンボジア国内のネットワークを再編した。彼らは、チャウドークを筆頭に、メコン川流域に複数の拠点を構え、そこを結節点としてシャム湾沿岸と内陸部をメコン川経由で結びつけようとしたのである。それは当時華人に牛耳られていたメコン川河口経由ルートに代って、新たに海域と陸域をつなぐルートとなった。

19 世紀に入ると、こうしたネットワークを背景に、広範囲にわたって活動するマレー人も現れた。タイソン反乱の時期にベトナムでチャム人を率いて反ベトナム運動を指導し、後にカンボジアに逃れて大臣として高位に上ったトゥオン・アスミットは、その代表である。また、1858 年に起きた「チャーム・チュヴィエの反乱」では、メコンデルタとカンボジア国内を広域に動く彼らの活動が見て取れる。マック・プアンの指摘する、1832 年～1835 年にかけて起きたチャム人反乱と阮朝によるその鎮圧で、チャム人たちがカンボジアに移住したことも、これに寄与した可能性がある。

シャム湾沿岸地域で活動していたマレー人は、1819 年にシンガポールが開港すると、港市コンポートを拠点に交易活動に参入した。このマレー人の活動に着目したアン・ドゥオン王は、王都ウドンとコンポートを結ぶ陸路網を整備し、王都周辺のマレー人活動圏とシャム湾沿岸のマレー人活動圏とを結びつけ、交易活動の活性化をはかった。

しかし、1863 年のフランスによる植民地化以後、マレー人は後退を余儀なくされた。その最大の原因は、メコン川河口経由ルートが復活したことにより、王都周辺とマレー人の活動の中心地域であるシャム湾沿岸が分断されたことにある。さらに、フランスの支配の進展と交易ルートの変化により、メコン川流域に居住するチャム人に脚光が当てられるようになった。フランス人学者によるチャンパ、チャム族研究によって、カンボジアに居住するマレー系の人々を、チャンパの子孫と考える視点が生まれる一方で、チャム人とマレー人の親縁性を考える視点が提示され、カンボジアにおけるチャム人とマレー人の区別は次第に曖昧化し

た。研究の進展と植民地支配の確立は、その傾向に一層拍車をかけた。結果的に、マレー人はカンボジア社会において次第に周縁化し、その重要性を低下させていった。

本論文の考察から、16 世紀～19 世紀半ばまで、カンボジアと海域世界との関係において、マレー人は重要な役割を担い続けてきたことがわかる。17 世紀に顕著に現れたように、国王がマレー人を重用するか否かが、カンボジアと海域世界との関係に直接的な影響を与えることさえ起ったのである。従来、東南アジア大陸部の交易においては、華人の活動が重要視されることが多かった。本論文において、筆者はオランダ語史料を検討することにより、カンボジアと海域世界との関係の重要性、およびそこにおいて果たしたマレー人の役割の一端を提示することができたと考える。

今後は、カンボジアのみならず、シャムや広南などの大陸部諸国と海域世界との関係についても検討し、そこでマレー人をはじめ海域世界との仲介者がいかなる役割を果たしたのか、考察する必要がある。例えば、シャムの場合、17 世紀には王都アユタヤに一定の規模のマレー人居住区が存在した。また、シャム湾沿岸には、マレー人が長官を務める港市が存在し、彼らはカンボジアと同様に、シャムでも一定の存在感を示していた。それにもかかわらず、シャムの交易活動におけるマレー人は、カンボジアの事例に比べて影が薄いように思われる。本稿でも見てきたように、カンボジアではインド綿布の運び手としてマレー人が重要な役割を担ってきたが、シャムではインド系ムスリム商人がそれを担った。またシャムは、胡椒や錫の産地のマレー半島中部のマレー諸国を朝貢国とした。一方、米の輸出は、華人をはじめ VOC やマレー人など多様な人々が担った。他方カンボジアでは、これらの商品にマレー人が中核的に関与したのであった。こうした考察をとおして、東南アジア大陸部諸地域と海域世界との関係を明らかにでき、東南アジアの中にカンボジアを位置づける視点も提示できよう。

さらに、第 5 章第 4 節でみてきた、植民地支配下におけるチャンパ・チャム族研究が、当のカンボジアのチャム人・マレー人にどのような影響を与えたのかを検討する必要がある。この問題については、アンコール遺跡について優れた先行研究がある[笹川 2006][藤原 2008]。しかし、チャンパ・チャム族研究については、そうした視点からの研究は行われていない。その原因として、「カンボジアの文化遺産」として政治性を濃厚に有するアンコール遺跡に比べて、地域的にはカンボジアとベトナム南部にまたがるチャム族、ベトナム南部にその領域が限定されるチャンパ遺跡群は、ベトナム・カンボジア双方の植民地支配を正当化するほどの政治性を持ちえなかったことが考えられる。

しかし、本論文で考察したように、メコン川支配の正統性を主張するためにカンボジア王家は、チャム・チュヴィエを王国が受け入れた移住者として語ってきた。フランス人研究者は、彼らをチャンパ王国と結びつけ、またチャンパの繁栄の歴史を明らかにした。さらにフランス人は、チャム人とマレー人との親縁性を提示した。こうしたなかでカンボジアのチャム系住民が、東南アジアのムスリムとのつながりを再認識したことは十分考えられる。今日彼らは、マレー世界と強いつながりを有している。そのことは、彼らのイスラームがマレ

ーシアやインドネシアで広く共有されているシャーフィイー派（スンナ派の四大法学派の一つ）に同じく属していることを自認し、彼らのもっとも主要な留学先がマレーシアであることからわかる[桃木 1999:85-87][大川 2017:63]。マラッカ海峡域を出自とするマレー系住民は、フランス植民地期に多くがカンボジアを去ったと考えられるが、彼らの存在の痕跡は、その後もチャム系住民のうちに残されたのである。

参考文献

一次史料

オランダ語史料

Articulen van Accort met die van Cambodia (Bijlage bij den voorgaanden brief van Jan de Meyer en Pieter Kettingh uit Cambodja aan Batavia van 30 November 1664) in Muller 1917, pp.391-397.

Casteleyn, P. 1669. Vremde Geschiedenissen in de Koninckrijcken van Cambodia en Louwen-Lant, in Oost-Indien, Zedert den Iare 1635 tot den Iare 1644 aldaer voor-gevallen. Haarlem. in Muller 1917, pp.1-57.

Chrjs, J.A.van der, Herman T.C., Fruin-Mees W., Haan F.de., Heeres J.E. and Hullu J.de.(eds.). 1887-1931. *Dagh-register, gehouden int Casteel Batavia vant passerende daer ter plaetse als over geheel Nederlandts-India*. 31 vols. 1624-82. The Hague : Martinus Nijhoff.

Blussé, J.L. , Milde W.E. and Ts'ao Yung-Ho(eds.). 1996. *De Dagregisters van het Kasteel Zeelandia, Taiwan 1629-1662* .(Vol.III:1648-1655), The Hague:Instituut voor Nederlandse Geschiedenis)

Domckens,S.J. 1644. “Copie daghregister van t’gene voorgevallen verricht ende verhandelt is op de tocht naert Coninghrijck Combodia, begonnen tot revengie van d’Ed.Compagnies geledene schade ende langh gepleegde overlast mitsgaders den grouwelijcken moort aen haere comissaris ende residenten aldaer begaen ofte restitutie ende vergoedinge van alle de Compagnies met geweld aengesnoerde middelen, als bij generaele bericht schrift daertoe uytruckelijck medegeven blijckende is etc., door den vice-commandeur Simon Jacobsz. Domckens, gehouden op zijn voyagie near Cambodie ende Tayouan. 1644.” , in Muller 1917, pp.348-351.

Foreest.H.A. van and A.de Booy.(eds.) 1980. *De Vierde Schipvaart der Nederlanders naar Oost-Indië onder Jacob Wilkens en Jacob van Neck (1599-1604)*. The Hague:Martinus Nijhoff.

Gaalen,J.D. 1636. “Journael in Cambodia van Jan Dirxsz Gaalen, 18 Juni 1636 tot 8 November 1636” in Muller 1917, pp.61-124.

Generale Missive (van Gouverneur-Generaal aan Bewindhebbers) in dato 30 Januari 1665. in Muller 1917, p.398.

Coolhaas,W.P., Goor J.van, Schooneveld-Oosterling J.E.and Jakob J.K.(eds). 1960-2007. *Generale Missiven van gouverneur generaal en raden aan Heren X VII der Verenigde Oost indische Compagnie*, 11vols., ed. The Hague Martinus

Nijhoff.

- Hssgen, J van der. 1638. "Instructie voor Johannes van der Haagen, opperhoofd, ende den Raadt des Nederlanechen Comptoire in't rijk Cambodia : get.Paulus Croocq 6 Nov.1638.", in Muller 1917, pp.131-133.
- Haghen, J van der. 1639. "Copie Missivve door den Oppercoopman Sr.Johannes van der Haghen uyt Cambodia in dato 20 July 1639 aen den E.Hr. President Caron gedirigeert (naar Japan) ", in Muller 1917, pp.140-141.
- Heeres, J.E. 1931. *Corpus Diplomaticum*, Vol.2: 1650-1675 (Bidragen tot de Taal-, Land-en Volkenkunde van Nederlandsch-Indië, Vol. 87), The Hague, Martinus Nijhoff.
- Indijck, H. 1657. "Rapport gedaen door Sr.Hendrik Indijck als gewesen hooft van 's-Copm's negotie in't rijk van Cambodia aen haer Ed. gouverneur-generael geshreven in dato 10 Maart 1657 in 't jacht de Dorommedaris, seylende naer Batavia." In Muller 1917, 362.
- Indijck, H. 1658. "Copie rapport door den coopman Indijck op zijn arrivement op Batavia uit Combodia wegens 's-Compagnies stant in dat rijk overgegeven aen Haer Ed. In dato 5 January 1658, geschr. Op 't jacht Armuyden ter reede Batavia" , in Muller 1917, pp.364-367.
- Indijck, H. en Kettingh, P. 1657. "Copie missive van Hendrick Indijck ende Pieter Kettingh aen d'E.Hr.Generael ende de Raden van India per den vrijborger Thijs Pieters 21 September 1657", in: Muller 1917, pp.363-364.
- Indijck, H., Kettingh, P. en Stouthart, A. 1656a. "Copie Missive van Hendrick Indijck, Pieter Kettingh en Adrjaen Stouthart, Cambodia 17 October 1656, aen d'E.Hr.gouverneur –generael Joan Maetsuycker ende Raaden van India", in: Muller 1917, pp.357-359.
- Indijck, H., Kettingh, P. en Stouthart, A. 1656b. "Copie missive van Hendrick Indijck, Pieter Kettingh en Adrjaen Stouthart, Cambodia 12 November 1656 aen d'E.Hr.gouverneur-generael Joan Maetsuyker ende Raaden van India", in Muller 1917, p.360.
- Indijck, H., Kettingh, P. en Stouthart, A. 1657. "Copie Missive van Hendrick Indijck, Pieter Kettingh en Adrjaen Stouthart uit het comptoir Combodia 8 Juli 1657 aen den E.Zacharias Wagenaar, opperhoofd, ende den Raad in Japan", in Muller 1917, pp.362-363.
- Kettingh, P. 1658. "Brief van Pieter Kettingh in't Nederlants Comptoir Cambodia aan Gouverneur Generaal en Raden" in Muller 1917, pp.369-385.

----- . 1665a. "Copie missive van Sr.Kettingh in dato 12 Februari 1665 uyt Cambodia aen Gouv.-Gen.Joan Maetsuycker en Raden van India" in Muller 1917, pp.399-401.

----- . 1665b. "Daghregister gehouden voor Pieter Kettingh 12 Feburuari tot 12 November 1665" in Muller 1917, pp.403-444.

Meyer, J. 1665a. "Copie instructie van Sr.Joan de Meyer aen Sr. Pieter Kettingh tot nearichhinghe gelaten, Cambodia in dato 11 Februari 1665." in Muller 1917, p.399.

----- . 1665b. "Rapport in dato 10 Maert 1665 van den coopman Joan de Meyer belangende sijne verrichtinghe en wedervaeren in de welgegeven comissie van UEd. omme met den coninck van Cambodia den vrede te vernieuwen ende den handel in sijn rijk te versoecken als in voorigetijden geweest heft. Geschr. in't jahct de Zeehont" in Muller 1917, pp.401-402.

Meyer, J en Kettingh, P. 1664. "Copie missive van Sr.Joan de Meyer en Pieter Kettingh uyt Cambodia int Nederlants comptoir aen Batavia in dato 30 November 1664." in Muller 1917, pp.387-391.

Muller,H. 1917. *De Oost-Indische Compagnie in Cambodja en Laos.1636-1670*, Linschchoten Vereeniging 13, The Hague.

"Rapport gedaen door Sr.Hendorik Indeijck als gewesen hooft van 's -Comps negotie in't rijk van Cambodia aen haer Ed.gouverneur-generael en Raden, op desselfs retour overgegeven en geschreken in dato 10 Mairt 1657 in't jacht de Drommedaris, seylende near Batavia." in Muller 1917, p.362.

Regemortes, P.van. "Copie Missive door den oppercoopman Pieter van Regemortes aan d.Hr.gouvr.Paulus Traudenius (op Tayouan), geschr. Cambodja 5 Juli 1642." in Muller 1917, p.147.

Translaet missive van den Coninch van Cambodia aen den Ed. Dr.Gouverneur Generael 1642. in Muller 1917.pp.333-338.

Valentijn,F. 1724. *Oud en Nieu Oost-Indiën*. Vol.III. Dordrecht et Amsterdam.

Wijckersloot, J.van. 1667. "Rapport van den ondercoopman Jacob van Wijckersloot, gedaen aan den Ed Daniel Sicx, coopman en opperhooft in Japan, ommein tijde en wijle Haere Eds op Batavia bekent te maken de droevige toestant in 'sCompagnies voorgevallen saecke en ongehoorde procedurenin't rijk vanCambodia, aldaer 'sCompagnies ministers door den Chinesen rover Piauwwja aengedaen, alsmede het affloopen en verbranden van't opperhooft Sr Pieter Kettingh 'tgene andersints daer voorgevallen is Geschr int jacht de Schelvis 19 Augustus 1667." in Muller 1917, pp.447-449.

Wuysthoff, G. 1642. Journaal van de reyse naar der Lauwen-Landt door Gerrit Wuysthoff, 20 Juli 1641 tot 24 October 1642. , in Muller 1917, pp.149-217.

欧文史料（オランダ語以外）

A relation of the situation and trade of Camboja : also, of Syam Tonkin, China, and the Empire of Japan : from 2.B in Bantam (Extract), *Indian Office Record G/12/13*, No.19 China (Collections relative to China, and to intercourse of the English with that Empire)

Crawfurd, J. 1830. *Journal of an Embassy from the Governor-General of India to the Courts of Siam and Cochin China* ; Exhibiting a view of the Actual State of those Kingdoms. Vol. II, London: H. Colburn and R. Bentley.

Dampier, W. 1703. *A new voyage round the world*. Vol. I . London: James Knapton. ----- . 1705. *Voyage and Descriptions*. Vol II . London: James Knapton.

Farrington, A. & Dhiravat na Pombejra. 2007. *The English Factory in Siam 1612-1685*. Vol. I , London: The British Library.

Hamilton, A. 1930. *A New Account of the East Indies*. Vol. II, London: The Argonaut Press.

Heeres, J.E. 1898. “Abel Janszoon Tasman : His Life and Labours” *Abel Janszoon Tasman’s Journal*, pp.48-51. Amsterdam: Muller.

Gervaise, N. 1998. The Natural and Political History of the Kingdom of Siam (Translated and edited with an introduction and notes by John Villiers), Bangkok: White Lotus Press.

Journal and consultations of John Edwards and Council at Bantam, 13 August 1659, *Indian Office Record : G/21/3 (3)* Farrington, A & Dhiravat na Pombejra 2007, pp.330-333.

Lejosne, J.C. 1993. *Le journal de voyage de Gerrit van Wuysthoff et de ses assistants au Laos (1641-1642)* , Paris : Centre de Documentation et d’Information sur le Laos.

Rencensement général de la population Cambodgienne en 1921 en 1926

Singapore Diary 1830. *Indian Office Record G/34/162*, Strait Settlement.

カンボジア王朝年代記

Garnier, F. 1871. “Chronique Royale du Cambodge.” *Journal Asiatique* 18, pp.336-385.

----- . 1872. “Chronique Royale du Cambodge.” *Journal Asiatique* 20(2) , pp.112-144.

- Khin Sok. 1988. *Chroniques Royales du Cambodge (de Bañā Yāt à la Prise de Lanvaek)*. Paris :École Française d'Extrême-Orient.
- Mak Phœun. 1981. *Chroniques Royales du Cambodge (de 1594 à 1677)*. Paris : École Française d'Extrême-Orient.
- , 1984. *Chroniques Royales du Cambodge (des origines jusqu'à Paramaraja I^{er})*. Paris :École Française d'Extrême-Orient.
- Moura,J. 1883b. *Le Royaume du Cambodge*. Tome Deuxième. Paris :Ernest Leroux(Digitally printed version. 2015, Cambridge:Cambridge Univ.Press).
- 坂本恭章 (訳) 上田広美 (編) 2006 『カンボジア 王の年代記』、明石書店

マレー語史料

- Brown, C.C.(tr.) 1970. *Sĕjarah Mĕlayu or Malay Annals*. Kuala Lumpur:Oxford University Press.
- Cheah Boon Kheng(compiled.) . 1998. *Sejarah Melayu — The Malay Annals* MS.Raffles No.18 New Romanised Edition. Kuala Lumpur:The Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society.
- Tengku Said.,Yosoff Iskandar.(ed.) 1992. *Hikayat Siak*. Kuala Lumpur:Dewan Bahasa dan Pustaka, Kementerian Pendidikan..
- Raja Ali Haji. 1982. *The Precious Gift (Tuhfat al-Nafis)*. An annotated translation by Virginia Matheson and Babara Watson Andaya. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Teeuw,A. and Wyatt,D.K. 1970. *Hikayat Patani The Story of Patani*. Vol.1. Bibliotheca Indonesica 5. The Hague:Martinus Nijhoff

シヤム年代記

- Cushman, R.D.(tr.), Wyatt, D.K.(ed.) 2000 *The Royal Chronicles of Ayutthaya*. Bangkok:The Siam Society under Royal Patronage.

漢籍史料

- 慶応義塾大学語文化研究所. 1961. 『大南寔録 1—大南寔録前編・大南列伝前編』.
- , 1963. 『大南寔録 2—大南寔録正編第一紀』.
- 台湾中央研究院歴史言語研究所 1962-66. 『明実録』(影印本).
- 鄭懷德 (Trinh Hoài Đức) 1998 『嘉定城通志』(Gia Định thành thông chí).
(tr.) Đô Mông Khuong, Nguyễn Ngọc Tinh; revised and annotated by Đào Duy Anh. Hà Nội?: Nxb.Giáo dục.

宋福玩・楊文珠輯. 1966. 『暹羅国路程集録』 香港中文大学新亜書院研究所.
張燮(謝方點校). 2000. 『東西洋考』 中外交通史籍叢刊 5 『西洋朝貢典録校注
・東西洋考』 中華書局.

日本語史料

大場脩(編著) 1974 『唐船進港回棹録・島原盆唐人風説書・割符留帳—近世日中交渉史料—』 関西大学東西学術研究所資料集刊 9、関西大学東西学術研究所.
永積洋子(編) 1987 『唐船輸出入品数量一覧 1637～1833 年—復元 唐船貨物改帳・帰帆荷物買渡帳—』、創文社
林春勝・林信篤(編) 1958 『華夷変態』 上・中・下 東洋文庫叢刊第 15、東洋文庫

翻訳史料

小川博(編) 1998 『中国人の南方見聞録—瀛涯勝覧』、吉川弘文館
クルス・ガスパール・ダ 2002 『クルス『中国誌』—ポルトガル宣教師が見た大明帝国』
(日埜博司訳) 講談社学術文庫 1555、講談社
周達観(和田久徳訳注) 1989 『真臘風土記—アンコール期のカンボジア』 東洋文庫
507、平凡社
ショワジ 1991 「シヤム王国旅日記」(二宮フサ訳) ショワジ、タシャール『シヤム旅行記』(17・18 世紀大旅行記叢書 7)、pp.8-354. 岩波書店
タシャール 1991 「シヤム旅行記」(鈴木康司訳) ショワジ、タシャール『シヤム旅行記』(17・18 世紀大旅行記叢書 7)、pp.355-648. 岩波書店
ダンピア 1992 『最新世界周航記』(平野敬一訳)(17・18 世紀大旅行記叢書 1)、
岩波書店
東京大学史料編纂所(編) 1987 『日本関係海外史料 オランダ商館長日記訳文編之六
自寛永十八年九月至寛永十九年閏九月』、東京大学出版会
ピレス・トメ 1966 『東方諸国記』(生田滋・池上岑夫・加藤栄一・長岡新治郎訳)
大航海時代叢書V、岩波書店
ファン・フリート 1988 『シヤム王国記』(生田滋訳) 大航海時代叢書第II期 11
『オランダ東インド会社と東南アジア』、pp.93-214. 岩波書店
ブイユヴォー 2007 「アンナムとカンボジア」『カンボジア旅行記』(北川香子訳)
第一部、pp.21-159. 連合出版
ボニーマン&ヘルムズ 2007 「1851 年のカンボジア」『カンボジア旅行記』(北川
香子訳) 第二部、pp.161-178. 連合出版
「マドラスの将校」 2007 「カンボジアの 3 か月」『カンボジア旅行記』(北川香子訳)
第三部、pp.179-237. 連合出版

- ムオ・アンリ 2002 『インドシナ王国遍歴記—アンコール・ワット発見』（大岩誠訳）、
中公文庫 876
- 村上直次郎（訳）1956 『長崎オランダ商館の日記 第一輯：自 1641 年 6 月至 1644 年
10 月』、岩波書店
- 1957 『長崎オランダ商館の日記 第二輯：自 1644 年 11 月至 1650 年 10 月』、
岩波書店
- 1958 『長崎オランダ商館の日記 第三輯：自 1650 年 11 月至 1654 年 10 月』、
岩波書店
- モルガ・アントニオ・デ 1966 『フィリピン諸島誌』（神吉敬三・箭内健次訳）大航海
時代叢書Ⅶ、岩波書店
- 家島彦一（訳注）2007 『中国とインドの諸情報 2 第二の書』東洋文庫 769、平凡社
- リンスホーテン 1968 『東方案内記』（岩生成一・渋沢元則・中村孝志訳注）大航海時
代叢書Ⅷ、岩波書店

欧文文献

- Andaya,B.Y. & Andaya,L.Y. 1982. *A History of Malaysia* (Second Edition),
PALGRAVE, London:Palgrave.
- Andaya,B.Y. 1993. *To Live as Brothers — Southeast Sumatra in the Seventeenth
and Eighteenth Centuries*. Honolulu:University of Hawaii Press.
- Andaya,L.Y. 1975. *The Kingdom of Johor 1641-1728*. Kuala Lumpur:Oxford
University Press,
- Aymonier, É. 1890. “Légendes historiques des Chams.” *Excursions et
Reconnaitances* 14. pp.145-206.
- , 1891a. “Première étude sur les inscriptions tchames” *Journal Asiatique*
17. pp.5-86.
- , 1891b. *Les Tchames et Leur Religions*, Paris:Ernest Leroux.
- Bhawan Ruangsilp. 2007. *Dutch East India Company Merchants at the Court of
Ayutthaya—Dutch Perceptions of the Thai Kingdom c.1604-1765*.
Leiden :Brill.
- Blussé, L. 1988. *Strange Company : Chinese settlers, mestizo women and the
Dutch in VOC Batavia*. Dordrecht :Foris Publications.
- Buch, W.J.M. 1937. “La Compagnie des Indes Néerlandaises et l’Indochine”
Bulletin de l’Ecole Française d’Extrême Orient 36. pp.97-237.
- Chandler, David P. 1993. *A History of Cambodia* (Second Edition).
Boulder:Westview Press.

- Cheng Wei-chung. 2013. *War, Trade and Piracy in the China seas, 1622-1683*. Leiden: Brill.
- Cœdès, G. 1968. *The Indianized States of Southeast Asia*. (Walter F.Vella(ed.), Sue Brown Cowing(tr.)) Honolulu: University of Hawaii Press.
- Crawfurd, J. 1856. *A Descriptive Dictionary of the Indian Islands and Adjacent Countries*. London: Bradbury & Evans. (Digitally printed version. 2013, Cambridge: Cambridge Univ.Press).
- Dijk L.C.D.van. 1862. *Neêrland's Vroegste Betrekkingen met Borneo, Den Solo Archiupel, Cambodja, Siam en Cochîn-China*. Amsterdam: J.H.Scheltema.
- Dhiravat na Ponbejra. 1990. "Crown Trade and Court Politics in Ayutthaya During the Reign of King Narai (1656-88)." *The Southeast Asiann Port and Polity — Rise and Demise* (J.Kathirithamby-Wells & John Villers(eds.)). Singapore: Singapore University Press.
- . 2003. "The Dutch-Siamese Conflict of 1663-1664 : A Reassessment" in *Around and about Formosa: Essays in honor of Professor Ts'ao Yung-ho* (L.Blussé(ed.)) ,Taipei: Ts'ao Yung-ho Foundation for Culture and Education. pp.291-306.
- Finot, L. 1901. "Communication de Louis Finot à la séance du 10 mai 1900 à l'Académie des Inscriptins et Belles-Lettres", *Bulletin du l'Ecole Française d'Extrême-Orient* 1, p.383.
- Hickey, G.C. 1982. *Sons of the Mountains — Ethnohistory of the Vietnamese Central Highlands to 1954*. New Haven: Yale University Press.
- Kersten, C. 2006. "Cambodia's Muslim King : Khmer and Dutch Sources on the Conversion of Reameathipadei I . 1642-1658." *Journal of Southeast Asian Studies*, 37(1), pp.1-22.
- Khin Sok. 1991. *Le Cambodge entre le Siam et le Viêtnam (de 1775 à 1860)*. . Paris :École Française d'Extrême-Orient.
- Kraan, Alfons van der. 2009. *Murder and Mayhem in Seventeenth-Century Cambodia. Anthony van Diemen vs. King Ramadhipati I*. Chiang Mai: Silkworm Books.
- Leclère, A. 1914. *Histoire du Cambodge depuis le 1^{er} de notre ère*. Paris :Paul Geuthner (Reprinted by AMS Press, New York, 1975) .
- Li Tana. 1998. *Nguyen Cochinchina—Southern Vietonam in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*. Ithaca :Cornell Southeast Asia Program Publications.

- MacLeod, N. 1927. *De Oost-Indische Compagnie als Zeemogendheid in Asië. Vol.2 van 1632 tot 1650*. Rijswijk: Blankwaardt & Schoonhoven.
- Mak Phœun. 1988. "La communauté cam au Cambodge du X V^e au X IX^e siècle" *Actes du Seminaire sur le Campā : Organise a l'Universite de Copenhague le 23 Mai 1987*, pp.83-93. Paris :Centre d'Histoire et Civilizations du la Peninsule Indochinoise.
- , 1990 "La communauté malaise musulmane au Cambodge (de la fin du X VI^e siècle jusqu'au roi musulman Râmâdhipatî I er" *Le Monde Indoshinois et Peninsule Malaise*, Kuara Lumpur:Ambassade de la France en Malaisie, pp.47-68.
- , 1995. *Histoire du Cambodge de la fin du X VI^e siècle au début du X VIII^e*, Paris:Presses de l'École Française d'Extrême Orient.
- Mak Phœun et Po Dharma. 1984. "La Première Intervention Militaire Vietnamienne au Cambodge(1658-1659)" *Bulletin de l'École Française d'Extrême Orient* 73, pp.285-318.
- Manguin, P.Y. 2001. "The Introduction of Islām into Champa." in *The Propagation of Islam in the Indonesian-Malay Archipelago* (A.Gordon(ed.and Annotated).Kuala Lumpur:Malaysian Sociological Research Institute, pp.287-328.
- Meilink-Roelofs, M.A.P. 1962. *Asian Trade and European Influence in the Indonesian Archipelago betwen 1500 and about 1630*. The Hague :Martinus Nijhoff..
- Moura, J. 1883a *Le Royaume du Cambodge*. Tome Premier. Paris:Ernest Leroux (Digitally printed version. 2015, Cambridge: Cambridge Univ.Press).
- NISHIO Kanji. 2009. "Political Strategy for Coexistence in Multi-Ethnic Societies : The Concept of Orang Melayu in 18th Century Johor-Riau Sultanate " ISHII Yoneo(ed.) *The Changing Self Image of Southeast Asian Society during the 19th and 20th Centuries*. Tokyo:Toyo Bunko. pp.3-26.
- Reid, A. 1988. *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680. Volume 1 : The Lands below the Winds*. New Haven: Yale University.
- , 1993. *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680 , Volume 2: Expansion and Crisis*. New Haven: Yale University Press
- , 1999. *Charting the Shape of Early Modern Southeast Asia*. Chiang Mai: Silkworm Books.

- , 2001 “Understanding Melayu(Malay) as a Source of Diverse Modern Identities.” *Journal of Southeast Asian Studies*, 32(3), pp.397-421.
- Sutherland, H. 2001. “The Makassar Malays : Adaptation and Identity, c.1660-1790” *Journal of Southeast Asian Studies*, 32(3), pp.397-421.
- Sakurai Yumio and Kitagawa Takako. 1999. “Ha Tien or Banteay Meas in the Time of the Fall of Ayutthaya” in *From Japan to Arabia : Ayutthaya's Maritime Relations with Asia* (Kennon Breazeale(ed.)). Bangkok: Toyota Thailand Foundation.
- Vickery, M. 1977. Cambodia after Angkor, The Chronicular Evidence for the Fourteenth to Sixteenth Centuries. Ann Arbor (Ph.D.dissertation. Yale University.) .
- Vos, R. 1993. *Gentle Janis, Merchant Prince : The VOC and the Tightrope of Diplomacy in the Malay World, 1740-1800* ((tr.)Beverley Jackson), Leiden:KITLV press.
- Winkel, Dr. 1882. “Les Relations de la Hollande avec le Cambodge et la Cochinchine au 17^e siècle”, *Excursions et Reconnaissances* 4, pp.323-345.
- Wong Lin Ken. 1961. “The Trade of Singapore, 1819-69.” *Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society* 33(4), pp.5-307.
- Wong Tze Ken, D. 2004. “Vietnam-Champa Relations and the Malay-Islam Regional Network in the 17th-19th Centuries.” *Kyoto Review of Southeast Asia* 5 (<https://kyotoreview.org/issue-5/vietnam-champa-relations-and-the-malayislam-regional-network-in-the-17th-19th-centuries/> 2017 年 10 月 31 日アクセス
- Yule, H & Burnell, A.C. 2000. *Hobson-Jobson: A Glossary of Colloquial AngloIndian words and phrases, and of kindred terms, etymological, historical, geographical and discursive*, New Delhi (Reprint. (ed.) W.Crooke, B.A.)

日本語文献

- 荒野泰典 2003 「江戸幕府と東アジア」 荒野泰典(編)『江戸幕府と東アジア』日本の時代史 14、吉川弘文館、pp.7-81.
- 石井米雄 1999 「上座仏教世界」 石井米雄・桜井由躬雄(編)『新版世界各国史 5 東南アジア史 I 大陸部』、山川出版社、pp.133-176.
- , 2001 「後期アユタヤ」『岩波講座東南アジア史 3—東南アジア近世の成立』岩波書店、pp.179-203.
- 石井米雄・桜井由躬雄 1985 『東南アジア世界の形成』ビジュアル版世界の歴史 12、講談社

- 石澤良昭 1979 「碑刻史料と歴史考察—カンボジア碑文・チャンパー碑文の事例から—」『南方文化』6、pp.49-87.
- 岩生成一 1953 「近世日支貿易に関する数量的考察」『史学雑誌』62-11, pp.1-40.
 -----. 1966 『南洋日本町の研究』、岩波書店
 -----. 1985 『新版 朱印船貿易史の研究』、吉川弘文館
 -----. 2005 『日本の歴史 14 鎖国』中公文庫（新装改版）（初版：1974 年）
- 上田信 2005 『海と帝国—明清時代』、中国の歴史 09、講談社
 -----. 2013 『シナ海域蜃気楼王国の興亡』、講談社
- 遠藤正之 2010 「カンボジア王ラーマーディパティ 1 世（在位 1642～58）のイスラーム改宗とマレー人の交易活動—オランダ東インド会社との関係をとおして」『東南アジア 歴史と文化』39、pp.28-51.
 -----. 2013 「19 世紀のカンボジアにおけるマレー人観の変容」弘末雅士編『越境者の世界史—奴隷・移住者・混血者』、春風社、pp.214-233.
 -----. 2014 「カンボジア・オランダ東インド会社間通商平和条約締結（1656～57）—カンボジア王権とオランダ東インド会社の交易独占の試みをめぐって」『史苑』74-1、pp.9-34.
- 大川玲子 2017 『チャムパ王国とイスラーム—カンボジアにおける離散民のアイデンティティ』、平凡社
- 大久保翔平 2016 『オランダ東インド会社のアヘン貿易、1667～1780 年—生産・流通・消費—』、東京大学大学院人文社会系研究科修士学位論文（未公開）
- 大庭脩 1999 『徳川吉宗と康熙帝—鎖国下での日中交流』、大修館書店
- 加藤栄一 1993 「17 世紀中葉連合東インド会社の対日交渉と情報伝達網〔第二部〕—ヤハト船リロ号の東京航海をめぐって—」『東京大学史料編纂所紀要』3. pp.1-20.
- 北川香子 1992 「アン・ドゥオン王の道—19 世紀中葉カンボジアの国内ルート再編について—」『南方文化』19、pp.87-116.
 -----. 1994 「ポスト・アンコール期カンボジアの諸タイトルについて」『東南アジア 歴史と文化』23、pp.43-62.
 -----. 1998 「ポスト・アンコールの王城—ロンヴェーク及びウドン調査報告—」『東南アジア 歴史と文化』27、pp.48-72.
 -----. 1999 「ポスト・アンコール」石井米雄・桜井由躬雄(編)『新版世界各国史 5 東南アジア史 I 大陸部』、山川出版社、pp.233-255.
 -----. 2000 「水王の系譜—スレイ・サントー王権史」『東南アジア研究』38(1)、pp.50-73.
 -----. 2001a 「ポスト・アンコール」『岩波講座東南アジア史 4 東南アジア近世国家群の展開』、岩波書店、pp.133-158.

- , 2001b 「ハーティエン」『岩波講座東南アジア史 4 東南アジア近世国家群の展開』、岩波書店、pp.189-209.
- , 2003 「カンボジア年代記」『岩波講座東南アジア史別巻 東南アジア史研究案内』、岩波書店、pp.129-132.
- , 2006 『カンボジア史再考』、連合出版
- , 2008 「カンボジア『王朝年代記』の中のチャーム・チュヴィエ」『南方文化』35、pp.1-16.
- , 2014 「18 世紀クメール語書簡の発見—近藤重蔵関係資料『外国関係書簡』から—」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』、pp.2-14.
- , 2015 「ヨーロッパの船が川を遡ってきた頃—17 世紀カンボジア史再考—」『南方文化』41、pp.37-75.
- グロリエ・ベルナール・フィリップ（石澤良昭・中島節子訳） 1997 『西欧が見たアンコール：水利都市アンコールの繁栄と没落』、連合出版
- 桜井由躬雄 1999a 「ベトナム世界の成立」石井米雄・桜井由躬雄（編）『新版世界各国史 5 東南アジア史 I 大陸部』、山川出版社、pp.194-252.
- , 1999b 「サー（社）」石井米雄（監修）桜井由躬雄・桃木至朗（編）『ベトナムの辞典』、同朋舎、p.149.
- 笹川秀夫 2006 『アンコールの近代—植民地カンボジアにおける文化と政治』、中央公論新社
- 嶋尾稔 2001 「タイソン朝の成立」『岩波講座東南アジア史 4 東南アジア近世国家群の展開』、岩波書店、pp.287-312.
- 鈴木恒之 1992 「パレンバン王権の確立：大航海時代のスマトラ港市国家」石井米雄・辛島昇・和田久徳（編著）『東南アジア世界の歴史的位相』、東京大学出版会、pp.92-108.
- , 2015 「18 世紀前半のパレンバン王国における錫生産と交易—オランダ東インド会社との 1755 年協定と関連して」『史論』68、pp.1-32.
- セデス・ジョルジュ 1980 『インドシナ文明史』（第二版）（辛島昇・桜井由躬雄・内田晶子訳）、みすず書房（初版 1969 年）
- 永積昭 2000 『オランダ東インド会社』、講談社学術文庫
- 永積洋子 1991 「17 世紀の東アジア貿易」『アジア交易圏と日本工業化 1500-1900』浜下武志・川勝平太（編）、リブレポート、pp.103-128.
- , 1999 「東西貿易の中継地台湾の盛衰」『市場の地域史』地域の世界史 9、佐藤次高、岸本美緒（編）、山川出版社、pp.326-366.
- , 2001 『朱印船』日本歴史叢書（日本歴史学会編集）、吉川弘文館
- 奈良修一 2016 『鄭成功—南海を支配した一族』世界史リブレット人 042、山川出

版社

- 西尾寛治 2001 「17 世紀のムラコ諸国—その構造と諸変化」『岩波講座東南アジア史 3—東南アジア近世の成立』、岩波書店、pp.151-177.
- 早瀬晋三 2003 『海域イスラーム社会の歴史』、岩波書店
- 久光由美子 1975a 「16 世紀におけるカンボジアと阮氏ヴェトナムの接触について—カンボジア年代記を中心として—」『南島史学』6、pp.26-39.
- , 1975b 「カンボジア、ソル王（1675～1715 在位）時代の国際関係」『お茶の水史学』19、pp.20-38.
- 弘末雅士 1999 「交易の時代と近世国家の成立」池端雪浦(編)『新版世界各国史 6 東南アジア史Ⅱ 島嶼部』、山川出版社、pp.82-137.
- , 2004 『東南アジアの港市世界—地域社会の形成と世界秩序』、岩波書店
- 藤原貞朗 2008 『オリエンタリストの憂鬱—植民地主義時代のフランス東洋学者とアンコール遺跡の考古学』、めこん
- 藤原利一郎 1986 『東南アジア史の研究』、法蔵館
- 桃木至朗 1999 「新しい歴史—東南アジアとチャンパから」『チャンパー—歴史・末裔・建築』桃木至朗・樋口英夫・重枝豊、めこん、pp.11-96.
- , 2011 『中世大越国家の成立と変容』、大阪大学出版会
- 八尾隆生 2001 「収縮と拡大の交互する時代—16～18 世紀のベトナム」『岩波講座東南アジア史 3—東南アジア近世の成立』、岩波書店、pp.233-259.
- 山田憲太郎 1982 『南海香薬譜—スパイス・ルートの研究』、法政大学出版局
- 山脇悌二郎 1980 『長崎のオランダ商館—世界の中の鎖国日本』、中公新書 579

